

第一條 北海道廳鐵道書記ハ内務大臣定ムル所ノ試験規則ニ依リ任用スルコトヲ得

第二條 明治二十六年勅令第九十五號及同三十年勅令第二百八十二號ニ依リ鐵道書記補ニ任用セラレ滿二年以上其ノ職ニ在ル者又ハ在リタル者ハ文官普通試験委員ノ銓衡ヲ經テ北海道廳鐵道書記ニ任用スルコトヲ得

○ 島司特別任用方明治二十六年十月勅令第九十號

朕島司特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

島司ノ任用ニ就テハ明治二十三年勅令第九號ヲ適用ス

○ 郡區長任用方明治二十三年二月勅令第九號

朕郡區長任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 郡區長ハ五箇年以上官務ニ從事シ判任官「五等以上」ノ現職ニ在ルモノニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

第二條 郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ郡區長ニ任用シタル者他ノ道廳府縣ノ郡區長ニ轉任スルトキハ更ニ郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經ヘシ

二十年内務省令第五號ヲ以テ郡區長試験規則ヲ定ム

第三條 郡區長試験委員長ノ銓衡ヲ經テ任用シタル郡區長ハ高等試験ヲ經ルニアラザレハ他ノ高等官ニ轉任スルコトヲ得ス

○ 郡區長ハ當分内務大臣ノ指定科目ニ依リ試験ス明治二十年七月勅令第二十號

地方現今ノ情況ニ依リ郡區長ノ試験ハ學術ニ偏セス實務ヲ旨トシテ專ラ其地ノ狀勢民情及利害ニ通曉スル者ヲ選任スヘキ必要アルヲ以テ郡區長ノ試験科目ハ當分ノ内地方ノ實況ヲ斟酌シテ内務大臣ノ指定スル所ニ依ル

但郡區長ハ高等試験ヲ經タル者ニ非レハ他ノ高等官ニ轉スルコトヲ得ス

○ 郡區長特別任用ノ制限明治二十四年十一月勅令第二百三十七號

朕郡區長府縣參事官典獄警視特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 明治二十三年二月勅令第九號第一條ニ依リ郡區長ニ任用スル判任官ハ現ニ五級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限ル

第二條 「明治二十三年十月勅令第二百二十七號第一條ニ依リテ府縣參事官並典獄ニ任用スル判任官ハ現ニ四級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限ル」

第三條 「明治二十四年四月勅令第三十七號第一條ニ依リ警察署長ニ補スヘキ警視ニ任用スル判任

三十二年勅令第三百四十七號ニ依リ消滅
三十二年勅令第三百四十七號ニ依リ消滅
三十二年勅令第三百四十七號ニ依リ消滅
別第三號警視特別任用ニ依リ消滅

官ハ現ニ四級以上ノ俸給ヲ受クル者ニ限ル

○警視特別任用方明治三十二年
勅令第三號

沿革略記

明治二十四年四月勅令第三十七號ヲ以テ警視特別任用方ヲ定ム●三十年四月勅令第九十號ヲ以テ北海道警視特別任用方ヲ定ム●三十二年一月勅令第三號ヲ以テ前二令ヲ廢シ更ニ警視特別任用ノ件ヲ制定ス

朕警視特別任用ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

警察署長ニ補スヘキ警視ハ五箇年以上警察ニ關スル職務ニ從事シ判任官五級俸以上ノ官職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得(三十三年勅令第二百四十五號ヲ以テ改正)

○集治監典獄廳府縣典獄集治監分監長特別任用令明治三十二年二月
勅令第三十五號

沿革略記

明治二十三年十月勅令第二百二十七號ヲ以テ府縣典獄特別任用令ヲ定ム●二十四年七月勅令第百十三號ヲ以テ北海道集治監分監長及北海道典獄特別任用令ヲ定ム●二十八年七月勅令第百一號ヲ以テ警視廳典獄特別任用方ヲ定ム●同年同月勅令第百二號ヲ以テ集治監典獄特別任用方ヲ定ム●三十二年二月勅令第三十五號ヲ以テ集治監典獄廳府縣典獄集治監分監長特別任用令ヲ制定ス由テ前四勅令ハ消滅ス

朕集治監典獄廳府縣典獄集治監分監長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

集治監典獄廳府縣典獄及集治監分監長ハ三年以上監獄事務ニ從事シ集治監典獄ニ在テハ判任官三級俸以上廳府縣典獄集治監分監長ニ在テハ判任官五級俸以上ノ現職ニ在ル者ニ限リ當分ノ内試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

○警視廳北海道廳府縣稅務管理局專賣局及集治監判任官低額俸給支給ノ者特別任用方明治二十六年
勅令第六號

朕警視廳北海道廳府縣及集治監判任官中月俸十二圓未滿ノ者特別任用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 警視廳、北海道廳、府縣、島廳郡縣稅務管理局專賣局及集治監判任官中月俸十五圓未滿ノ者ハ試験ヲ要セス文官普通試驗委員ノ銓衡ヲ經テ任用スルコトヲ得(二十九年勅令第三百四十四號三十年勅令第百四號三十二年勅令第三百二十三號及三十二年勅令第七十一號ヲ以テ改正)

第三條 前條ニ依リ任用シタル判任官ニシテ滿三年以上勳績シ現ニ其ノ職ヲ奉スル者ハ月俸十五圓以上ノ其ノ應到任官ニ任用スルコトヲ得(三十二年勅令第三百二十三號ヲ以テ改正)

附則

第三條 本令ハ明治二十六年十一月十日ヨリ施行ス

○警部監獄書記看守長特別任用令明治三十年六月
勅令第二百五號

朕警部監獄書記看守長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二十五號 警視廳北海道廳府縣稅務管理局專賣局及集治監判任官低額俸給支給ノ者特別任用方

警部監獄書記看守長特別任用令

第一條 巡查看守在職三箇年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其ノ職ヲ奉スル者ハ實務ノ成績ヲ考査シ及學術ヲ試験シ巡查ハ警部消防士ニ看守ハ監獄書記看守長ニ任用スルコトヲ得(三十二年勅令第三百五十一號ヲ以テ消防士ノ三字ヲ追加ス)

巡查ニ關スル考査及試験ハ警視廳ニ在テハ本廳勤務ノ警視三人、北海道廳府縣ニ在テハ書記官警部長參事官、看守ニ關スル考査及試験ハ集治監ニ在テハ典獄、警視廳ニ在テハ警視二人、第四部長、北海道廳府縣ニ在テハ書記官參事官典獄之ヲ行フ但シ北海道廳ニ在テハ書記官參事官ノ内各一人トス

第一項ニ依リ任用セラレタル警部消防士ハ互ニ轉任スルコトヲ得(三十二年勅令第三百五十一號ヲ以テ本項追加)

第二條 考査ノ方法及試験ノ科目ハ内務大臣「拓殖務大臣」之ヲ定ム

第三條 明治二十三年勅令第四百十六號ニ依リ任用セラレタル看守長ハ監獄書記ニ轉任スルコトヲ得

第四條 明治二十三年勅令第十號及明治二十三年勅令第四百十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○清國及朝鮮國在勤警部特別任用令明治二十九年三月勅令第二十七號

朕清國及朝鮮國在勤警部特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

清國及朝鮮國在勤警部特別任用令

第一條 公使館書記生又ハ領事館書記生タルノ資格ヲ有スル者ハ清國又ハ朝鮮國在勤警部ニ任用スルコトヲ得

前項ニ依リ任用シタル警部ニシテ在職滿二年以上ノ者ハ外務省判任官ニ任用スルコトヲ得

第二條 清國及朝鮮國在勤巡查ニシテ滿三年以上奉職シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官普通試驗委員ノ詮衡ヲ經テ同國在勤警部ニ任用スルコトヲ得

○外國在勤警部巡查任用及支給規則明治二十五年二月勅令第十四號

朕茲ニ朝鮮國在勤警部巡查任用及支給規則ヲ裁可ス

外國在勤警部巡查任用及支給規則

第一條 外國在勤警部及巡查ハ外務大臣之ヲ任命ス(三十一年勅令第三百四十四號ヲ以テ朝鮮國トアルヲ清國及韓國ト改メ三十二年勅令第八十五號ヲ以テ更ニ外國ト改ム以下同)

第二條 外國在勤警部ノ任用ハ一般判任官ノ任用法ニ從フ

外國在勤巡查ノ任用法ハ外務大臣之ヲ定ム

第三條 外國在勤警部及巡查ハ其ノ國駐劄帝國公使又ハ其ノ國各地駐在帝國領事又ハ其代理者ノ指

第四條 外國在勤警部及巡查ハ引續三箇年間勤務スヘキモノトス

押監督ニ屬ス(三十二年勅令第八十五號ヲ以テ同ヲ其ノニ改ム)

傷疾若クハ疾病ニシテ職務ニ從事スルコト能ハサルモノト認ムルトキハ外務大臣ハ前項ノ期限ニ拘ラス其辭職ヲ許可スルコトヲ得

第五條 外國在勤警部巡查三箇年以上勤績シタルトキハ外務大臣ハ公務差支ナキ場合ニ限リ本人ノ願ニ依リ往復日數ヲ除キ警部ハ三箇月巡查ハ二箇月以内賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

第六條 外國在勤巡查ニシテ其職務執行ニ關スル規則又ハ上官ノ命令ニ違背シ又ハ職務上怠慢アルトキハ公使又ハ領事ニ於テ其情狀ヲ審案シ月俸百分ノ一以上一箇月分以下ノ罰俸ヲ科ス但犯狀最モ輕キ者ハ譴責ニ止ム

犯狀重クシテ公使又ハ領事ニ於テ其職ヲ免スルヲ擔當ト認メタルトキハ其情狀ヲ外務大臣ニ具申スヘシ

第七條 前條ニ依リ罰俸ヲ科シタルトキハ月俸三分ノ一以内ノ額ヲ毎月俸給ヨリ控除シテ完納セシム罰俸完納前ニ於テ本人其職ヲ免セラレ又ハ死亡シタルトキハ之ヲ追徴スルコトナシ

第八條 外國在勤警部ノ月俸ハ明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ニ依ル

外國在勤巡查ノ月俸ハ九圓乃至十五圓トス但俸給支給方ハ前項ニ同シ(三十二年勅令第百八十五號ヲ以テ八圓ヲ九圓ニ改ム)

第九條 外國在勤警部及巡查ニハ月俸ノ外任地着翌日ヨリ任地出發前日マテ在勤月手當ヲ給ス其金額左ノ如シ(二十九勅令第百八十四號三十二年勅令第百八十五號及以テ本項追加)

警部 一箇月七十五圓以内

巡查 一箇月二十五圓以内

巡查ニシテ官舍外ニ居住セシムル者ニハ前項在勤月手當ノ外一箇月二圓ノ宿舍料ヲ給ス但一箇月未滿ノ日數ニ係ル分ハ日割ヲ以テ計算ス(二十九勅令第百八十五號ヲ以テ本項追加)

第九條ノ二 外國在勤警部巡查ニシテ轉勤若クハ歸朝ヲ命セラレ又ハ賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニハ左ノ手當ヲ給ス但歸朝ヲ命セラレタル者赴任スルトキ亦同シ(二十九勅令第百八十四號ヲ以テ本條及次項ト改ム)

警部 六十圓以内

巡查 二十圓以内

轉勤若クハ歸朝ヲ命セラレタル者ニシテ出發前其ノ命令ヲ取消サレタルトキハ前項手當ノ半額以内ヲ給スルコトヲ得賜暇歸朝ヲ許サレタル者ニシテ出發前其ノ許可ヲ取消サレタルトキ亦同シ但本項ノ場合ニ於テ死亡シタルトキハ其ノ全額以内ヲ給スルコトヲ得

第十條 臨時ノ須要ニ依リ外國在勤巡查ニ代用スル傭員ニハ月俸拾圓以内ヲ給シ在勤手當ヲ給セス

第十一條 外國在勤警部巡查ノ旅費ハ支度料、人馬船車料及日當トシ左ノ各項ニ依リ赴任公用歸朝、賜暇歸朝其他公務ヲ帶ヒ旅行スル場合ニ於テ之ヲ支給ス(二十九勅令第百八十五號ヲ以テ各號トモ改正)

一 支度料ハ新ニ任用セラレタル者赴任ノトキニ限リ左ノ範圍内ニ於テ外務大臣相當ノ額ヲ定メ之ヲ給ス外國ニ於テ新ニ任用セラレタル者就職スルトキ亦同シ其赴任前死亡又ハ官ノ都合ニ依リ其官職ヲ免セラレタル者ニハ其半額ヲ給ス

警部 百五十圓以内(三十二年勅令第百八十五號ヲ以テ百圓ヲ百五十圓ニ改ム)

巡查 五十圓以内

- 二 人馬船車料ハ外務大臣大藏大臣ト協議シテ定ムル所ノ定額ニ依リ之ヲ給ス其定額ナキ場合ニ於テハ實費ヲ給ス但汽車汽船等ノ實費ヲ給スルトキ其料金ニ等差アルトキハ警部ニハ一等巡查ニハ二等ノ額ヲ給ス
- 三 日當ハ別表ニ依リ之ヲ給ス別表中規定ナキ場合ニ於テハ往返一日ヲ超エタル者ニ限リ出發ノ日ヨリ到著ノ日マテ其日數ニ應シ一日ニ付警部ニハ五圓巡查ニハ二圓ノ割合ニ依リ陸路ニ在テハ其全額海路ニ在テハ警部ニハ其ノ十分ノ三巡查ニハ其ノ十分ノ五ヲ給ス但海陸兩路ニ跨ルノ日及海路ト雖別ニ其食料ノ支拂ヲ要スルトキハ全額ヲ給ス(三十二年勅令第百八十五號ヲ以テ本號中改正)
- 四 非常急行ノ命令ヲ受ケタルトキ及己ムヲ得サル場合ヲ除ク外陸路ニ在テハ一日ノ行程十二哩ニ滿タサルトキ又ハ人馬船車料定額アル場所ニ旅行スルニ現ニ其支拂ヲ要セサルトキハ人馬船車料ヲ給セス
- 五 人馬船車料定額及別表ノ日當ヲ給スル場合ノ外本邦内ニ旅行又ハ滯留スルトキハ人馬船車料日當ハ内國旅費規則ニ依リ之ヲ給ス但巡查ハ雇員ノ例ニ依ル
- 六 別表ノ日當ヲ給スル場合ニ於テ特別ノ命令ニ依リ又ハ己ムヲ得サル事故ノ爲メ中途ニ滯留シ豫定ノ日數ヲ超過シタルトキハ其超過ノ日數ニ對シ本邦内ニ在テハ内國旅費規則外國ニ在テハ本令ニ依リ日當ヲ給ス但巡查ニ關シ本邦内ニ於テハ前項ノ例ニ依ル
- 七 旅行中ニ死亡シタル者ニハ人馬船車料定額及別表ノ日當ヲ給ス但人馬船車料ハ定額ナキ場合

ニハ既ニ支拂タル金額、日當ハ別表ニ規定ナキ場合ニハ死亡ノ日マテノ金額ヲ給ス

八 任所ニ於テ「非職」ヲ命セラレタル者又ハ旨ヲ諭シ其官職ヲ免セラレタル者ニハ其命令到達ノ

日ヨリ二週間以内ニ出發歸朝スルトキハ本官若クハ前官職相當ノ人馬船車料及日當ヲ給ス但

二週間ノ期限ハ交通不便ノ地ニ於テハ現ニ出發スルコトヲ得ル日ヨリ起算ス

九 東京外ニ於テ任用セラレタル者ニハ其現住地ヨリ任所マテノ旅費ヲ給ス歸朝中轉勤ヲ命セラレタル者ニハ本邦新任所間ノ人馬船車料及日當ヲ給ス

第十二條 特ニ危険ヲ冒シテ旅行セシムル場合ニ於テ外務大臣至當ト認ムルトキハ本令ノ日當ヲ四割以内増額スルコトヲ得(二十九勅令第三百八十二號ヲ以テ改正)

第十三條 外國在勤警部外國在勤中又ハ任所往返中死亡シタルトキハ死亡賜金ノ外在勤手當三箇月分ヲ其ノ遺族ニ給ス(三十二年勅令第百八十五號ヲ以テ本條ヲ追加以下順次繰下シ)

第十四條 外國在勤巡查又ハ其遺族ニハ左ノ諸項ニ依テ給助ヲ爲ス

第一 勤績四年ニシテ退職スル者ハ一時金貳拾五圓ヲ給ス四年以上九年マテハ一年毎ニ金十圓ヲ増給ス勤績十年ニシテ退職ノ者ニハ一時金百圓ヲ給シ十年以上ハ一年毎ニ金拾五圓ヲ増給ス

同上ノ年限間勤績シテ死亡シタルトキハ各同上ノ金額ヲ其遺族ニ給ス

第二 職務ノ爲メ負傷又ハ疾病ニ罹ル者ハ傷痍又ハ病症ノ輕重ニ依リ適宜療治料ヲ給ス

第三 職務ノ爲メ負傷シ終身不具トナリタル者ハ一時金百圓以上百五十圓以下ニ於テ適宜之ヲ

給ス

第四 職務ノ爲メ死亡シタルトキハ第一項賜金ノ外一時金二百圓ヲ其遺族ニ給ス

第五 任所若クハ赴任途中ニ於テ死亡シタル者ニハ其地ヨリ東京マテノ人馬船車料ノ額ヲ手當トシテ其遺族ニ給ス(三十九年勅令第三百八十二號ヲ以テ追加)

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ給助ヲ爲サス

第一 他ノ報酬ヲ受クヘキ官職ニ轉シタルトキ

第二 懲罰ニ依リ免職セラレタルトキ

第十五條 明治十九年外務省令第二號朝鮮國在勤巡查給與規則ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十七條 本令ノ施行ニ關スル細則ハ外務大臣之ヲ定ム(三十九年勅令第三百八十二號ヲ以テ追加)

(別表略之)(三十二年勅令第三百八十五號ヲ以テ本表改正)

二十九
省令第六號
以テ本令ノ施行細則ヲ定ム

○官吏ノ勤績方明治二十六年十月勅令第九十八號

朕官吏ノ勤績ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

廢官廢廳若クハ官名改定ノ際其ノ廢改ニ係ル官職ニ在ル者即日他官ニ任セラルトキハ勤績者トス

○文官分限令明治三十二年三月勅令第六十二號

沿革略記 明治十七年一月第三號達ヲ以テ官吏非職條例ヲ定ム○二十二年十二月勅令第二百八十六號ヲ以テ技師官休職令ヲ定ム○三十二年三月勅令第六十二號ヲ以テ文官分限令ヲ定ム官中非職條例及技師官休職令ヲ廢止ス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官分限令

第一條 本令ハ親任式ヲ以テ叙任スル官、公使、祕書官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外一般ノ文官ニ適用ス

第二條 官吏ハ刑法ノ宣告、懲戒ノ處分又ハ本令ニ依ルニ非サレハ其ノ官ヲ免セラルルコトナシ

第三條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ官ヲ免スルコトヲ得

一 不具、廢疾ニ因リ又ハ身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルニ堪ヘサルトキ

二 傷病ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ免官ヲ願出タルトキ

三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

前項第一號ニ依リ其ノ官ヲ免スルトキハ高等官ニ在テハ文官高等懲戒委員會、判任官ニ在テハ文官普通懲戒委員會ノ審査ニ付ス

第四條 官吏ハ廢官若ハ廢廳ノ場合ニ於テハ當然退官者トス

第五條 第十一條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレ滿期ニ至リタルトキハ當然退官者トス

ス

第六條 官吏ハ其ノ意ニ反シテ同等官以下ニ轉官セラルルコトナシ

第七條 文官高等懲戒委員會ニ顧問醫二人ヲ置ク

審査上必要ノ場合ニ於テハ臨時顧問醫ヲ加フルコトヲ得

第八條 文官普通懲戒委員會ニ臨時顧問醫ヲ置ク

第九條 懲戒委員會ハ本令ニ依ル審査ヲ爲ス前豫メ顧問醫ノ意見ヲ徵スヘシ

第十條 第三條第二項ニ依ル懲戒委員會ノ審査ニ關シテハ文官懲戒令第十二條第十三條第二十四條

第二十五條第二十九條乃至第三十四條ノ規定ヲ準用ス

第十一條 官吏左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ休職ヲ命スルコトヲ得

一 懲戒令ノ規定ニ依リ懲戒委員會ノ審査ニ付セラレタルトキ

二 刑事事件ニ關シ告訴若ハ告發セラレタルトキ

三 官制又ハ定員ノ改正ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

四 官廳事務ノ都合ニ依リ必要ナルトキ

前項休職ノ期間ハ第一號及第二號ノ場合ニ在テハ其ノ事件ノ懲戒委員會又ハ裁判所ニ繫屬中トシ

第三號及第四號ノ場合ニ在テハ滿三年トス

第十二條 休職者ハ其ノ本官ヲ奉シテ職務ニ從事セス其ノ他總テ在職官吏ト異ナルコトナシ

前條第一項第三號及第四號ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ本屬長官ハ事務ノ都合ニ依リ何時ニ

テモ復職ヲ命スルコトヲ得

第十三條 第十一條ニ依リ休職ヲ命セラレタル者ニハ其ノ休職中俸給ノ三分ノ一ヲ給ス

第十四條 免官ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣、奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官奏請

シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

休職ハ勅任官ニ在テハ内閣總理大臣奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行ヒ奏任官ニ在テハ内閣總理大臣ノ認

可ヲ經テ本屬長官之ヲ命ス其ノ復職ヲ命スルトキ亦同シ

附 則

第十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏非職條例、明治二十三年勅令第二百八十六號其ノ他從前ノ命令ニシテ本令ノ規定ニ抵觸スル

モノハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十六條 本令施行前官吏非職條例又ハ明治二十三年勅令第二百八十六號ニ依リ非職又ハ休職ヲ命

セラレ未タ滿期ニ至ラサル者ハ本令第十一條第一項第四號ノ休職者ニ關スル規定ヲ適用ス但シ本

令第十三條ハ此ノ限ニ在ラス

第十七條 本令中休職トアルハ他ノ法令ニ於テ規定スル非職ト看做ス

○

○陸軍將校分限令明治二十一年十二月

勅令第九十一號

第二十四年勅令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令
陸軍將校分限令
海軍將校分限令

陸軍將校分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍將校分限令

第一條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之ヲ將校ノ分限トス

第二條 將校ハ左ニ掲クル事項ノ一ニ因ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ

第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セラレタルトキ

第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

第四 刑官ノ宣告ヲ受ケタルトキ

第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ

第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

第三條 將校ノ位置ヲ分ツコト左ノ如シ

第一 現役

第二 豫備

第三 後備

第四 退役

第四條 現役トハ現ニ軍務ヲ奉スル者修學ヲ命セラレタル者及陸軍將官各其部内ノ文官ニ任セラレタル者ヲ云フ休職及停職ニ在ル者ハ現役ニ準ス

休職トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ因リ職務ナキ者ヲ云フ

一 解隊

二 廢職

三 定員改正

四 満期解任

五 俘虜トナリタル者歸朝シ他員己ニ代リテ其職ニ在ルトキ

六 特別ノ職務ヲ終ヘ又ハ修學満期ニシテ就職ノ命ナキトキ

七 傷痕若クハ疾病六箇月ニ至リ尙恢復ノ候ナキトキ但本人ノ請願或ハ職務ニ因リ代員ヲ必要トスルトキハ六箇月ヲ待ツノ限ニアラス

八 本人ノ請願ニ依リ修學ヲ許容シタルトキ

九 陸軍上長官士官各其部内ノ文官ニ專任シタルトキ

停職トハ其行爲懲戒スヘキコトアリ其情狀稍輕ク在職又ハ就職ヲ停メラル、者ヲ云フ但停職者ハ一箇年ノ後ニ非サレハ就職スルコトヲ得ス

第五條 豫備トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ヲ云フ(二十六年勅令第百二十五號ヲ以テ第五號ヲ改正シニ十八年勅令第百七號ヲ以テ本項並ニ各號トモ改正ス)

第一 旨ヲ諱サレ現役ヲ退キタルトキ

第二 休職ニ入り五年ニ至リ就職セサルトキ但第四條第二項ノ第八第九ニ該ル者ハ此ノ限ニアラス

- 第三 停職ニ入り二年ニ至リ就職セサルトキ
- 第四 陸軍各部外ノ文官ニ專任シタルトキ
- 第五 貴族院令第四條ニ依リ貴族院議員ト爲リタルトキ
- 第六 一年志願兵ヨリ士官ニ任セラレタルトキ
- 第七 豫備准士官下士ニシテ士官ニ任セラレタルトキ
- 第六條 後備トハ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ヲ云フ(二十八年勅令第四百七號ヲ以テ本項並ニ各號トモ改正ス)
 - 第一 年齢満限ニ至リ現役ヲ退キタルトキ
 - 第二 豫備満期ニ至リタルトキ
 - 第三 後備准士官下士ニシテ士官ニ任セラレタルトキ
 - 第七條 退役トハ後備満期ニ至リタル者又ハ傷痍疾病ノ爲メ永久服役ニ堪ヘスシテ現役又ハ後備又ハ後備ヲ退キタル者ヲ云フ
 - 第八條 豫備後備者ハ召集ニ應スヘキモノトス
 - 豫備後備ノ服役年期ハ別ニ之ヲ定ム(二十八年勅令第四百七號ヲ以テ本項追加)
 - 第九條 本令ハ將校相當官ニ適用ス
- 附 則
- 第十條 陸軍將校免黜條例將官退職令及海軍將校准將校免黜條例ハ廢止ス
- 第十一條 陸軍將校免黜條例「及海軍將校准將校免黜條例」ニ依リ待命若クハ非職タリシ者ノ位置ハ

左ノ通之ヲ定ムヘシ

- 一 待命ノ者ハ休職トス但陸軍將官ニシテ現ニ陸軍部外ノ文官ニ專任ノ者ハ豫備トス
- 二 非職ノ者ハ休職トシ其停職解職ニ因テ非職タリシ者ハ停職トシ其年數ハ各非職タリシ當日ヨリ起算ス但定期ノ年數ヲ越エタル者ハ豫備トス
- 三 「海軍將校ニシテ現ニ海軍部外ノ文官ニ專任ノ者ハ豫備トス」
- 第十二條 「海軍將校ニシテ年齢満限ニ依リテ退職能役ノ者ハ後備トス」

○海軍將校分限令明治二十四年七月勅令第七十九號

朕陸海軍將校分限令中海軍將校分限ニ關スル件ヲ廢シ海軍將校分限令制定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍將校分限令

- 第一條 海軍將校トハ大將中將少將大佐中佐少佐大尉中尉少尉ヲ云フ(三十年勅令第四百三十九號ヲ以テ條中ニ中佐中尉ヲ加フ)
- 第二條 將校ハ終身其官ヲ保有シ其制服ヲ著シ其官ニ對スル禮遇ヲ享ク之ヲ將校ノ分限トス
- 第三條 將校ハ左ニ掲クル事項ノ一ニ依ルニ非レハ其分限ヲ失フコトナシ
 - 第一 本人ノ請願ヲ許容シ其官ヲ免セラレタルトキ
 - 第二 日本人タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

第三 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

第四 剝官ノ宣告ヲ受ケタルトキ

第五 禁錮ニ處セラレ其官ヲ失ヒタルトキ

第六 武官タルノ本分ニ背キ勅裁ニ依リ免官トナリタルトキ

第四條 本令ハ將校相當官ニ適用ス(三十二年勅令第六十六號ヲ以テ第十條ヲ第四條ニ改ム)

第四條乃至第九條及第十一條(三十二年勅令第六十號ヲ以テ削除ス)

○海軍准士官分限明治三十二年三月勅令第六十七號

朕海軍准士官ノ分限ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

海軍准士官ノ分限ニ關シテハ海軍將校分限令ヲ準用ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

○

○理事分限令明治二十八年九月勅令第二百五號

朕理事分限令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

理事分限令

第一條 理事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ依ルニアラサレハ其ノ意ニ反シ免官轉官セララル、コトナシ

理事ヲ兼任スル者ハ其ノ本官在職中前項ヲ適用ス

第二條 左ノ場合ニ於テハ理事ニ非職ヲ命スルコトヲ得

一 戰時若クハ事變ニ際シ臨時ノ必要ニ應シ増員シ其必要止ミ平時ノ定員ニ復スルトキ

二 制度ノ變更ニ因リ過員ヲ生シタルトキ

三 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ六箇月ニ至リ尙恢復ノ候ナキトキ但本人ノ情願ニ依ルトキ又ハ

代員ノ必要アルトキハ六箇月ヲ待ツノ限ニアラス

第三條 理事左ノ事項ニ當ルトキハ豫備トス

一 現職若クハ非職中他ノ文官ニ專任シタルトキ

二 非職滿期トナリタルトキ

第四條 理事非職中ハ其ノ俸給三分ノ一ヲ給ス但「官吏非職條例第七條」ノ許可ヲ得タル者ニハ之ヲ給セス

第五條 豫備理事ハ戰時若クハ事變ニ際シ必要ニ應シ現職ニ復スルノ義務アリ其ノ必要止ムトキハ豫備ニ復ス

第六條 理事年齢六十年ニ滿ルトキハ退職トス

現職ノ理事前項ノ年齢ニ達スルモ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ陸軍大臣特ニ留任ヲ命スルコトア

ルヘシ

第七條 理事身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ニ堪ルコト能ハサルニ至リタルトキハ勅任官ハ上裁ニ依リ奏任官ハ陸軍大臣之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第八條 理事豫備又ハ退職ト爲リタルトキハ退官者ト同視シ明治二十三年勅令第九十八號ニ依リ退官賜金ヲ給ス

第九條 理事ハ現職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

- 一 公然政治ニ關係スルコト
- 二 政黨ノ黨員政社ノ社員ト爲リ又ハ帝國議會府縣郡市町村會議員ト爲ルコト
- 三 俸給アル公務ニ就キ又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト
- 四 商業其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○

○公立學校職員休職明治二十七年八月勅令第四百四十一號

朕公立學校職員休職ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 學校編制ノ變更事務ノ伸縮等ニ依リ其ノ人ヲ要セサル場合其ノ他傷痍疾病等ノ事故アル場

合ニ於テハ地方長官ハ公立學校職員ニ休職ヲ命スルコトヲ得

豫備後備ノ軍籍ニ在ル公立學校職員戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ當然休職ヲ命セラレタルモノトス

第一項ニ依ル休職ノ期限ハ一箇年トシ第二項ニ依ル休職ノ期限ハ其ノ事故止ミタメ後尙三箇月トス

第二條 休職ノ期限滿ツルトキハ當然退職者トス

第三條 休職者ハ職務ニ從事セス及俸給ヲ減セラレ又ハ全ク之ヲ受ケサルノ外總テ本職者ト異ルコトナシ

附則

第四條 本令ハ市町小村立學校教員ニ適用セス

第五條 明治二十七年六月五日以後本令施行以前ニ召集セラレタル者ハ其ノ召集ノ日ヨリ休職ヲ命セラレタルモノトス

○

○會計検査官退官ノ件明治二十九年五月法律第九十一號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル會計検査官退官ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 會計検査官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ之ニ退官

ヲ命スルコトヲ得

第二條 退官ハ會計検査官會議ノ決議ニ依リ之ヲ決定ス

第三條 會計検査官會議ハ會計検査院長ヲ以テ議長トス院長ニ對スル退官ノ申立アルトキハ會計検査院部長中上席者ヲ以テ議長トス

議長事故アルトキハ會計検査院部長中上席者之ヲ代理ス

第四條 會計検査官會議ハ現員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ決議ヲ爲スコトヲ得ス

會計検査官會議ノ決議ハ過半数ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第五條 會計検査院部長及検査官ニ對スル退官申立ハ會計検査院長之ヲ爲シ院長ニ對シテハ部長會議ノ上之ヲ爲ス

第六條 會計検査官第一條ニ依リ退官ヲ命セラレタルトキハ官吏恩給法ニ於テ同法第二條ニ掲クル事項ニ該リタル者ト同視ス

○豫備後備ノ軍籍ニ在ル巡查看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命ス

明治二十七年七月
勅令第八十八號

朕豫備後備ノ軍籍ニ在ル巡查看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

豫備後備ノ軍籍ニ在ル巡查看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ其ノ間休職ヲ命スルコトヲ得但俸給ヲ支給セス
休職中ノ日數ハ在職年數ニ算入ス

○豫備後備ノ軍籍ニ在ル陸海軍監獄看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命ス

明治二十七年八月
勅令第五百一十二號

朕豫備後備ノ軍籍ニ在ル陸軍監獄看守、海軍監獄看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

豫備後備ノ軍籍ニ在ル陸軍監獄看守及海軍監獄看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ明治二十七年勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○豫備後備ノ軍籍ニ在ル貴族院衆議院ノ守衛ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命ス

明治二十七年八月
勅令第五百一十二號

朕豫備後備ノ軍籍ニ在ル貴族院及衆議院ノ守衛ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第二十五號

豫備後備ノ軍籍ニ在ル陸海軍監獄看守ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ニ休職ヲ命スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

九月六十一

豫備後備軍籍ニ在ル貴族院及衆議院ノ守衛ニシテ戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルトキハ明治二十七年勅令八十八號ノ規程ヲ適用ス

○勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○勅令第八十八號ノ規程ヲ適用ス

○官吏服務紀律 勅令第三十九號

沿革記 明治十五年七月第四十四號勅令ヲ以テ行政官吏服務紀律ヲ定ム○同年同月第四十五號勅令ヲ以テ行政官吏服務紀律

八年第六十五號勅令ヲ以テ官定

一 官吏服務紀律

第一條 凡ソ官吏ハ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ法律命令ニ從ヒ各其職務ヲ盡スヘシ

第二條 官吏ハ其職務ニ付本屬長官ノ命令ヲ遵守スヘシ但其命令ニ對シ意見ヲ述ルコトヲ得

第三條 官吏ハ職務ノ内外ヲ問ハス廉耻ヲ重シ貪汚ノ所爲アルヘカラス

第四條 官吏ハ已ノ職務ニ關スルト又ハ他人ノ官吏ヨリ聞知シタルトヲ問ハス官ノ機密ヲ漏洩スルコトヲ禁ズ其職ヲ退ク後ニ於テモ同様トス

第五條 官吏ハ私ニ職務上未發ノ文書ヲ關係人ニ漏示スルコトヲ禁ズ

第六條 官吏ハ本屬長官ノ許可ナクシテ擅ニ職務ヲ離レ及職務上居住ノ地ヲ離ル、コトヲ得ス
 第七條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ營業會社ノ社長又ハ役員トナルコトヲ得ス
 第八條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ其職務ニ關シ慰勞又ハ謝儀又ハ何等ノ名義ヲ以テ
 スルモ直接ト間接トヲ問ハズ總テ他人ノ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
 官吏外國ノ君主又ハ政府ヨリ授與セントスル所ノ勳章榮賜俸給並贈遺ヲ受クルニハ天皇陛下ノ裁
 可ヲ要ス

第九條 左ニ掲ケタル者ト直接ニ關係ノ職務ニ居ルノ官吏ハ其饗燕ヲ受クルコトヲ得ス
 一 官廳ノ工事ヲ受負フ者
 一 官廳ノ爲替方又ハ出納ヲ引受クル者
 一 官廳ノ補助金ヲ受クル起業者
 一 官廳ノ用品ヲ調達スル者
 一 官廳ト諸般ノ契約ヲ結フ者

第十條 凡ソ上官タル者ハ職務ノ内外ヲ問ハズ所屬官吏ヨリ贈遺ヲ受クルコトヲ得ス
 第十一條 官吏並ニ其家族ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ直接ト間接トヲ問ハズ商業ヲ營ムコ
 トヲ得ス

第十二條 官吏ハ取引相場會社ノ社員タルコトヲ得ス及間接ニ相場商業ニ關係スルコトヲ得ス
 第十三條 官吏ハ本屬長官ノ許可ヲ得ルニ非サレハ本職ノ外ニ給料ヲ得テ他ノ事務ヲ行フコトヲ得

第十四條 浪費シテ産ヲ破リ其分ニ應セザル負債ヲ爲ス者過失ノヤタルヘシ
 第十五條 官吏ハ私立郵船會社又ハ私立鐵道會社ヨリ無賃乘船無賃乘車切符ヲ受クルコトヲ得ス
 第十六條 凡ソ局長所長其他一部ノ長ハ各所屬官吏ヲ監督シ其過失若シ懲戒處分ヲ行フノ區域ノ内
 ニ在ラサル者ハ之ヲ訓告スルコトヲ務ムヘシ若シ懲戒處分ヲ要スト認ルルキハ事狀ヲ具ヘテ之ヲ
 本屬長官ニ稟告スヘシ其情ヲ知り隠蔽シテ稟告セサル者亦過失タルコトヲ免レシ
 第十七條 本紀律ハ高等官判任官及俸給ヲ得テ公務ヲ奉スル者ニ適用ス

○官吏商業區分 明治八年四月
第六十五號
 官吏商賈ノ營業不相成ハ勿論ニ候處其區分判然タラサルニ付自今左ノ通被定候條此旨相違候事
 但從前ノ指令之レニ抵觸スルモノハ廢止ト可心得事

第一條
 一 凡ソ官吏タルモノ并ニ其家族トモ他ノ物品ヲ買入レ之ヲ餘人ニ賣以テ利ヲ獲ルモノ或ハ他ノ
 生産ヲ買入製作ヲ加ヘ之ヲ販賣シテ利ヲ獲ル等ノ業一切禁止ノ事
 但神官、教頭職、區長、郵便取扱人、學區取締役及ヒ等外吏ノ分ハ此限ニ非ス (八年第四百七十六號
達ヲ以テ但書改正)

第二條
 一 官吏ノ家族自己ノ財ヲ以テ商賈ノ業ヲ營マント欲スル者ハ分籍別居ノ上相營ムヘキ事

第三條
 一 左ノ數件ハ商賈ノ業ニアラサルニ付官吏タル者ト雖トモ制禁ニアラサル事

官吏服務紀律

但商賈同様の店ヲ開クハ不相成候事

一 鑛山借區業及ヒ田地ヲ所有シ其利ヲ獲ル事(八年第八十七號達)

一 田地家屋ヲ貸シテ地代宿賃ヲ獲ル事

一金銀ヲ貸シテ利息ヲ獲ル事

一 所有地ヨリ生スル物産ニ製作ヲ加ヘ賣拂事

○官吏會社ノ株主トナルヲ得ルノ區分(明治十四年五月第三十七號達)

官吏商業區分ノ儀ニ付テハ兼テ相違候趣モ有之候處自今道路河港ノ修築海陸ノ運輸土地ノ開墾及ヒ殖産ノ事業ヲ以テ目的ト爲シ設立スル會社ノ株主トナルハ不苦候條此旨相違候事

○各廳執務時間(明治二十九年十一月閣令第六號)

沿革略記

明治元年正月三十一日毎月二十六日ヲ以テ休日ト定ム●六年六月無號達ヲ以テ一日ノ執務時間ヲ六時間ト定ム●九年三月達第二十七號ヲ以テ從前一日ノ休日ヲ廢止シ日曜日ヲ以テ休日ト定ム但土曜日ハ午十二時ヨリ二時

トス●二十三年三月内閣訓令第二號ヲ以テ四月二十日ヨリ七月十日マテハ午前八時出仕午後三時退仕七月十一日ヨリ九月十日マテハ午前九時出仕午後十二時退仕九月十一日ヨリ四月十九日マテハ午前九時出仕午後四時退仕但土曜日ハ從前ノ如ク改正ス●二十五年十一月閣令第六號ヲ以テ執務時間ヲ改正ス●二十六年一月閣令第一號ヲ以テ但書ノ次ハ一

項ヲ追加ス●二十八年十一月閣令第六號ヲ以テ執務時間第一項ヲ改正ス●二十九年十一月閣令第六號ヲ以テ執務時間第一項ヲ改正ス

各官廳執務時間自今左ノ通改正ス

九月十一日ヨリ十月三十一日迄 午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
十一月一日ヨリ翌年二月末日迄 午前九時ヨリ午後四時ニ至ル

三月一日ヨリ七月十日迄

午前八時ヨリ午後四時ニ至ル

七月十一日ヨリ九月十日迄
但土曜日日曜日ハ從前ノ通

午前八時ヨリ午後四時ニ至ル
但土曜日日曜日ハ從前ノ通

地方ノ狀況又ハ廳務ノ性質上止ムヲ得ザルニ以テ限リ主務大臣公問議ヲ經テ右時間ノ繰替ヲ爲シ得ル事(二十六年閣令第一號)

事務繁劇ノ場合ニ於テハ正官ノ指揮ニ依リ晝夜ニ拘ハラヌ執務スルハシ

○文官懲戒令(明治三十三年三月勅令第六十三號)

沿革略記 明治三十三年十二月新編領中職制律ヲ設ケ六年六月第二百六號ヲ以テ改定律例ヲ定ム●九年四月第四十八號布告ヲ以テ新律例改定律例中ノ職制律ヲ廢シ自今官吏職務上ノ過失ハ本廳長官ニ任シ懲戒セシム○同年

同月第三十四號達ヲ以テ文官懲戒例ヲ定ム●三十二年三月勅令第六十三號ヲ以テ文官懲戒令ヲ定メ官吏懲戒令ヲ廢止ス

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ文官懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

文官懲戒令

第一章 總則

第一條 親任式ヲ以テ叙任スル官及法令ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外官吏ハ本令ニ依ルニ非サレハ懲戒ヲ受クルコトナシ
第二條 官吏ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠ラタルトキ
二 職務ノ内外ヲ問ハス官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第三條 懲戒ハ左ノ如シ

一 免官

二 減俸

三 罷責

第四條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタル日ヨリ二年間官職ニ就クコトヲ得ス
免官ノ處分ヲ受ケ其ノ情重キ者ハ位記ヲ返上セシム

第五條 減俸ハ一月以上二年以下年俸月割額若ハ月俸ノ三分一以下ヲ減ス

第六條 勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ノ免官ハ懲

戒委員會ノ議決ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ裁可ニ依リ之ヲ行フ

奏任官ノ減俸及勅任官ノ免官及減俸ハ懲戒委員會ノ議決ニ依リ本屬長官之ヲ行フ

罷責ハ本屬長官之ヲ行フ

第七條 懲戒ニ付セラルヘキ事件刑事裁判所ニ繫屬スル間ニ同一事件ニ對シ懲戒委員會ヲ開クコト

ヲ得ル

懲戒委員會ノ議決前懲戒ニ付スヘキ者ニ對シ刑事訴訟進メ結マレタキハ事件ノ判決ヲ終ハルマ

テ懲戒委員會ヲ開會ヲ停止ス

第五章 懲戒委員會

第一節 第一款 總則

第八條 懲戒委員會ヲ分テ文官高等懲戒委員會及文官普通懲戒委員會トス

第九條 文官高等懲戒委員會ハ高等官ノ懲戒ヲ議決シ文官普通懲戒委員會ハ判任官ノ懲戒ヲ議決ス

第二款 文官高等懲戒委員會

第十條 文官高等懲戒委員會ハ委員長一人委員六人ヲ以テ組織ス

第十一條 委員長ハ樞密顧問官ノ中ヨリ委員ハ行政裁判所長官、勅任行政裁判所評定官、勅任判事及

其ノ他勅任文官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

委員會ニ豫備委員六人ヲ置キ前項ノ例ニ依リ之ヲ命ス

第十二條 委員會ハ委員長及委員ヲ併セ五人以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

委員會ノ議事ハ多數ニ依リ之ヲ決ス可キ同數ナルトキハ委員長之ヲ決ス

第十三條 委員長事故アルトキハ上席委員之ヲ代理ス

委員中事故アルトキ又ハ關員アルトキハ委員長ハ豫備委員ノ中ヨリ代理ヲ命ス

第十四條 委員及豫備委員ノ任期ハ三年トス

委員及豫備委員中關員アリテ補闕ノ爲任命セラレタル者ハ前任者ノ殘任期間在任ス

第十五條 委員長及委員ハ左ノ事項ニ該當スルトキハ之ヲ免ス

一 其官職ヲ失ヒタルトキ

二 委員會所在地以外ニ任所ヲ轉シタルトキ

第十六條 委員會ニ幹事一人ヲ置ク

第十七條 幹事ハ高等官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十八條 幹事ハ委員長ノ命ヲ承ケ委員會ノ議事ヲ準備シ庶務ヲ統理ス

第十九條 委員會ニ書記二人ヲ置ク

第二十條 書記ハ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十一條 書記ハ幹事ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第二款 文官普通懲戒委員會

第二十二條 文官普通懲戒委員會ハ左ノ各官廳ニ之ヲ置ク

一 内閣

一 樞密院

一 各省

一 臺灣總督府

一 會計検査院

一 警視廳

一 北海道廳

一 府縣

一 臺灣ノ縣及廳

一 貴族院事務局

一 衆議院事務局

前項ノ外各省大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ所轄官廳ニ文官普通懲戒委員會ヲ置クコトヲ得

第二十三條 委員長ハ各官廳ノ長官ヲ以テ之ニ充ツ但シ内閣ニ在テハ法制局長官、樞密院ニ在テハ書記官長、各省ニ在テハ「次官」ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ二人乃至六人トシ當該官廳高等官ノ内ヨリ本屬長官之ヲ命ス但シ内閣ニ在テハ賞勳局、法制局及内閣所屬高等官ノ中ヨリ之ヲ命ス

特別ノ事情アルトキハ上級官廳ノ高等官ヲ以テ下級官廳ノ委員ニ充ツルコトヲ得(三十三年勅令第二百一十一號ヲ以テ本項追加)

第二十四條 委員會ハ委員長及委員二人以上出席スルニ非ツレハ會議ヲ開クコトヲ得ス

第二十五條 委員長事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第二十六條 委員會ニ書記二人ヲ置ク

第二十七條 書記ハ委員長所屬官廳ノ判任官ノ中ヨリ委員長之ヲ命ス

第二十八條 書記ハ委員長ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第三章 懲戒手續

第二十九條 本屬長官ハ所部ノ官吏ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證據ヲ具ヘ書面ヲ以テ懲戒委員會ノ審査ヲ要求スベシ

第三十條 前條ノ要求アリタルトキハ委員長ハ期日ヲ定メテ委員會ヲ招集スヘシ

委員會ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ本人ヲ出頭ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ本人所屬官廳ヨリ内國旅費規則ニ依リ本官相當ノ旅費ヲ給スヘシ

第三十一條 委員會ニ於テ議決ヲ爲シタルトキハ其ノ理由ヲ具シ本屬長官ニ覆申スヘシ

第三十二條 委員長及委員ハ自己又ハ親族ニ關スル事件ノ會議ニ參與スルコトヲ得ス

第三十三條 委員會ノ審査手續ハ委員會之ヲ定ム

附則

第三十四條 高等官候補ハ高等官ニ準シ判任官見習ハ判任官ニ準シ本令ヲ適用ス

第三十五條 本令ハ明治三十二年四月十日ヨリ施行ス

官吏懲戒例ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

○

公立學校職員ノ懲戒 明治三十二年七月

公立學校職員ノ懲戒ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

小學校ニ非サル公立學校ノ職員ニシテ奏任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中高

等官ニ關スル規定ヲ準用シ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中判任官ニ關ス

附則

本令ハ明治三十二年七月二十日ヨリ施行ス

第四〇條 稅關監吏賞罰規則 明治三十三年十月

稅關監吏補賞罰規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第三條 稅關監吏賞罰規則 第三條 稅關監吏賞罰規則

第三條 監吏職務上勤勞アル者ハ事ノ大小難易ニ由リ毎事五圓以下ノ賞ヲ與フ

附則

第三條 監吏其職務上怠慢過失アル者ハ情狀ニ由リ左ノ懲罰ニ處ス

第一 誹責

第二 罰俸

第三 免職

第三條 罰俸ハ月俸額百分ノ一以上一箇月以下トス

第四條 罰俸ハ毎月俸給ヲ以テ納付セシム但月俸額三分ノ一ヲ超ルコトヲ得ス

第五條 罰俸ニ處セラレタル者罰俸完納前退官免職又ハ死公スルトキハ之ヲ追徴セス

第六條 大藏大臣ハ本規則ノ執行ヲ稅關長ニ委任スルコトヲ得

○

判事懲戒法 明治二十三年八月

判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律第六十八號

判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事懲戒法

第一章 總則

第一條 凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

第一 誹責

第二 減俸

第三 轉所

第四 停職

第五 免職

第三條 前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ヲ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以内ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セズ

第七條 免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長

トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條 控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事

差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條 懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ「治罪法」ノ規定ヲ準用ス

第十二條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ

檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大

審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テ

ノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條 大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一 第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條 懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章 裁判手續

第十七條 懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ依リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條 檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ニハ懲戒スルべき所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シ

第三十三條 本調命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

第二十四條 受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命判事ハ下調結了ノ後圖書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條 檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條 懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナク思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ハ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用非ルコトヲ得

第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規定ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ「治罪法」ノ規定ニ從フ

第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ヲ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

第四十條 控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ原本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタル後十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スルコトヲ得

第四十二條 懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テタル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ取調シタル證人ヲ再取調ラ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セシムルヲ推測中分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル取調ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 第三審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規定ヲ適用ス

第四十四條 控訴ノ理由ヲシテ申立タルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ノ理由ヲシテ申立タルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル原本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付ス

第四十五條 調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ「治罪法」ノ規定ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條 懲戒裁判所ハ裁判ヲ確定シ後ニ非ザルハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條 懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情况ヲ報告シ且判決ノ勝本ヲ差出スヘシ

第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章 職務停止

第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

- 第一 刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ
- 第二 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ
- 第三 懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ハ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續終了ニ至ルヨリテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲スル者ハ檢事ノ意見ヲ辨クヘシ

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上

之行為ハ無効トシ同ノ地位ニ付若シモ懲戒裁判手續中ニ於テハ其ノ判事ノ職務ヲ停止スルコトヲ得

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シテ訴ヲ爲スルコトヲ得

第五十四條 官刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シテ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追ス

第七條 補則

第五十六條 懲戒ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

○行政裁判所長官評定官懲戒令

明治三十二年七月勅令第三百五十四號

朕樞密顧問ヲ諮詢ヲ經テ行政裁判所長官評定官懲戒令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第三十六號 行政裁判所長官評定官懲戒令

九百六十一

行政裁判所長官評定官懲戒令

第二章 懲戒則官

第一條 行政裁判所長官評定官左ニ記載シタル所爲アリタルトキハ懲戒裁判所ノ判決ニ依リ懲戒ノ處分ヲ受クヘシ

一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

二 職務ノ内外ヲ問ハズ官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フ所爲アリタルトキ

第三條 懲戒ハ左ノ如シ

一 誹責

二 減俸

三 免官

第四條 懲戒裁判所懲戒ノ適用ヲ定ムルニハ被告所犯ノ情狀ト平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ要ス

第五條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分一以内ヲ減ス

第六條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ官職ヲ失ヒタリ且以二年間官職ニ就クコトヲ得ス

第七條 刑事裁判手續中同一事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス 懲戒裁判ノ再渡前同一事件ニ付被告ニ對シ刑事訴訟ノ始リタルトキハ其ノ事件ノ判決確定ニ至ル

マテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第二章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ニ裁判長一人裁判官六人豫備裁判官六人ヲ置ク

裁判長ハ文官高等懲戒委員長、裁判官ハ文官高等懲戒委員、豫備裁判官ハ文官高等懲戒豫備委員ヲ以テ之ニ充ツ

第九條 懲戒裁判所ニ檢察官一人ヲ置ク

檢察官ハ勅任檢事ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ヲ命ス

第十條 懲戒裁判所ニ書記五人ヲ置キ内三人ハ文官高等懲戒委員會書記ヲ以テ之ニ充テ二人ハ大審院書記ノ中ヨリ裁判長之ヲ命ス

第十一條 文官懲戒令第十二條及第十三條ノ規定ハ之ヲ本令ニ準用ス

第三章 裁判手續

第十二條 行政裁判所長官ハ行政裁判所評定官ニシテ懲戒ニ當ルヘキ所爲アリト思料スルトキハ證據ヲ具ヘ懲戒裁判所檢察官ニ通告スヘシ

檢察官ハ事件ノ通告ヲ受ケタルトキ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判開始ノ申立ヲ爲スヘシ

第十三條 懲戒裁判所ハ檢察官ノ申立ニ因リ又ハ其ノ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢察官ノ意見ヲ徵スヘシ

第十四條 懲戒裁判開始シタルトキハ被告ハ其ノ裁判終結ニ至ル迄職務ニ就クコトヲ得ス

第十五條

開始決定ニシテ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第十六條

開始決定ハ檢察官及被告ニ送達スヘシ

第十七條

懲戒裁判所ハ直ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ又ハ下調ニ付スルノ決定ヲ爲シヘシ

第十八條

懲戒裁判所下調ニ付スルノ決定ヲ爲シタルトキハ裁判長ハ裁判官ニ其ノ下調ヲ命スヘシ

第十九條

受命裁判官ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

第二十條

受命裁判官ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ通常裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十一條

受命裁判官證據ヲ集取スルニ付テハ刑事訴訟ニ於ケル豫審判事ト同一ノ權ヲ有ス但シ拘留狀又ハ拘留狀ヲ發スルコトヲ得ス

第二十二條

被告下調ニ關スル呼出ヲ受ケタルトキハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得但シ受命裁判官若ハ受託判事ニ於テ本人ノ出頭ヲ必要トスルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條

受命裁判官下調ヲ終リタルトキハ調書其ノ他一切ノ證據ヲ懲戒裁判所ニ差出スヘシ

第二十四條

受託判事ハ囑託ヲ受ケタル職務ヲ終リタルトキハ調書其ノ他一切ノ書類ヲ受命裁判官ニ送致スヘシ

第二十五條

懲戒裁判所ハ下調ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第二十六條

懲戒裁判所下調ヲ充分ナリトスルトキハ檢察官ノ意見ヲ徵シ口頭辯論ノ期日ヲ定メ又

免訴ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十七條

免訴ノ決定ハ檢察官及被告ニ送達スヘシ

第二十八條

懲戒裁判所口頭辯論ノ期日ヲ定メタルトキハ之ヲ檢察官ニ通知シ被告ヲ呼出スヘシ

第二十九條

口頭辯論ノ開始ハ裁判長之ヲ宣告ス

第三十條

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次ヲ證據調ヲ爲シ檢察官及被告ヲシテ辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十一條

被告ハ書面ヲ以テ辯論スルコトヲ得

第三十二條

懲戒裁判所ハ被告若ハ檢察官ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且口頭辯論ヲ延期スルコトヲ得

第三十三條

懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ充分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ直ニ判決シテ之ヲ言渡スヘシ

第三十四條

被告辯論期日ニ出頭セスト雖直ニ判決ヲ爲シ之ヲ言渡スコトヲ得

第三十五條

前二項ニ依リ直ニ判決スルコト能ハサルトキハ七日以内ニ判決ヲ爲シ之ヲ檢察官及被告ニ送達スヘシ

第三十六條

裁判官ノ忌避回避評議及證據ノ判斷ニ關シテハ裁判所構成法及刑事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第三十七條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第三十八條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第三十九條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十一條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十二條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十三條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十四條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十五條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十六條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十七條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十八條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第四十九條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

第五十條

懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ檢察官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及行政裁判所

長官ニ報告スヘシ

第四章 罰則

第二十九條 懲戒裁判所又ハ受命裁判官若ハ受託判事ヨリ證人トシテ呼出サレタル者及鑑定又ハ通事ノ爲呼出サレタル者正常ノ理由ナクシテ呼出ニ應セス若ハ其ノ義務ヲ盡ササルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 證人トシテ懲戒裁判所又ハ受命裁判官若ハ受託判事ヨリ呼出サレタル者偽證ヲ爲シタルトキ及一定又ハ通事ノ爲懲戒裁判所又ハ受命裁判官若ハ受託判事ヨリ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス 賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲サシメタル者亦同シ 前項ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ判決ニ至ラサル前ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

第五章 附則

第三十一條 懲戒スヘキ所爲ハ本令施行前ニ關スルモノト雖本令ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第三十二條 本令ハ明治三十二年八月一日ヨリ施行ス

○ 會計検査官懲戒法 明治三十三年二月 法律第二十二號 朕帝國議會ヲ協贊シ經タル會計検査官懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計検査官懲戒法

第一章 總則

第一條 會計検査官ノ懲戒ヲ受クヘキ場合左ノ如シ

一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

二 職務ノ内外ノ間ハ官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二條 懲戒ノ懲戒裁判所ノ裁判ニ依リ之ヲ行フ

第三條 懲戒ノ左ノ如シ

一 罷責

二 減俸

三 免官

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月額ノ三分五厘以内ヲ減ス

第五條 免官ノ處分ヲ受ケタル者ハ其ノ判決ノ日ヨリ三年間官職ニ就クコトヲ得ス

第六條 刑事裁判手續中ハ同一事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス懲戒裁判ノ

言渡前同一事件ニ付被告ニ對シ刑事訴追ノ始リタルトキハ其ノ事件ノ判決確定ニ至ルマテ懲戒裁

判手續ヲ停止スヘシ

第二章 懲戒裁判所

第七條 懲戒裁判所ニ長官一人裁判官六人豫備裁判官六人ヲ置ク

長官ハ樞密顧問官ノ中ヨリ裁判官ノ中三人ハ大審院判事三人ハ會計検査院長ヲ加ヘ會計検査官ノ中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ニ補ス

豫備裁判官ハ前項ノ例ニ準シ之ニ補ス

第八條 長官裁判官及豫備裁判官ノ任期ハ三年トス但シ補闕ノ爲補職セラレタル者ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第九條 懲戒裁判所ハ長官及裁判官ヲ併セ七人ノ列席合議ヲ以テ裁判ス

第十條 懲戒裁判所ニ於テハ長官ヲ以テ裁判長トシ長官事故アルトキハ上席裁判官ヲ以テ裁判長トス

裁

裁判官事故アルトキハ其ノ同一官廳ヨリ出テタル豫備裁判官ノ中ヨリ長官其ノ代理ヲ命ス

第十一條 懲戒裁判所ノ裁判ノ評議ニ關シテハ裁判所構成法ノ規定ヲ準用ス

第十三條 懲戒裁判所ニ檢察官一人及豫備檢察官一人ヲ置ク

豫備檢察官及豫備檢察官ハ大審院勅任檢事之中ヨリ内閣總理大臣ノ奏請ニ依リ之ニ補ス

第十三條 懲戒裁判所ニ書記三人ヲ置ク又ハ書記二人ヲ置ク

書記ハ判任官之中ヨリ長官之ヲ命ス

第三章 懲戒裁判手續

第十四條 會計検査院長ハ會計検査院部長及検査官ニシテ懲戒ニ該ルヘキ所爲アリト認ムルトキハ

懲戒裁判所檢察官ニ通告スヘシ

檢察官ハ事件ヲ通告ヲ受ケタル時又ハ職權所ニテ懲戒裁判開始ノ申立ヲ爲スヘキ時

第十五條 懲戒裁判所ハ檢察官ノ申立ニ因テ又ハ其ノ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定

ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢察官ノ意見ヲ徵スヘシ

第十六條 懲戒裁判開始シタル時キハ被告ハ其ノ裁判終結ニ至ル迄職務ニ就クコトヲ得ス

第十七條 開始決定ニテ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示ス

第十八條 開始決定ハ檢察官及被告ニ送達ス

第十九條 懲戒裁判所ハ直ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ又ハ下調ニ付スルノ決定ヲ爲スヘシ

下調ニ付スルノ決定ハ檢察官及被告ニ送達ス

第二十條 懲戒裁判所下調ニ付スルノ決定ヲ爲シタルトキハ裁判長ハ裁判官ニ其ノ下調ヲ命ス

受命裁判官ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命裁判官ハ證人ヲ問其ノ他證據集取ヲ區裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

受命裁判官又ハ受託判事ハ證據集取ニ付刑事訴訟ニ於ケル豫審判事ト同一ノ權ヲ有ス但シ受命裁

判官ハ罰金ヲ言渡シ又ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第二十一條 被告下調ニ關シ呼出ヲ受ケタル時キハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得但シ受命裁

判官又ハ受託判事ニ於テ本人ノ出頭ヲ必要トスルトキハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 受命裁判官下調ヲ終リタルトキハ調書其ノ他一切ノ證據ヲ懲戒裁判所ニ差出スヘシ

受託判事ハ囑託ヲ受ケタル職務ヲ終リタルトキハ調書其ノ他一切ノ書類ヲ受命裁判官ニ送致スヘシ

懲戒裁判所ハ下調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二十三條 懲戒裁判所下調ヲ充分ナリト認ムルトキハ檢察官ノ意見ヲ徵シ口頭辯論ノ期日ヲ定メ又ハ免訴ノ決定ヲ爲スヘシ

免訴ノ決定ハ檢察官及被告ニ送達スヘシ

懲戒裁判所口頭辯論ノ期日ヲ定メタルトキハ之ヲ檢察官ニ通知シ被告ヲ呼出スヘシ

第二十四條 辯論及判決ノ言渡ハ之ヲ公開セス

第二十五條 口頭辯論ヲ開始シ裁判長之ヲ宣告ス

裁判長ハ先以被告ヲ審問シ次ニ證據調ヲ爲シ檢察官及被告ヲシテ辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第二十六條 懲戒裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ書面審理ヲ爲スコトヲ得

懲戒裁判所ハ書面審理ヲ許シタル場合ト雖被告ヲシテ口頭辯論ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十七條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢察官ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリト認ムルトキハ之ヲ爲シ證人ヲ召喚其ノ他必要ナル命令ヲ發シ且口頭辯論ヲ延期スルコトヲ得但シ第二十四條第四項但書ハ本條ニ亦之ヲ適用ス

第二十八條 懲戒裁判所ニ於テ書面審理ニ基キ判決ヲ爲ス場合ニ在リテハ其ノ判決前事件ニ關スル

書類又檢察官ニ送致シ其ノ意見ヲ徵スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ充分ナリト認ムルトキハ之ヲ終結シ直ニ判決シテ之ヲ言渡スヘシ

被告辯論期日ニ出頭セスト雖直ニ判決ヲ爲シ之ヲ言渡スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ判決ヲ被告ニ送達スヘシ

前二項ニ依リ直ニ判決スルコト能ハサルトキハ七日以内ニ判決ヲ爲シ之ヲ檢察官及被告ニ送達スヘシ

書面審理ニ基キ判決ヲ爲シタルトキハ之ヲ檢察官及被告ニ送達スヘシ

第三十條 裁判長裁判官ノ忌避、回避、證據採取ノ手續、調書ノ調製及書類ノ送達ニ關シテハ刑事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

書類ノ送達ハ留留郵便又ハ懲戒裁判所ノ使丁ヲ以テ之ヲ爲ス此ノ場合ニ於テ郵便配達人及使丁ハ送達更ト看做ス

第三十一條 證人鑑定人及通事ハ旅費日常ヲ要ムルコトヲ得其ノ金額ニ關シテハ刑法附則ヲ準用ス

第三十二條 懲戒裁判所判決ヲ爲シタルトキハ長官ヨリ直ニ其ノ旨ヲ内閣總理大臣及會計検査院長ニ報告スヘシ

第四章 罰則

第二十六條 會計検査官懲戒法

九百九十一

第三十三條 懲戒裁判所又ハ受命裁判官ヨリ證人トシテ呼出サレタル者及鑑定又ハ通事ノ爲呼出サレタル者正當ノ理由ナクシテ呼出ニ應セス又ハ其ノ義務ヲ盡ササルトキハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 證人トシテ懲戒裁判所又ハ受命裁判官若ハ受託判事ヨリ呼出サレタル者偽證ヲ爲シタルトキ及鑑定又ハ通事ノ爲懲戒裁判所又ハ受命裁判官若ハ受託判事ヨリ呼出サレタル者詐僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
賄賂其ノ他ノ方法ヲ以テ人ニ囑託シテ偽證又ハ詐僞ヲ爲シタル者亦同シ
前以ノ罪ヲ犯シタル者其ノ事件ノ判決ニ至ラサル前ニ自首シタルトキハ本刑ヲ免ス

附則 懲戒スヘキ所爲ハ本法施行前ニ關スルモノト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

○神官神職懲戒令 明治三十三年三月 勅令第七十九號

朕神官神職懲戒令ヲ裁可シ茲之ヲ公布セシム

第一條 親任式ヲ以テ叙任シ神官ヲ除クノ外神官ノ懲戒ハ本屬長官之ヲ行フ但シ勅任官ハ免官ハ狀ヲ具シ内閣總理大臣之ヲ奏請シ奏任官ハ免官ハ狀ヲ具シ内閣總理大臣ヲ經テ本屬長官之ヲ奏請シ

裁可ニ依リ之ヲ行フ

第二條 官國幣社宮司權宮司ノ懲戒ハ内務大臣之ヲ行ヒ禰宜以下及府社縣社以下神職ノ懲戒ハ地方長官之ヲ行フ但シ靖國神社神職ノ懲戒ハ陸軍大臣海軍大臣之ヲ行フ

第三條 神官神職ノ懲戒ニハ文官懲戒令第二條乃至第五條ノ規定ヲ準用ス

○第五回内國勸業博覽會事務局職員懲戒規定 明治三十三年六月 勅令第二百五十七號

第五回内國勸業博覽會事務局職員懲戒ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
第五回内國勸業博覽會事務局職員ニシテ高等官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中高等官ニ關スル規定ヲ準用シ判任官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒ニハ文官懲戒令中判任官ニ關スル規定ヲ準用ス

○貴衆兩院守衛懲罰例 明治二十四年十二月 勅令第二百三十九號

朕貴族院並衆議院守衛懲罰ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
貴族院並衆議院守衛ノ懲罰ハ巡查懲罰例ニ依ル

○二十七類 恩給

○官吏恩給法

明治二十三年六月
法律第四十三號

沿革略記 明治十七年一月第一號達ヲ以テ官吏恩給令ヲ定ム●十八年三月第十五號達ヲ以テ官吏恩給令附則ヲ定ム●二十三年六月法律第四十三號ヲ以テ官吏恩給法ヲ制定ス是レ現行法ナリ

朕官吏恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
官吏恩給法

第三十三号勅令
第四十四號ヲ
以テ恩給又ハ
扶助料ノ仕掛
ハテ請求スル者
ハ生計維持料ト
トモトモト
トモトモト

第一條 文官判任以上ノ者退官シタルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條 在官滿十五年以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ終身恩給ヲ給ス

- 一 年滿六十歳ヲ超ニ退官ヲ許シタルトキ
- 二 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職ニ堪ヘス退官ヲ許シタルトキ
- 三 廢官廢廳若クハ官廳事務ノ伸縮又ハ非職滿期ニ依リ退官シタルトキ

第三條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身恩給ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ヲ給ス

- 一 公務ニ因リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ
- 二 公務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲メニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘス退官シタルトキ

第四條 滿五年以上國務大臣ノ職ニ在ル者退官シタルトキハ第二條ノ制限ニ拘ハラズ恩給ヲ給ス

第五條 恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官年數トニ依リ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額ノ二百四十分ノ六十トシ十五年以後滿一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
實際官及領事貿易事務官等ノ恩給ハ其官等ニ對スル普通文官ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス
兼官ニ依テ受タル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ

恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第六條 恩給ヲ受ケ又ハ恩給ヲ受ケスシテ退官シタル者在官中ノ公務ニ起因スル傷病疾病引續キ重症ニ趨キタルトキ其事由ヲ詳悉シ左ノ期限内ニ申出レハ查數ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

一 一肢ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後二個年

二 一肢ヲ亡シ或ハ二肢ノ用ヲ失ヒ又ハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢ヲ亡シ若クハ之ニ準スヘキ者ハ退官後三個年

第七條 在官年數ハ判任官以上初任ノ月ヨリ起算シ退官ノ月ヲ以テ終リトス

明治四年八月以前ヨリ任官セラレタル者ハ同年同月ヨリ起算ス但本項ニ掲クル者退官スルトキハ明治四年七月以前ノ勤務ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸半額ヲ以テ在官年數ノ一

個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第八條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ニ算入スヘシ

- 一 判任以上出仕官ニ在ルノ月數
- 二 武官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ軍人恩給ヲ受ケスシテ現役ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ其現役中ノ日數
- 三 從軍年加算ノ年月
- 四 非職及休職中ノ月數
- 五 退官ノ後再ヒ任官シタル者ハ前在官ノ月數
- 六 宮内官ヨリ文官ニ轉シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ宮内官ヲ退キタル後文官ニ任シタル者ハ宮内判任官以上在官中ノ月數

第九條 左ニ掲クル月數及日數ハ在官年數中ヨリ除算スヘシ

- 一 年輪二十歳未滿者ノ在官月數
- 二 高等官試補及判任官見習中ノ月數
- 三 郡區判任官(三十二年法律第十號ヲ以テ書記判任官ニ改ム)ニ在ル月數
- 四 御用掛履等外出仕勤仕ノ月數
- 五 第八條第二ニ掲クル者ニ在テハ軍人恩給法ニ依リ除算スヘキ日數

六 自己ノ便宜ニ依リ退官シタル後又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニヨリ免官シタル後再ヒ任官シタル者ニ在テハ其前官ノ月數

第十條 文官ニシテ從軍シタル者ハ軍人恩給法ノ算則ニ照シテ其從軍年ヲ加算ス

第十一條 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ滿一年以上在官シタル後退官シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一 退官現時ノ俸給前後相同シカラサルキハ前官年數ヲ後官ノ年數ニ通算シ後官ニ對スル恩給額ト前ノ恩給額トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二 退官現時ノ俸給前後相同シキトキハ在官年數ニ依リ恩給ヲ增加ス但前官十五年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十六年以上ニ至ラサレハ增加セス

第十二條 恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ剝奪ス

左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間恩給ヲ停止ス

一 判任以上ノ官ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキ但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第十三條 年輪未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退官シタル者ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ依リ免官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失フ

法令ヲ以テ設立シタル議會ノ議員并市長町長助役收入役名譽職參事會員及東京市京都市大阪市

北海道ノ區長ト爲リタル者故ヲ以テ退官シタル者ハ恩給ヲ受クルノ資格ヲ失ハス(三十三年法律第一十號ヲ以テ改正)

第十四條 郡區判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ハ恩給ヲ受クルノ權ナキモノトス(三十三年法律第一十號ヲ以テ改正)

商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏並高等官試補判任官見習ニシテ公務ノ爲メ傷滅ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ此法律第三條ニ該當スル者ニ限リ退官又ハ罷免現時ノ俸給四分ノ一ヲ終身支給スルコトヲ得

第十五條 恩給支給ノ期ハ退官ノ翌月ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年内ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第十七條 恩給ノ支給ハ本屬長官ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス行政上ノ處分ニ因リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタルトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

一 傷滅疾病ノ原因及其輕重

二 職務ニ堪エルト否ヲサルト

第十八條 恩給ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消

減及停止ハ此法律ニ依ル

第二十條 此法律施行前ニ退官シタル者ノ恩給ハ明治十七年達官更恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ日ヨリ三箇年内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第二十一條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

從前ノ命令ニシテ此法律ニ抵觸スルモノハ總テ廢止ス

○官吏恩給法施行規則明治二十三年七月

官吏恩給法施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法施行規則

第一章 恩給ノ請求

第一條 官吏恩給法第二條第三條第六條及第七條第二項第十四條第二項ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法第四條ニ依リ恩給ヲ受クヘキ者ハ恩給請求書ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第三條 恩給請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

- 一 在官中履歷書
- 二 市町村長ノ證明シタル戸籍調書

但官吏恩給法第十四條第二項ニ掲ケタル者ハ之ヲ添付スルニ及ハス

第四條 公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ請求スル者ハ前條ニ掲ケタル書類外左ノ書類ヲ以テ其實ヲ證明スヘシ官吏恩給法第六條ニ依リ恩給ヲ請求スル者亦同シ

一 現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書

二 醫師ノ診斷證書

第五條 恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ查察ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在官年數及恩給年額計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

各廳長官ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第六條 内閣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り本屬廳ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 恩給ノ支給

第七條 恩給ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ大藏省ヨリ本人居住地ノ地方廳ヲ經テ支給ス但權利消滅若クハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ハラヌ之ヲ支給ス(二十七年勅令第五號ヲ以テ若クハ停止ノ五分ヲ追加ス)

第八條 恩給ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ恩給證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第九條 恩給ヲ受クル者他ノ地方ニ居住ヲ轉スルトキハ恩給支給ノ日ヨリ三十日以前其旨ヲ新舊居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ若シ此ノ期日ヲ過キ届出タルトキハ其ノ一期ノ金額ハ尙ホ従前ノ地方廳ニ於テ支給ス

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ各廳間互ニ其ノ者ニ係ル恩給支給ノ受繼ヲ爲シ其ノ引繼ヲ受ケタル地方廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ(二十七期令第五號ヲ以テ本條改正)

第十條 官吏恩給法第十二條ニ當リタル者ノ恩給支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 判任官以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退官シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑罰滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

第十一條 官吏恩給法第七條第二項ニ掲クル月俸トハ明治四年六月東京淺草米庫ノ平均相場ニ依リ當時ノ官祿一個月分ニ相當スル金額トス

第十二條 官吏恩給法第三條ニ掲クル最下金額十分ノ七マテノ増加恩給ノ等差ハ左ノ如シ

第一項 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ 十分ノ七

第二項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ六

第三項 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ五

第四項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ四

第五項 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ 十分ノ三

第六項 前項ニ準スヘキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ 十分ノ二

傷痕疾病ノ等差ハ明治十八年達文官傷痕疾病等差例ニ依ル

第三章 恩給ノ停止

第十三條 恩給ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 官吏恩給法第十二條第二項ノ第一ニ當ル者アルトキハ其任用シタル官廳ヨリ大藏省ニ通知スヘシ解任シタルトキモ亦同シ但此通知書ニハ本人恩給ノ支給ヲ受ケタル地方廳名及俸給ノ支給ヲ始ムル日(解任ノトキハ支給ヲ終リタル日)ヲ付記スヘシ

第十五條 恩給ヲ受クル者死去シタルトキハ其遺族ヨリ地方廳ニ届出ヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ權利ナキトキハ死去ノ届出ヲ爲スト同時ニ恩給證書ヲ返納スヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ直ニ大藏省ニ通知シ其恩給證書ハ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十六條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條第十五條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知シ且第十三條第十四條ノ場合ニ於テハ地方廳ニ通知シテ其恩給ノ支給ヲ停止シ又ハ復給

セシムヘシ

地方廳ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキ其恩給ヲ剝奪スヘキモノハ恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第四章 雜則

第十七條 水火災盜難等ニ由リ恩給證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ其實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ内閣恩給局ニ申出ヘシ此場合ニ於テ恩給局ハ恩給證書ノ謄本ヲ作り地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ
前項恩給證書ノ謄本ハ恩給證書ト同一ノ効力アルモノトス

第十八條 恩給ヲ受クル者改氏名シタルトキハ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ地方廳ハ恩給證書ノ裏面ニ其實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其旨ヲ内閣恩給局及大藏省ニ通知スヘシ

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ恩給ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ(二十七年門令第五號ヲ以テ改正)

第二十條 官吏恩給法第二十條ニ依リ恩給ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ

第二十一條 市制町村制ヲ施行セザル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ該

戸長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○文官傷疾疾病等差例(明治十八年三月)

「官吏恩給令附則第五條」傷疾疾病等差例左ノ通相定候條右ニ據リ取調候儀ト可心得此旨相違候事

文官傷疾疾病等差例

公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ遂ニ一肢以上ノ用ヲ失フニ等シキ不治ノ症トナリ「官

吏恩給令附則第五條」ニ掲クル各項ニ該當スル者ニ等差ヲ付スルヲ概テ左ノ如シ

第一條 偏眼ヲ盲スル者全鼻ヲ失スル者ハ共ニ第五項トシ之ニ偏耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ第四項トス

第二條 兩耳ヲ聾スル者ハ第四項トス

第三條 偏眼兩耳ノ官能ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第四條 一眼ヲ失ヒ他ノ一眼瞎昧シ僅ニ自己ノ用ヲ辨スルヲ得ル者ハ第二項トス

第五條 咀嚼言語ノ兩機ヲ併セ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第六條 咀嚼ノ用ヲ廢スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トシ幾分ノ障礙アル者ハ第五項其輕キ者ハ第六項トス

第七條 精神亡失或ハ錯亂シテ常ニ看護ヲ要スル者ハ第一項トス

第八條 癡呆若クハ健忘症ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第三項若クハ第五項トス

第九條 神經痛ヲ遺シ常ニ看護ヲ要セサル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十條 言語ノ機能ヲ廢スル者ハ第三項トシ言語ノ機能ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第五項或ハ第六項トス

第十一條 胃腸膀胱等ニ尿管ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第二項或ハ第三項トス

第十二條 腸歇爾尼亞ヲ遺ス者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十三條 陰莖或ハ翠丸ヲ全失スル者ハ第三項トス

第十四條 陰莖ヲ半失スル者偏翠丸ヲ失スル者ハ共ニ第六項トス

第十五條 頸項背腰諸筋ノ運用ヲ妨ケル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或ハ第六項トス

第十六條 一肢ヲ失ヒ且他肢ノ用ヲ全廢スル者ハ第一項トス

第十七條 一上肢ヲ失フ者ハ肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

第十八條 肩關節ヨリ腕關節ニ至ル間ノ關節作用ヲ廢スルモ全肢ノ用ヲ廢スルニ至ラサル者ハ第六項トス

第六項トス

第十九條 一手ニ於テ四指以上ヲ失スル者ハ第四項トシ五指癒著若クハ強硬等ノ爲メニ把握採

摘ノ用ヲ廢スル者ハ第五項トス

第二十條 一手ニ於テ四指或ハ五指ノ各一部ヲ失スルモ尙把握ノ用ヲ爲シ得ル者ハ第六項トス

第二十一條 一手ニ於テ拇指示指ヲ併セ失スル者或ハ拇指示指ヲ除キ他ノ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

第二十二條 一下肢ヲ失スル者ハ股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ハ何レノ部位ヲ論セス第三項トス

トス

第二十三條 股關節ヨリ踝關節ニ至ル間ノ作用ヲ妨ケラレタル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第五項或

ハ第六項トス

第二十四條 附骨ヨリ趾骨ニ至ルノ部ヲ失スル者ハ何レノ部位ヲ論セス第四項トス

第二十五條 一足ニ於テ五指ヲ失スル者ハ第五項トシ第一指ヲ併セ三指ヲ失スル者ハ第六項トス

トス

第二十六條 不治病ノ爲メ常ニ看護ヲ要スル者ハ(輕重ヲ酌量シテ)第一項或ハ第二項トス

第二十七條 不治病前項ヨリ輕キモ歩行スル能ハサル者ハ第三項トス

第二十八條 不治病前項ヨリ輕キモ自己ノ用辨ニ妨礙アル者ハ第四項トス

第二十九條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ヲ爲シ難キ者ハ第五項トス

第三十條 不治病前項ヨリ輕キモ營業ニ妨ケアル者ハ第六項トス

○恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續明治二十四年六月閣令第二號
行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ノ權利ニ關スル恩給局裁決手續左ノ通定ム

第一條 行政上ノ處分ニ因リ恩給扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスルモ恩給局ノ裁決ヲ請ハントスルトキハ其理由ヲ願書ニ認メ身分職業住所年齢ヲ記載シ署名捺印シ之ニ證據書類ヲ添ヘ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

前項ノ書類ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得

第二條 恩給局ニ於テ前條ノ申立理由アリト認ムルトキハ其書類ヲ當該官廳ニ送付シ相當ノ期限ヲ定メ答辯書ヲ添ヘテ之ヲ恩給局ニ差出サシムヘシ

第三條 恩給局ニ於テ必要ト認ムルトキハ請求者又ハ當該官廳ノ官吏ヲ召喚シ口頭陳述ヲ爲サシムルコトヲ得

第四條 恩給局ニ於テ裁決シタルトキハ裁決書ニ通ヲ作り請求者及當該官廳ニ送付スヘシ

○文官判任以上退官時ノ勸金(明治二十三年六月勸金第九十八號)

朕茲ニ文官判任以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス

文官判任以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ノ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス(二十六年勸金第二十七號ヲ以テ一年以上ノ者ハ十五年未滿ノ者ハ五年ヲ以テ之)本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ヒ任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲ケル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受クル者並自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス
本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○官吏遺族扶助法(明治二十三年六月法律第四十四號)

沿革略記

明治十七年一月第一號遺官遺族恩給令ヲ以テ勸養任官ノ寡婦孤兒ニ限リ扶助料ヲ受ルコトヲ得ルノ制ヲ設ク
二十三年六月法律第四十四號ヲ以テ更ニ官吏遺族扶助法ヲ制定ス

朕官吏遺族扶助法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法

第一條 文官判任以上ノ者左ニ掲ケル事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス但第二條ノ納金ヲナスヘキ義務ナキ者ノ遺族ハ此限ニ在ラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 文官判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第三條 交際官及領事貿易事務官等其俸給普通文官ヨリ多額ナルトキハ普通文官ノ俸給ニ依リ少額

第二十七類 官吏遺族扶助法

第三十三年勸令
第四十四號ヲ
以テ扶助料
ヲ受クル者
ハ其存続
シテ要セス

ナルトキハ現ニ受クル所ノ俸給ニ依リ第二條ノ納金ヲ爲スヘシ
郡判任官ヲ除クノ外政府ヨリ俸給ヲ受ケサル官吏及商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官吏ハ第二條ノ納金
ヲ要セス(三十二年法律第十六號ヲ以テ改正三十三年
法律第十一號ヲ以テ登記ヲ判任官ニ改ム)

第四條 寡婦扶助料年額ハ亡夫ノ受ケタル若クハ受クヘキ恩給年額三分ノ一トス

公務ノ爲メ受ケタル傷病ニ原因シテ死去シ又ハ非常ノ勞働及困苦ヲ忍ビ勤務ニ從事シ爲メニ發病
死去シ又ハ公務ニ依リ傳染病者ニ接シ該病ニ感染シテ死去シ又ハ戰地ニ於テ若クハ公務旅行中
流行病ニ罹リ死去シタル者ノ寡婦扶助料ハ亡夫ノ俸給ニ對シ官吏恩給法第五條ニ依リ算出シタル
恩給年額三分ノ二トス

扶助料年額四位未滿ノ數ハ四位ニ滿タシム

第五條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死去シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ孤兒
ニ給ス

第六條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ戸主ニ非サル者ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス
其繼襲者及長子死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ轉給スルモ
ノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシ女子ヲ後ニス

第七條 恩給ヲ受ケタル者ノ寡婦ニシテ其夫退官後結婚シタル者ハ扶助料ヲ受クルコトヲ得ス

第八條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男女子

ハ家名繼襲者ニ限ル

第九條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

第十條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戸籍ヲ去リ若クハ死
去シ若クハ權利消滅シタルトキ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母
又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ
祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳
未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキ
ハ寡婦ニ相當スル扶助料一個年分ヨリ少カラス五個年分ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一
時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第十二條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三個年內ニ請求セサレハ其權利ヲ拋棄シタ
ルモノトス

第十三條 扶助料ハ賣買讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ス

第十四條 扶助料ヲ受クルノ權利ハ左ノ時ヨリ消滅ス

一 寡婦死去又ハ婚嫁シ若クハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

二 孤兒死去又ハ婚嫁シ又ハ他家ノ養子女トナリ又ハ年齢二十歳ニ滿チタル月ノ翌月
三 父母祖父母死去シ又ハ戸籍ヲ去リタル月ノ翌月

第十五條 孤兒二十歳ニ滿ツルモ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハス他ニ給養スル者ナキトキハ寡婦扶助料ノ三分ノ一ヲ其孤兒ニ各終身給スルコトヲ得但一戸籍内ニ寡婦ト同額ノ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其間之ヲ給セス

第十六條 扶助料ヲ受クル者日本臣民タルノ分限ヲ失ヒ若クハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ扶助料ノ支給ヲ廢ス
公權ヲ停止セラレタルトキハ其間支給ヲ停止ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第十七條 在官十五年未滿ノ者在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス
前項ノ扶助金ハ在職最終ノ俸給年額百分ノ一ヲ在官年數ニ乗シタル額トス但一年未滿ノ在官月數ハ計算セス

第十八條 扶助料ノ支給ハ地方長官ノ申牒ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス
行政上ノ處分ニ因リ扶助料ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シテ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十九條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ受ケタル者及恩給ヲ受ケタル者ノ遺族扶助料ハ總テ其恩給令ニ依ルヘシ但其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル
第二十條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○官吏遺族扶助法納金收入規則 明治二十三年七月勅令第百二十五號
朕官吏遺族扶助法納金收入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏遺族扶助法納金收入規則

第一條 本年法律第四十四號官吏遺族扶助法第二條ニ依リ文官判任以上ノ者ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ金庫ニ於テ之ヲ差引ヘシ但現金前渡ヲ受ケタル官吏ニ於テ俸給ノ仕拂ヲナストキハ該官吏ニ於テ之ヲ差引ヘシ

郡書記ノ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ郡役所會計吏ニ於テ之ヲ差引ヘシ (三十二年勅令第六十號ヲ以テ本項追加)
第二條 前條ニ依リ金庫ニ於テ差引シタル金員ハ歳入徴收官ノ計算ニ移シ直ニ報告書ヲ作リ之ヲ歳入徴收官ニ送付スヘシ (三十二年勅令第六十號ヲ以テ本項中改正)

前條ニ依リ現金前渡ヲ受ケタル官吏及郡役所會計吏ニ於テ差引シタル金員ハ納金額表ヲ添ヘ之ヲ收入官吏ニ送付スヘシ (三十二年勅令第六十號ヲ以テ本項中追加)
第三條 俸給ノ増減ニ依リ既納ノ金員ニ過不足ヲ生スルトキハ次期ノ俸給支給ノトキ之ヲ整理

免官退官轉任死亡ニ依リ過渡俸給ノ返納ヲ要スルトキハ其百分ノ一ヲ納人ニ於テ差引スヘシ

○官吏遺族扶助法施行規則 明治二十三年七月 閣令第四號

官吏遺族扶助法施行規則左ノ通定ム

官吏遺族扶助法施行規則

第一章 扶助料ノ請求

第一條 官吏遺族扶助法第一條第一第二及第十七條ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料又ハ一時扶助金請求ノ證ト爲スヘシ

第二條 官吏遺族扶助法第一條第三ニ當ル者ノ遺族ハ其恩給證書ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第三條 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ查覈シ其傷疾若クハ疾病ノ公務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其診斷書ヲ併セテ其遺族ニ下付スヘシ遺族ハ之ヲ以テ扶助料請求ノ證ト爲スヘシ

第四條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿テタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ請フ者ハ前者ノ扶助料證書ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第五條 公權停止ニ因リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫ヲ以テ請求ノ證ト爲スヘシ

第六條 官吏遺族扶助法第十一條及第十五條ニ當ル者ハ其事由ヲ詳記シ廢疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ扶助料ヲ請求スヘシ

第七條 扶助料ノ請求書ハ請求者署名シ後見人アレハ其後見人署名スヘシ親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ奥印ヲ受ケ第一條乃至第六條ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添附シ地方長官ニ差出スヘシ

第八條 扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ查覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

内閣ニ於テ之ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り地方廳ヲシテ之ヲ本人ニ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第二章 納金ノ徵收
第九條 「官吏遺族扶助法第二條ニ掲クル納金ハ俸給支給ノトキ各廳ニ於テ之ヲ徵收シテ國庫ニ納ムヘシ」

二十三年勅令
第四百二十五號
官吏遺族扶助法施行規則

第三章 扶助料ノ支給及停止

第十條 扶助料ノ支給ハ官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條及第十條第二第三ノ例ニ依ル

第十一條 扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキハ地方廳ニ於テ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其扶助料證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第十二條 扶助料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ公權ヲ停止セラレタルトキハ官吏恩給法施行規則第十三條ノ例ニ依ル

第十三條 大藏省ニ於テ第十一條第十二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ官吏恩給法施行規則第十六條ノ例ニ依ル

雜則

第十四條 水火災盜難等ニ依リ扶助料證書ヲ亡失シタルトキ及扶助料ヲ受クル者改氏名ヲ爲シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十七條及第十八條ノ例ニ依ル

第十五條 明治十七年達官吏恩給令ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ルヘシ同令ニ依リ扶助料ヲ受クル者ハ左ノ場合ニ於テ本則ニ依ル

一 死去又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ(二十七年閣令第六號ヲ以テ改正ス)

第十六條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

○

○官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則(明治二十九年三月法律第三十六號)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則

第一條 地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長ノ在官月數ハ官吏ノ恩給及遺族扶助ニ關スル在官年數中ニ算入ス

第二條 明治二十三年七月一日以後ニ退官シタル文官判任以上ノ者ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受ケタル郡區長在官中ノ月數ヲ除算シ恩給ヲ受ケ若ハ之カ爲恩給ヲ受ケサリシ者ニハ其ノ月數ヲ算入シ恩給ヲ増加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第三條 第二條ニ相當スル者在官中又ハ退官ノ後死去シ其ノ遺族ニシテ扶助料若ハ一時扶助金ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケザリシ者ニハ第一條ニ依リ算定シタル恩給年額若ハ在官年數ニ依リ其ノ扶助料若ハ一時扶助金ヲ増加シ又ハ新ニ之ヲ給スルコトヲ得

第四條 第二條、第三條ニ依リ新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受ケタル者ハ左ノ方法ニ依リ最後ニ受ケタル退官賜金又ハ一時扶助金ノ一部ヲ返納セシム

新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料年額ニ其ノ退官又ハ死去以後新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受ケタル日ニ至ルマテノ年數ヲ乘シ月數ハ其ノ月割額ヲ加ヘ退官賜金一時扶助金ヲ其ノ總額ニ對照シ若超過アルトキハ其ノ超過額ヲ新ニ受クヘキ恩給又ハ扶助料中ヨリ控除ス

第五條 恩給ヲ受ケタル者郡判任官ニ任用セラレタルキハ其ノ間恩給ヲ停止ス(三十三年法律第十二號ヲ以テ既書罷免判任官ニ改ム)

第六條 第二條、第三條ニ依リ給スル恩給及扶助料ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第七條 第二條、第三條ニ依リ受クヘキ恩給、扶助料又ハ一時扶助金ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ一箇年内ニ請求セサレハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第八條 此ノ法律ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第九條 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則明治二十九年閣令第二號

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則左ノ通定ム

官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行規則

第一條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第二條ニ依リ恩給ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ恩給ヲ受

ケントスル者ハ恩給請求書ヲ退官當時ノ本屬廳ノ長官ニ差出スヘシ但廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ差出スヘシ

第二條 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第三條ニ依リ扶助料又ハ一時扶助金ノ増加ヲ受ケ若クハ新ニ之ヲ受ケントスル者ハ其ノ請求書ヲ居住地ノ地方長官ニ差出スヘシ

第三條 恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添附スヘシ

一 在官中ノ履歴書

二 市町村長ノ證明シタル戶籍寫

但恩給ヲ請求スル者ニ在リテハ其ノ退官當時ノ戶籍寫扶助料若クハ一時扶助金ヲ請求スル者ニ在リテハ元官吏タリシ者死亡當時ノ戶籍寫及明治二十九年四月一日現在ノ戶籍寫トス

三 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則施行前ニ恩給又ハ扶助料若クハ一時扶助金ヲ受ケタル者ニ在リテハ其ノ證書若クハ辭令書

第四條 第一條ニ依リ新ニ恩給ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ官吏恩給法施行規則第五條ニ掲クル計算書ノ外退官當時給與シタル退官賜金ノ調書ヲ添附スヘシ

第五條 恩給ヲ受ケタル者ヲ郡區書記ニ任用シ若クハ解任シタルトキハ官吏恩給法施行規則第十條第十四條及第十六條ヲ準用ス但從來任用シタル者ハ直ニ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

第六條 本規則ニ於テ特別ノ規程ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則及官吏遺族扶助法

施行規則ノ例ニ依ル

○理事ノ恩給及遺族扶助方明治二十九年二月法律第三號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル理事ノ恩給及遺族扶助ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
理事豫備トナリ若ハ退職トナリタルトキハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ニ於テ退官者ト同視シ其ノ
豫備ニ在ル者戰時若ハ事變ニ際シ現職ニ復シタルトキハ再ヒ任官シタルモノト同視ス

○軍人恩給法明治二十三年六月法律第四十五號

沿革略記 明治八年四月第十八號達ヲ以テ陸軍武官傷病扶助及ヒ死亡者ノ祭葬并其家族扶助暫則ヲ定ム○同年八月第
百四十八號ヲ以テ海軍退隱令ヲ定ム○九年一月第八號達ヲ以テ前二達中ヲ改正ス○同年十二月第九十九號達
ヲ以テ八年第四十八號達ヲ廢シ更ニ陸軍恩給令兼役俸并恤金令及將官退職令ヲ定ム○十六年九月第三十七號達ヲ以テ
陸軍恩給令ヲ改正ス○同年同月第三十八號達ヲ以テ從前ノ海軍退隱令ヲ廢シ更ニ海軍恩給令ヲ定ム○二十三年六月法
律第四十五號ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ軍人恩給法ヲ定ム是レ現行法ナリ

朕軍人恩給法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
軍人恩給法

第一章 總則

第三十三號勅令
第四十四號達
以テ恩給ノ仕
排ヲ生テ存ス
者ハ生テ存ス
ヲ要セス

第一條 陸海軍軍人ニシテ現役ヲ離レタル者ハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有
ス

第二條 陸海軍軍人恩給ハ左ノ六種トス

- 一 退職恩給
- 二 免除恩給
- 三 増加恩給
- 四 賑恤金
- 五 給助金
- 六 扶助料

第三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給及寡婦ノ扶助料ハ終身、孤兒ノ扶助料ハ年齢二十歳ニ至ルマ
テ賑恤金、給助金ハ一時限リ之ヲ給ス

第二章 退職恩給、免除恩給、増加恩給

第四條 退職恩給ハ准士官以上左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

- 一 現役十一年以上ニシテ年限ノ年齢ニ達シ又ハ年限ノ年齢ニ達セサルモ傷病ヲ受ケ若クハ疾病
ニ罹リ服役ニ堪ヘス退職シタルトキ
- 二 戰闘及戰時平時ニ拘ハラズ公務ノ爲メ傷病ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者
ニシテ退職シタルトキ

三 戦地ニ於テ流行病ニ罹リ又ハ戦時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ従事シ爲メニ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ退職シタルトキ

四 現役十一年以上ニシテ未タ定限ノ年齢ニ達セスト雖休職、停職満期若クハ諭旨ニ依テ退職シタルトキ

第五條 免除恩給ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキ之ヲ給ス

一 現役十一年以上ニシテ定限ノ年齢ニ達シ又ハ定限ノ年齢ニ達セサルモ服役満期トナリ或ハ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘス免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

二 第四條第二又ハ第三ニ由リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ

第六條

退職恩給、免除恩給年額ハ軍人恩給ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ト其服役年數トニ從ヒ第一號表若クハ第二號表ニ依テ之ヲ給ス但現役四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十一年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十一年ノ額トス

第七條

軍人現役十一年以上ニシテ文官ニ任シタル者又ハ文官ヲ兼任スル者十五年未滿ニシテ退官退職スルトキハ軍人ノ服役年數ニ對スル恩給ヲ給ス其十五年以上ニシテ退官退職スルトキハ文武官ヲ比較シ恩給年額ノ多キ方ヲ給ス

第八條

退職恩給、免除恩給ヲ受ケタル後再ヒ現役ニ就キ滿一年以上服役シタル者退職又ハ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキハ左ノ區別ニ依リ恩給ヲ給ス

一 再ヒ現役ヲ離ル、トキノ現官階當初恩給ヲ受ケタルトキノ官階ト同等ナラザルトキハ前役年數ニ再役年數ヲ通算シ再役ノ官階ニ對スル恩給ト既得ノ恩給トヲ比較シ其多キ方ヲ給ス

二 前後ノ官階同等ナルトキハ再役ノ年數ニ依リ恩給ヲ増加ス但前役十一年未滿ニシテ恩給ヲ受ケタル者ニ在テハ前後通算シテ十二年以上ニ至ラサレハ増加セス

第九條 増加恩給ハ戦闘及戦時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ニ退職恩給、免除恩給ノ外特ニ給スルモノトス

一 兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ

二 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

三 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ

四 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

五 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ

六 前項ニ準スヘキ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ

第十條 増加恩給ノ年額ハ軍人之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ從ヒ第三號表ニ依リ之ヲ給フ

第十一條 戦闘及戦時平時ニ拘ハラス公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受ケスシテ現役ヲ離レタル後重症ニ趨キタル者左ノ期限内ニ検査ヲ願出ルトキハ策定ノ上相當ノ恩給ヲ給ス

- 一 一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失フニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ二個年
 - 二 一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒ若クハ兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡スルニ至リタル者若クハ之ニ準スヘキ者ハ現役ヲ離レタル日ヨリ三個年
- 第十二條 傷疾疾病ニ起因シ恩給ヲ請求スル者ハ左ノ書類ニ依リ證明スヘシ
- 一 傷疾疾病ノ原因ハ現認證書又ハ之ヲ證スル公文ノ寫若クハ口供書
 - 二 傷疾疾病輕重ノ度ハ陸海軍醫官ノ證書若クハ陸海軍醫官ノ查數ヲ經タル醫師ノ證書
- 第十三條 退職恩給、免除恩給、増加恩給ノ支給ハ現役ヲ離レタル日ノ翌日ヨリ始マリ死亡ノ月ヲ以テ終ルモノトス

第三章 賑恤金、給助金

- 第十四條 賑恤金ハ下士以下左ニ掲クル事項ノ一ニ當リ第九條第六ヨリ輕症ニシテ免除恩給ヲ受ケサル者ニ之ヲ給ス
- 一 戦闘及戰地公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ
 - 二 戰時平時公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ第四條第三ニ原由スル疾病ニ罹リ現役ヲ離レタルトキ
- 第十五條 賑恤金ハ之ヲ受クヘキ事故ノ生シタルトキノ現官階ニ應シ前條第一ニ當ル者ハ第三號表

第五項ノ二個年分ヨリ少カラズ十個年分ヨリ多カラズ前條第二ニ當ル者ハ同表第六項ノ一個年分ヨリ少カラズ十個年分ヨリ多カラサル金額トス

第十六條 給助金ハ下士以上現役中死歿シ若クハ現役四年以上十一年未滿ニシテ現役ヲ離レ退職恩給、免除恩給ヲ受サル者ニ之ヲ給ス其額ハ第四號表ニ依ル

第四章 服役年

第十七條 服役年ノ始期終期ハ左ノ各項ニ依ル

- 第一 退職恩給、免除恩給ニ係ル服役年ノ始期
 - 一 下士以上ハ初任ノ日陸軍兵卒ヨリ出身ノ下士以上ハ入營ノ日海軍卒ヨリ出身ノ下士以上ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第六ニ當リタル者ハ其兵卒トナリタル日
 - 二 陸軍兵卒ハ入營ノ日海軍卒ハ五等卒トナリタル日但第二十四條第七ニ當リタル者ハ其刑期滿限ノ翌日
 - 三 北海道ニ移住ノ際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ヨリ出身ノ士官以上ハ其士官ニ任シタル日
 - 四 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
 - 五 海軍下士以下ニシテ明治二年五月一日以前ヨリ勤仕ノ者ハ同月一日
- 第二 給助金ニ係ル服役年ノ始期
 - 一 下士以上初任ノ日

第三 服役年ノ終期

一 現役ヲ離レタルノ日

第十八條 左ニ掲クル日數ハ服役年ニ通算ス

一 前條ニ掲クル服役年ノ始期ヨリ終期ニ至ルマテノ日數

二 豫備後備ニ在ル者戰時若クハ事變ニ際シ召集シタルトキハ其召集中ノ日數

三 海軍軍人轉シテ陸軍軍人トナリタルトキハ海軍服務ノ日數陸軍軍人轉シテ海軍軍人トナリタルトキハ陸軍服務ノ日數

四 文官ヨリ轉シテ陸海軍軍人トナリタル者ニ在テハ恩給ヲ受クヘキ最下限ノ期ニ至ルマテハ文官服務中ノ日數四分ノ三

五 現役ノ者陸軍見習士官、海軍候補生若クハ陸海軍諸生徒トナリ再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

六 現役ヲ離レタル後再ヒ現役ニ就キタルトキハ前後ノ日數

七 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒、海軍水雷夫及北海道移住ノ際定規ノ給助ヲ受ケタル屯田兵下士卒ニシテ從軍シタルトキハ其日數

第十九條 左ニ掲クル日數ハ服役年ヨリ除算ス

一 刑期中及逃走中ノ日數

二 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍諸生徒中ノ日數但從軍中ノ日數ハ此限ニアラス

三 文官奉職中ノ日數ニシテ官吏恩給法ニ依リ除算スヘキ月數
四 年齡十七歳未滿ノ日數

第五章 從軍年

第二十條 從軍年ハ現役外ノ年月ト爲シ之ヲ其服役年數ニ加算スルモノトス

第二十一條 從軍年ノ加算ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一 外國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ内國港灣ヲ出發シタルトキハ二個年

二 内國戰ニ當リ出征軍ニ編入セラレ戰地ニ臨ミタルトキハ一個年

三 臨戰合圍地境內ニ於テ服役シタルトキ外國ニ在テハ二個年内國ニ在テハ一個年

四 日本國外ノ鎮戍ニ在リタルトキハ一個年

五 出征事件ニ關シ功績アル者及一時ノ出兵ヲ出征軍ト見做シ從軍年ニ加算スヘキ場合ハ勅裁ニ依ル

第二十二條 海軍軍人ノ外國航海ハ從軍年ニ準シ内國港灣出發ノ日ヨリ一航海ヲ半個年ニ加算ス其航海十二個月ニ超エルトキハ更ニ半個年ヲ加算ス但第二十一條ニ當ルトキハ本條ヲ適用セス

第二十三條 從軍年ノ加算ハ十二個月間數回ノ戰役ニ從ヒ若クハ航海ヲ爲スト雖モ重複シテ之ヲ算セス但其一年以上ニ亘リ十二個月ニ餘ル所ノ分數ハ更ニ一役若クハ一航海ト爲ス

第六章 恩給ヲ受クヘキ資格及權利ノ消滅停止

第二十四條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ退職恩給、免除恩給、增加恩給、賑恤金、給助金ヲ

受クヘキ資格消滅ス

- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
 - 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
 - 三 將校及相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法劾官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則 依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ
 - 四 將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ
 - 五 准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
 - 六 陸海軍下士陸軍上等兵看護手樂手補ニ於テハ陸海軍刑法普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒ若クハ陸軍懲罰令若クハ憲兵條例第三十五條ニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ
 - 七 諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ劾官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 第二十五條 退職恩給、免除恩給、增加恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ劾奪ス(三十二年法律第七十八號ヲ以テ第一號中追加)
- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間之ヲ停止ス
- 一 再ヒ現役ニ就キ若クハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルルル但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキ及准士官以下ニシテ文官判任以上ニ任セラレタルトキハ此限ニアラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

增加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラサレハ停止セサルモノトス

第二十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三個月ニ請求セザレハ其權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七章 扶助料

第二十七條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受クルノ權利アルモノトス

一 第四條第二第三ニ當リ死歿シタルトキ

二 第四條第一第四第五條第一ニ當リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死歿シタルトキ

第二十八條 寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ因由トニ依リ前條第一ニ當ルトキハ第五號表ニ依リ第二ニ當ルトキハ第六號表ニ依テ之ヲ給ス

第二十九條 扶助料ヲ受クル者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

三 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ

三 扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三個月内ニ請求セザルトキ

四 死歿若クハ戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ

第三十條 扶助料ヲ受クル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス

第三十一條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ

- 受クヘキ資格消滅ス
- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
 - 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
 - 三 將校及相當官准士官ニ於テハ陸海軍刑法劊官ヲ附加スル禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ普通刑法其他ノ罰則 依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒタルトキ
 - 四 將校及相當官ニ於テハ陸海軍將校分限令第二條第一項第六項ニ依リ免官トナリタルトキ
 - 五 准士官以下願ニ依リ免官若クハ現役ヲ免除シタルトキ
 - 六 陸海軍下士陸軍上等兵看護手樂手補ニ於テハ陸海軍刑法普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ官職ヲ失ヒ若クハ陸軍懲罰令若クハ憲兵條例第三十五條ニ依リ官職ヲ免セラレタルトキ
 - 七 諸卒ニ於テハ普通刑法其他ノ罰則ニ依リ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ陸海軍刑法ニ依リ將校ニ對シテ劊官ヲ附加スヘキ禁錮ノ刑ニ處セラレタルトキ
- 第二十五條 退職恩給、免除恩給、增加恩給ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ恩給ヲ劊奪ス(三十二年法律第七十八號ヲ以テ第一號中追加)
- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間之ヲ停止ス
- 一 再ヒ現役ニ就キ若ハ文官判任以上ニ任シ政府ヨリ俸給ヲ受クルルル但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキ及准士官以下ニシテ文官判任以上ニ任セラレタルトキハ此限ニアラス

二 公權ヲ停止セラレタルトキ
 增加恩給ハ公權ヲ停止セラレタル場合ニアラサレハ停止セサルモノトス

第二十六條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三個月ニ請求セザレハ其權利ヲ拋棄シタルトモトス

第七章 扶助料

- 第二十七條 軍人左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其寡婦ハ扶助料ヲ受クルノ權利アルモノトス
- 一 第四條第二第三ニ當リ死歿シタルトキ
 - 二 第四條第一第四第五條第一ニ當リ恩給ヲ受ケ又ハ之ヲ受クヘキ權利ヲ有シテ死歿シタルトキ
- 第二十八條 寡婦扶助料ノ年額ハ當該軍人ノ官階ト死歿ノ原因トニ依リ前條第一ニ當ルトキハ第五號表ニ依リ第二ニ當ルトキハ第六號表ニ依テ之ヲ給ス
- 第二十九條 扶助料ヲ受クル者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其權利消滅ス
- 一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ
 - 二 日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキ
 - 三 扶助料ヲ受クヘキ權利ノ生シタル日ヨリ三個月内ニ請求セザルトキ
 - 四 死歿若クハ戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シタルトキ
- 第三十條 扶助料ヲ受クル者公權ヲ停止セラレタルトキハ其間扶助料ヲ停止ス
- 第三十一條 寡婦ナキトキ又ハ扶助料ヲ受クル寡婦死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ其扶助料ヲ

孤兒ニ給ス

扶助料ヲ受クル者公權停止中ハ其轉給ヲ受クヘキ者ニ之ヲ給ス

第三十二條 孤兒扶助料ハ數子アルトキハ家名繼襲者ニ給シ非戶主軍人ノ孤兒ニ在テハ長子ニ給ス其繼襲者及長子死歿シ若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿ツルトキハ順次年少者ニ及フモノトス但家名繼襲者ヲ除クノ外男子ヲ先ニシテ女子ヲ後ニス

第三十三條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦及孤兒ナク若クハ扶助料ヲ受ケタル寡婦及孤兒戶籍ヲ去リ若クハ死歿シ若クハ權利消滅シタルトキハ父母又ハ祖父母アルトキハ寡婦ニ相當スル扶助料ノ全額ヲ其父母又ハ祖父母ニ終身給スルコトヲ得

其扶助料ハ先ツ其父ニ給シ其父存在セサルトキ若クハ權利消滅シタルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此例ニ依ル

第三十四條 扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死歿シタル軍人ノ戶籍内ニアル二十歳未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキトキハ寡婦ニ相當スル扶助料一箇年分ヨリ少カラス五箇年ヨリ多カラサル金額ヲ人員ニ拘ハラス一時限リ其兄弟姉妹ニ給スルコトヲ得

第三十五條 第二十七條乃至第三十四條ヲ適用スヘキ軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ハ其軍人現役中陸海軍兵籍簿ニ登記シタル者ニ限ル

第三十六條 此法律ニ於テ孤兒トハ年齢二十歳未滿ノ男女子ニシテ未タ結婚セサル者ヲ云フ但養男

女子ハ家名繼襲者ニ限ル

第三十七條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ之ヲ給ス

雜則

第三十八條 陸軍軍人及海軍准士官以上ニシテ明治四年八月以前ヨリ勤仕ノ者退職若クハ免官スルトキハ同年七月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數 應スル金額ヲ一時支給ス

海軍下士以下ニシテ明治二年五月以前ヨリ勤仕ノ者ハ同年四月以前ノ勤仕ニ對シテハ同年同月ノ現官等ニ相當スル月俸ノ半額ヲ以テ奉職年數ノ一個年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス

第三十九條 豫備後備ニ在ル者平時召集中職務ノ爲メ死歿シ又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキハ此法律ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

屯田兵下士卒ニシテ定規ノ補助ヲ受クル者平時軍隊勤務ノ爲メ死歿シ又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサルトキ亦同シ

第四十條 陸軍見習士官、海軍候補生、陸海軍衛生徒定規ノ補助ヲ受クル屯田兵下士卒及海軍水雷兵ハ第四條第二第三ニ因リ死歿シ又ハ傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ服役ニ堪ヘサル者ニ限リ恩給ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第四十一條 恩給ノ支給ハ陸海軍大臣ノ證明ニ依リ恩給局ノ審査ヲ經テ内閣總理大臣之ヲ裁定ス行政上ノ處分ニ由リ恩給ニ關スル權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ六個月以内ニ恩給局ニ具申シ

テ裁決ヲ請フコトヲ得其裁決ニ服セサル者ハ一個年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ恩給局ノ裁決ハ終審確定ノモノトス

- 一 傷痍疾病ノ原因及ヒ輕重
- 二 職務ニ堪ユルト否ラサルト

第四十二條 恩給ハ實買讓與質入書入スルコトヲ得ヌ又負債ノ抵償トシテ差押フルコトヲ得ヌ

第四十三條 明治八年達海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料及扶助料ヲ受クル者ハ總テ該令ニ依ルヘシ但明治九年達陸軍武官恩給令ニ依リ受ケタル傷痍恩給ヲ除クノ外其權利消滅及停止ハ此法律ニ依ル

明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル者並ニ明治十五年同十七年朝鮮京城變亂ノ際該國ニ駐在若クハ派遣シタル者ノ從軍年計算ハ總テ從前ノ命令ニ依ル

第四十四條 此法律施行前ニ現役ヲ離レタル者ノ恩給ハ明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依ルヘシ但此法律施行ノ月ヨリ三箇年以内ニ請求セサレハ之ヲ受クヘキ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第四十五條 此法律ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

第一號 退職恩給表

年	親任官		勅任官		佐尉官		及相當官		准士官	
	一	二	一	二	一	二	一	二	一	二
十一年	千五百四十二	千四百五十四	千五百五十四	千四百六十六	六百四十四	六百五十六	六百六十八	六百八十	六百九十二	七百零四
十二年	千五百五十四	千四百六十六	千五百六十六	千四百七十八	六百五十六	六百六十八	六百八十	六百九十二	七百零四	七百一十六
十三年	千五百六十六	千四百七十八	千五百七十八	千四百九十二	六百六十八	六百八十	六百九十二	七百零四	七百一十六	七百二十八
十四年	千五百七十八	千四百九十二	千五百九十二	千五百零六	六百八十	六百九十二	七百零四	七百一十六	七百二十八	七百四十
十五年	千五百九十二	千五百一十	千六百零六	千五百二十	六百九十二	七百零四	七百一十六	七百二十八	七百四十	七百五十六
十六年	千六百零六	千五百二十四	千六百一十八	千五百三十二	七百零四	七百一十六	七百二十八	七百四十	七百五十六	七百六十八
十七年	千六百一十八	千五百三十六	千六百三十二	千五百五十二	七百一十六	七百二十八	七百四十	七百五十六	七百六十八	七百八十
十八年	千六百三十二	千五百五十二	千六百四十八	千五百六十八	七百二十八	七百四十	七百五十六	七百六十八	七百八十	七百九十二
十九年	千六百四十八	千五百六十八	千六百六十四	千五百八十四	七百四十	七百五十六	七百六十八	七百八十	七百九十二	八百零四
二十年	千六百六十四	千五百八十四	千六百八十	千六百	七百五十六	七百六十八	七百八十	八百零四	八百一十六	八百二十八
二十一年	千六百八十	千六百	千六百九十六	千六百十二	七百六十八	七百八十	八百零四	八百一十六	八百二十八	八百四十
二十二年	千六百九十六	千六百十二	千七百一十二	千六百二十八	七百八十	八百零四	八百一十六	八百二十八	八百四十	八百五十六
二十三年	千七百一十二	千六百四十八	千七百二十八	千六百六十四	八百零四	八百一十六	八百二十八	八百四十	八百五十六	八百六十八
二十四年	千七百二十八	千六百六十四	千七百四十四	千六百八十	八百一十六	八百二十八	八百四十	八百五十六	八百六十八	八百八十
二十五年	千七百四十四	千六百八十	千七百六十	千七百一十六	八百二十八	八百四十	八百五十六	八百六十八	八百八十	八百九十二
二十六年	千七百六十	千七百一十六	千七百七十六	千七百三十二	八百四十	八百五十六	八百六十八	八百八十	八百九十二	九百零四
二十七年	千七百七十六	千七百三十二	千七百九十二	千七百四十八	八百五十六	八百六十八	八百八十	八百九十二	九百零四	九百一十六
二十八年	千七百九十二	千七百四十八	千八百零八	千七百六十四	八百六十八	八百八十	八百九十二	九百零四	九百一十六	九百二十八
二十九年	千八百零八	千七百六十四	千八百二十四	千七百八十	八百八十	八百九十二	九百零四	九百一十六	九百二十八	九百四十

三十一年	二千九百七十	二千五百八十	二千三百八十八	七百九十四	五百九十三	三百九十五	二百九十七	三百三十七	百九十八
三十二年	二千四百六十	二千四百四十	二千四百十八	八百四十六	六百八十四	四百五十四	三百四十四	二百四十三	二百
三十三年	二千五百四十	二千四百四十	二千四百三十	千三百三十四	八百二十四	六百五十四	四百五十四	三百四十四	二百三十四
三十四年	二千七百五十	二千六百六十	二千四百五十	千三百三十四	八百二十四	六百五十四	四百五十四	三百四十四	二百三十四
三十五年	二千四百四十	二千六百八十	二千四百七十	千五百十四	八百四十四	六百三十四	四百五十四	三百五十四	二百十四
三十六年	二千二百二十	二千七百四十	二千四百八十	千六百三十四	八百五十四	六百三十八	四百五十四	三百五十四	二百三十四
三十七年	二千五百五十	二千七百二十	二千四百八十	千五百五十四	千七百五十四	八百六十四	六百四十五	四百三十四	三百五十四
三十八年	二千七百七十	二千七百四十	二千五百二十	千八百八十四	八百七十四	六百五十三	四百三十五	三百二十七	二百六十一
三十九年	二千二百四十	二千七百六十	二千五百四十	千八百八十四	八百八十四	六百六十四	四百四十四	三百三十四	二百六十四
四十年	二千二百四十	二千七百八十	二千五百五十	千八百九十四	八百九十四	六百六十八	四百四十五	三百三十四	二百六十七

第二號 免除恩給表

年	官	下					卒											
		判	等	三	等	四	海軍一等卒	海軍二等卒	陸軍三等卒	海軍四等卒	海軍五等卒							
十一年	六	十	四	五	十	四	四	四	十	四	三	六	四	三	二	八		
十二年	六	十	二	四	五	十	四	四	五	十	四	四	三	七	四	三	三	九
十三年	六	十	四	五	十	四	四	四	十	四	三	八	四	三	三	四	三	十
十四年	六	十	六	十	四	五	十	四	四	三	九	四	三	十	五	四	三	十

十五年	六	十	九	四	六	十	二	四	五	十	六	四	五	十	一	四	四	十	一	四	三	六	四	三	二	
十六年	七	十	二	四	六	十	五	四	五	十	三	四	四	十	四	四	三	四	十	三	四	三	八	四	三	三
十七年	七	十	五	四	六	十	八	四	六	十	四	五	五	十	四	四	五	十	四	四	十	三	五	四	三	五
十八年	七	十	七	四	七	十	四	六	十	二	四	五	十	四	四	十	四	四	十	一	四	三	六	四	三	六
十九年	七	十	九	四	七	十	二	四	六	十	四	五	十	四	四	十	四	四	十	二	四	三	七	四	三	七
二十年	八	十	一	四	七	十	四	六	十	四	五	十	四	四	十	四	四	十	三	四	三	八	四	三	八	四
二十一年	八	十	四	四	七	十	六	四	六	十	四	五	十	四	四	十	四	四	十	四	四	四	三	九	四	四
二十二年	八	十	七	四	七	十	八	四	七	十	四	六	十	四	五	十	四	四	十	二	四	四	四	四	四	十
二十三年	九	十	四	八	十	一	四	七	十	二	四	六	十	四	五	十	四	四	十	四	四	四	四	四	四	十
二十四年	九	十	二	四	八	十	三	四	七	十	四	六	十	四	五	十	四	四	十	五	四	四	四	四	四	十
二十五年	九	十	四	四	八	十	五	四	七	十	六	四	十	四	五	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十
二十六年	九	十	六	四	八	十	七	四	七	十	八	四	十	四	五	十	四	四	十	七	四	四	四	四	四	十
二十七年	九	十	九	四	八	十	九	四	八	十	四	七	十	四	五	十	四	四	十	八	四	四	四	四	四	十
二十八年	九	十	二	四	九	十	二	四	八	十	四	七	十	四	六	十	四	四	十	八	四	四	四	四	四	十
二十九年	九	十	五	四	九	十	五	四	八	十	四	七	十	四	七	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十
三十年	九	十	七	四	九	十	七	四	八	十	四	七	十	四	七	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十
三十一年	九	十	九	四	九	十	九	四	八	十	四	七	十	四	七	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十
三十二年	九	十	一	四	九	十	一	四	九	十	四	八	十	四	七	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十
三十三年	九	十	四	四	九	十	四	九	十二	四	八	四	十	四	七	十	四	四	十	六	四	四	四	四	四	十

第二十七類 軍人恩給法

三十一年	千九百七十	千五百八十	千三百八十八	千七百九十四	千五百九十三	千三百九十五	千二百九十七	千九百八十八
三十二年	二千二百四	千六百四	千四百四十八	千八百四十六	千六百八十四	千四百四十三	千二百四十二	二千二百
三十三年	二千五百四	千六百四	千四百三十三	千二百五十四	千八百二十四	千六百五十四	千四百四十三	二千三百
三十四年	二千七百五	千六百六	千四百五十五	千三百八十四	千八百三十四	千六百二十三	千四百四十九	二千五百
三十五年	二千九百	千六百八十	千四百七十七	千五百十四	千八百四十四	千六百三十四	千四百五十二	二千六百
三十六年	三千一百	千七百	千四百八十八	千六百三十四	千八百五十四	千六百三十八	千四百五十五	二千七百
三十七年	三千三百	千七百二十	千五百五	千七百五十四	千八百六十四	千六百四十五	千四百五十八	二千八百
三十八年	三千五百	千七百四十	千五百二十	千八百七十四	千八百七十四	千六百五十三	千四百六十一	二千九百
三十九年	三千七百	千七百六十	千五百四十	千八百八十四	千八百八十四	千六百六十四	千四百六十四	三千
四十年	三千九百	千七百八十	千五百五	千八百九十四	千八百九十四	千六百七十四	千四百六十七	三千一百

第二號 免除恩給表

年	官	下					卒						
		判	任	官	海軍一等卒	海軍二等卒	陸軍一等卒	陸軍二等卒	海軍四等卒	海軍五等卒			
十一年	六	十	四	五	十	四	四	十	三	六	三	二	八
十二年	六	十	四	五	十	四	四	十	三	六	三	二	八
十三年	六	十	四	五	十	四	四	十	三	六	三	二	八
十四年	六	十	四	五	十	四	四	十	三	六	三	二	八

十五年	六十九	六十二	五十六	五十一	四十六	四十一	三十六	三十二
十六年	七十二	六十五	五十八	五十三	四十八	四十三	三十八	三十三
十七年	七十五	六十八	六十二	五十七	五十二	四十七	四十二	三十七
十八年	七十九	七十二	六十六	六十一	五十六	五十一	四十六	四十一
十九年	八十一	七十四	六十八	六十三	五十八	五十三	四十八	四十三
二十年	八十四	七十七	七十一	六十六	六十一	五十六	五十一	四十六
二十一年	八十七	八十	七十四	六十九	六十四	五十九	五十四	四十九
二十二年	九十	八十三	七十七	七十二	六十七	六十二	五十七	五十二
二十三年	九十二	八十五	七十九	七十四	六十九	六十四	五十九	五十四
二十四年	九十四	八十七	八十一	七十六	七十一	六十六	六十一	五十六
二十五年	九十六	八十九	八十三	七十八	七十三	六十八	六十三	五十八
二十六年	九十八	九十一	八十五	八十	七十五	七十	六十五	六十
二十七年	一百	九十三	八十七	八十二	七十七	七十二	六十七	六十二
二十八年	一百零二	九十五	八十九	八十四	七十九	七十四	六十九	六十四
二十九年	一百零四	九十七	九十一	八十六	八十一	七十六	七十一	六十六
三十年	一百零六	九十九	九十三	八十八	八十三	七十八	七十三	六十八
三十一年	一百零八	一百零一	九十五	九十	八十五	八十	七十五	七十
三十二年	一百一十	九十七	九十一	八十六	八十一	七十六	七十一	六十六
三十三年	一百一十二	九十九	九十三	八十八	八十三	七十八	七十三	六十八

第二十七類 軍人恩給法

千三十五

千三十四

三十四年	百十七圓百五	圓九十四圓八十六圓七十八圓七十	圓六十二圓五十四圓
三十五年	百二十圓百八	圓九十六圓八十八圓八十	圓七十二圓六十四圓五十六圓
三十六年	百二十二圓百十	圓九十八圓八十九圓八十一	圓七十三圓六十五圓五十七圓
三十七年	百二十四圓百十二	圓百	圓九十一圓八十二圓七十四圓六十六圓五十八圓
三十八年	百二十六圓百十四	圓百	圓九十三圓八十四圓七十五圓六十七圓五十九圓
三十九年	百二十九圓百十六	圓百	圓九十五圓八十六圓七十七圓六十八圓六十
四十年	百三十二圓百十九	圓百	圓九十七圓八十八圓七十九圓七十圓六十一圓

千三十六

第三號 負傷增加恩給表

將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官		下		士		卒	
親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官
一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓
二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓
三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓
四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓
五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓
六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓

第四號 給助金表

將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官		下		士		卒	
親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官
一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓	一	千五百八十八圓百七十三圓
二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓	二	九百四十四圓百六十三圓
三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓	三	七百五十四圓百五十二圓
四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓	四	六百四十四圓百四十二圓
五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓	五	四百五十四圓百三十一圓
六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓	六	三百四十四圓百二十圓

第五號 戰闘及公務ノ爲メ死歿シタル者ノ寡婦孤兒扶助料

將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士		海軍		陸軍		海軍		陸軍	
親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官
一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓	一	千八百四十七圓百五十四圓
二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓	二	八百四十七圓百五十四圓
三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓	三	六百四十七圓百三十四圓
四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓	四	四百四十七圓百一十四圓
五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓	五	二百四十七圓百一十四圓
六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓	六	一百四十七圓百一十四圓

第六號 寡婦孤兒扶助料

將官及相當官		佐尉官及相當官		准士官及下士		海軍		陸軍		海軍		陸軍	
親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官	親任官	勅任官
一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓	一	五百四十四圓百三十一圓
二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓	二	四百四十四圓百二十一圓
三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓	三	三百四十四圓百一十一圓
四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓	四	二百四十四圓百一十一圓
五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓	五	一百四十四圓百一十一圓
六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓	六	四十四圓百一十一圓

○軍人恩給法施行規則 明治二十三年七月
附令第五號
軍人恩給法施行規則左ノ通定ム

軍人恩給法施行規則

第一條 軍人恩給法ニ依リ退職恩給免除恩給增加恩給賑恤金給助金ヲ受クヘキ者ハ其請求書ニ

第二十七號 軍人恩給法施行規則

千三十七

履歷書ヲ添へ公務ノ爲メ受ケタル傷痍疾病ニ起因シ之ヲ請求スル者ハ軍人恩給法第十二條ニ掲クル書類ヲ添へ所管長官ニ差出シ所管長官ヨリ陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ差出スヘシ

第二條 軍人恩給法ニ依リ恩給ヲ受クヘキ資格アル軍人死歿シタルトキハ所管長官ヨリ死者ノ履歷書ヲ其遺族ニ下付スヘシ

軍人恩給法第二十七條第一ニ當ル者アリタルトキハ所管長官ヨリ其事實ヲ證明スヘキ書類ヲ其遺族ニ下付スヘシ

第三條 軍人恩給法ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ其請求書ニ請求者署名シ後見人アレハ其後見人連署スヘシ親族二名親族ナキトキハ居住地ノ戸主二名連署シ市町村長ノ奥印ヲ受ケ左ニ掲クル書類ノ外市町村長ノ證明シタル戸籍調書ヲ添へ地方長官ニ差出スヘシ

一 現役中死歿シタル軍人ノ遺族ハ所管長官ヨリ下渡シタル死者ノ履歷書

二 前項ノ者軍人恩給法第二十七條第一ニ當ルトキハ履歷書ノ外所管長官ヨリ下渡シタル公務ノ爲メ死歿シタル事實ヲ證明スヘキ書類

三 恩給ヲ受ケタル軍人ノ遺族ハ其恩給證書

四 扶助料ヲ受クル者死歿若クハ權利消滅シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ其轉給ヲ受クヘキ者ハ前者ノ恩給證書

五 扶助料ヲ受クル者公權停止ニ因リ其轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判ノ宣告書寫

六 軍人恩給法第三十四條ニ當ル癡疾不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ハ第一第二若ク

ハ第三若クハ第四ニ掲クル書類ノ外醫師ノ診斷證書

地方長官前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ差出スヘシ但明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シ陸軍恩給令ニ依リ恩給ヲ受ケタル元警視局員遺族ヨリ本條ノ請求ヲ爲シタルトキハ地方長官ヨリ内務大臣ニ差出スヘシ

第四條 陸海軍大臣又ハ内務大臣前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ審査ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ恩給計算書ヲ作り證據書類ヲ添へ其傷痍疾病ニ起因スルモノニ付テハ陸軍省醫務局若クハ海軍中央衛生會議ノ覆覈ヲ經タル書類軍人ノ寡婦父母祖父母及兄弟姉妹ノ扶助料ニ付テハ陸海軍兵籍簿ノ寫ヲ添へ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

陸海軍大臣又ハ内務大臣ニ於テ前項請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第五條 内閣ニ於テ恩給ノ請求ヲ許可シタルトキハ恩給證書ヲ作り陸軍省若クハ海軍省若クハ内務省ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ユ

恩給證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通報スヘシ

第六條 軍人恩給法第三十八條ノ月俸ニシテ米給ニ係ルモノハ官吏恩給法施行規則第十一條ノ例ニ依ル

第七條 扶助料ヲ受クル者死歿若クハ戸籍ヲ去リ若クハ婚嫁シ若クハ支給期限ノ滿チタルトキ

ハ地方廳ニ於テ其月ノ翌月ヨリ扶助料ノ支給ヲ廢シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ大藏省ハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ

前項ノ場合ニ於テ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ地方廳ニ於テ其恩給證書ヲ收メテ内閣恩給局ニ送付スヘシ

第八條 軍人恩給法第九條第十四條第十五條ノ傷疾疾病輕重ノ等差ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

第九條 明治八年達陸軍武官傷疾扶助死亡ノ者祭筵家族扶助概則及海軍退隱令明治九年達陸軍武官恩給令明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ退隱料扶助料ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本則ニ依ル

一 死歿又ハ權利消滅又ハ停止ノトキ

二 恩給證書ヲ亡失シタルトキ

三 改氏名又ハ居住地ヲ轉シタルトキ (二十七號令第七號ヲ以テ改正)

第十條 明治十六年達陸軍恩給令海軍恩給令ニ依リ恩給又ハ扶助料ヲ請求スル者ハ本則ニ依ル

第十一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本規則ニ依リ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ區戶長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第十二條 本規則ニ於テ特別ノ規定ヲ設ケサルモノハ總テ官吏恩給法施行規則ノ例ニ依ル

○陸軍見習士官及生徒恩給額 明治三十一年十月勅令第二百四十四號

朕陸軍見習士官及生徒恩給額ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法第四十條ニ該當スル陸軍見習士官及生徒ノ恩給額ニ關シテハ見習士官 見習士官見習藥劑官見習獸醫官及見習軍吏ノ階級ハ判任官一等トシ未タ見習士官トナラサル士官候補生及軍醫學校生徒歌醫學校生徒ノ階級ハ判任官二等トシ其ノ他ノ諸生徒ノ階級ハ兵卒トス

○海軍候補生及海軍生徒ノ恩給額 明治二十七年八月勅令第四百五十五號

朕海軍候補生及海軍生徒ノ恩給額ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

軍人恩給法第四十條ニ該當スル海軍候補生及生徒ノ恩給額ニ關シテハ候補生ノ階級ハ判任官等級一等トシ將校生徒及機關生徒ノ階級ハ判任官等級二等トス

○陸軍諸生徒手當金給與方 明治二十五年十二月勅令第三百十八號

朕陸軍諸生徒手當金給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍軍人ト爲ルヘキ諸生徒ニシテ平時屯營内又ハ野外ニ於テ演習中傷疾ヲ受ケ若クハ之ニ原因シテ疾病ニ罹リ將來軍人ノ服役ニ堪ヘス退學ヲ命シタル者ハ左ノ區別ニ依リ一時限手當金ヲ給スルコトヲ得

二十六陸軍
第三號ヲ
以テ傷疾
ノ等及取
進據方ヲ
定ム

一 軍人恩給法第九條ノ各項ニ等シキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキハ本法第三號表ノ各項ニ從ヒ陸軍卒ノ金額六箇年分ヲ給ス

二 軍人恩給法第十四條第二項ニ等シキ傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキハ本法第三號表第六項陸軍卒ニ相當スル一箇年分ヨリ少クハ五箇年分ヨリ多カラサル金額ヲ給ス

前項ノ傷痕疾病輕重ノ等差ハ陸軍大臣之ヲ定ム

本令ハ明治二十三年七月ヨリ本令實施迄ノ間ニ於テ本令ニ該當スル者ニモ適用ス (二十六勅令第一二二號)

項追加)

二十七年陸軍令第二十二號ノ細則ヲ定ム

○陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則 明治二十七年十一月勅令第九十二號

陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

陸軍軍人軍屬歸郷療養者給與規則

第一條 陸軍軍人軍屬ニシテ戰役ニ從事シ傷痕ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者病院ニ於テ治療ノ後郷里ニ復歸療養セシムルトキハ本規則ニ依リ給與ス

第二條 歸郷療養中手當トシテ軍人ニハ第二表ノ金額軍屬ニハ本俸三分ノ二ヲ給ス

第三條 歸郷ノ際歸郷療養ノ者ニ一回限リ病衣一具ヲ給ス

傷痕ノ狀況ニ依リ簡易ノ補缺器械若クハ割木等ヲ要スルモノハ一回限リ之ヲ給スルコトヲ得

第四條 歸郷旅費ハ當該病院所在地ヨリ本籍地若クハ寄留地迄順路ニ應シ出發ノ際精算拂ト爲

第一表

官	名	月	額	官	名	月	額	
大	將	二	百十三圓	相少	當	二	十六圓	
中	將	百	七十四圓	准	士	官	二十一圓	
相少	當	百	四十九圓	士官ノ特級ニアラスシテ士官ノ勤務ニ服スル者		十	五圓	
相大	當	百	六圓	相曹	當	九	圓五十錢	
相中	當	百	十五圓	相二	等	當	八	圓五十錢
相少	當	百	十四圓	相二	等	當	七	圓五十錢

シ第二表ノ金額ヲ給ス但途中川留、雪支、船待其ノ他避クヘカラサル事故ノ爲メ滞在シ其ノ事由確實ナルモノハ日數ニ應シ同表ノ日當ヲ追給ス

傷項策定ノ爲メ召喚ヲ要スルトキモ亦前項ニ準シテ往復ノ旅費ヲ給ス

第五條 歸郷療養中傷痕、疾病再發シ地方醫師若クハ地方病院ニ就キ治療ヲ受ケタル者ハ其ノ醫師又ハ病院ノ證明ニ依リ實費ヲ官給スルコトアルヘシ

第六條 俸給其ノ他從來受クル所ノ諸給與ハ歸郷療養中其ノ支給ヲ停止ス

第二十八年勅令
第六十五號
於本年六月
以前施行之
法律第二十
七號及於
斯ルモノハ
適用スル
スルモノハ
適用スル
三十二年陸軍
令第二十號及
海軍令第六
號ニ依リテ
支給スル
受領ノ限
出願期
定ム
省令第二十
七年陸軍
令第二十
七年陸軍
令第二十
七年陸軍
令第二十
七年陸軍

相中	相大
當	當
官尉	官尉
三十二圓	四十三圓
諸	諸
生	卒
徒	工
五圓七十錢	

千四十四

名	旅		費
	一汽車料	一船海船料	
大將	八錢	十錢	二十八圓
相將	七錢	八錢	二十圓
上長	六錢	六錢	十五圓
士	六錢	六錢	十五圓
准士	四錢	五錢	十圓
下士	四錢	五錢	七圓
下士	三錢	三錢	五圓
下士	三錢	三錢	三圓

士官ノ階級ニアラスシテ士官ノ勤務ニ服スル者又在職中准士官タル曹長ハ准士官ノ額ヲ給ス
 雇員等ニシテ月給六十圓以上ハ准士官ニ十二圓以上ハ下士ニ十二圓未滿及傭人ハ諸卒ニ準ス
 下士以下及判任官ニ在ラザル者ノ車馬料ハ一里毎ニ金三錢ヲ増給ス

○戰時若ハ事變ニ際シ陸海軍雇員軍艦乗組傭人官用船舶ノ船員等傷疾疾病及死歿ノトキ手當金給與方
 明治二十七年九月
 勅令第六十四號

一 雇員又ハ軍艦乗組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務下士ニ準スヘキ者
 二 臨時兵務ニ服スル者
 第四條 左ニ掲クル者ニハ別表ノ乙額ヲ給ス
 一 雇員、軍艦乗組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務下士ニ準スヘキ者
 二 臨時兵務ニ服スル者

第三條 左ニ掲クル者ニハ別表ノ甲額ヲ給ス
 一 雇員又ハ軍艦乗組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務下士ニ準スヘキ者
 二 臨時兵務ニ服スル者

第二條 傷疾疾病手當金ハ軍人恩給法第九條ニ掲クル各事項ニ準シ別表各項ニ依リテ給ス
 傷疾疾病ニシテ軍人恩給法第九條第一乃至第六ノ事項ヨリ輕キ者ニハ別表第七項ノ金額ヲ給ス

第一條 陸海軍雇員、軍艦乗組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員其ノ他陸海軍傭人等ニシテ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ之ニ原因シテ死歿シタルトキハ本令ニ依リ一時限リ手當金ヲ給ス

又ハ死歿シタルトキ手當金ヲ給與スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 陸海軍雇員、軍艦乗組傭人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員其ノ他陸海軍傭人等ニシテ戰地ニ於テ公務ノ爲メ傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ又ハ之ニ原因シテ死歿シタルトキハ本令ニ依リ一時限リ手當金ヲ給ス

第二十七號
戰時若ハ事變ニ際シ陸海軍雇員軍艦乗組傭人官用船舶ノ船員等傷疾疾病及死歿ノトキ手當金給與方
 千四十五

二 雇員ニシテ月俸十五圓以上ヲ受クル者
第五條 左ニ掲クル者ニハ別表ノ丙額ヲ給ス

一 雇員、軍艦乗組備人、官用船舶ノ船員若クハ鐵道從事員ニシテ其ノ職務卒ニ準スヘキ者
二 雇員ニシテ月俸十五圓未滿ヲ受クル者

第六條 第四條第二及第五條第二ケ月俸額ハ日給ヲ受クル雇員ニ在テハ日給ノ三十日分トス
第七條 常時備人ニハ別表ノ丁額ヲ、臨時備人ニハ戊額ヲ給ス

第八條 軍艦乗組備人ニハ第三條乃至第五條ノ金額ノ外仍各本額ノ四分ノ三ヲ増給ス
第九條 扶助料又ハ甲祭料ハ別表ニ依リ死者ノ遺族ニ給ス但既ニ傷痍又ハ疾病手當金ノ給與ヲ受ケタル者ノ遺族ハ此ノ限ニアラス

第十條 軍艦乗組備人若クハ臨時兵務ニ服スル者ヲ解放スルトキハ其ノ勤勞ニ依リ慰勞金トシテ各給料二箇月分以内ノ金額ヲ給スルコトヲ得

第十一條 第一條第二項ニ該ル者ノ區域及第二條傷痍疾病ノ等差並ニ第三條第四條第五條ノ士官下士卒ニ準スヘキ職務ノ區分ハ陸海軍大臣之ヲ定ム

(別表)

死歿傷痍疾病手當金表

區分	死		傷			疾		病	
	○	歿	一	二	三	四	五		
甲祭料	遺族扶助	一	二	三	四	五	六	七	項

甲	三十圓	百二十圓	百五十圓	百三十圓	百二十圓	百十圓	百	圓	九十圓	八	至十八圓
乙	二十五圓	百	百十五圓	百十圓	百	圓	九十圓	八十圓	七十圓	六	至十六圓
丙	二十四圓	八十圓	百	九十圓	八十圓	七十圓	六十圓	五十圓	四十圓	四	至十四圓
丁	十五圓	六十五圓	七十五圓	六十五圓	六十圓	五十圓	四十五圓	三十五圓	二十圓	二	至十二圓
戊	十圓	五十圓	五十圓	四十圓	三十五圓	三十圓	二十五圓	二十圓	十圓	一	至十圓

備 傷痍者ノ治療費ハ總テ官給トス若シ自己ノ治療ヲ許可シタルトキハ治療費トシテ金三十圓以内ヲ支給スルコトヲ得

○

明治七年以後ノ戰役死歿軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助法明治二十四年十二月法律第四號

朕帝國議會ヲ協贊ス經タル明治七年以後ノ戰役ニ死歿シタル軍人軍屬ノ遺父母及祖父母扶助ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ公布セシム

第一條 明治七年佐賀及臺灣ノ役明治九年熊本及山口ノ役明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シ戰闘若クハ公務ノ爲死歿シ又ハ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ニ原因シテ死歿シタル軍人軍屬ノ現存セル遺父母及祖父母ニハ當時ノ法規ニ依リ從軍者ノ寡婦ノ受ケタル若クハ受クヘキ扶助料ヲ給ス
前項ノ戰役ニ當リ臨時軍隊ニ編入セラレタル者及戰地ニ派遣セラレタル軍人軍屬ニシテ死歿ノ原

三十年大藏省
令第十二號
以テ本法ニ據
リテ本法及扶
助料ヲ受ケル
モノハ該金受
領ノ際本人ノ
出生ノ時キモ
トスヘキモノ

因從軍者ト同シキトキハ其ノ遺父母及祖父母ハ前項ニ依ラシム

前二項ニ掲クル父母祖父母ハ軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者戰死ノ時又ハ死歿ノ原因トナリタル傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタル時ノ陸海軍兵籍簿中若ハ戶籍簿中ニ在ル者ニ限ル

第二條 第一條ニ當ル父母祖父母アルモ同一戶籍内ニ於テ現ニ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其ノ間扶助料ヲ給セズ

第三條 扶助料ハ本法施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス

第四條 扶助料ヲ受クル者ノ權利消滅停止及停止中扶助料ノ支給並ニ扶助料ノ轉給及支給ノ順序ハ現行軍人恩給法ノ定ムル所ニ依ル

第五條 遺父母及祖父母ニシテ廢家其ノ他ノ事故ニ因リ他家ニ入籍シタル者遲クモ本法施行後三箇年内ニ廢家再興又ハ復籍スルトキハ其ノ再興又ハ復籍ノ日ヨリ本法ニ依リ扶助料ヲ受クルコトヲ得

第六條 扶助料ハ轉給ノ場合ヲ除クノ外本法施行ノ日ヨリ三箇年内ニ請求セサルトキハ其ノ權利ヲ拋棄シタルモノトス

第七條 本法ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○明治二十四年法律第四號施行規則明治二十五年三月勅令第三號

明治二十四年法律第四號施行規則左ノ通定ム

明治二十四年法律第四號施行規則

第一條 明治二十四年法律第四號第一條第一項又ハ第二項ニ依リ扶助料ヲ請求スル者ハ其請求書ニ請求者署名捺印シ親族二名親族ガキトキハ居住地ノ戶主二名連署捺印シ市町村長ノ奥印ヲ受ケ市町村長ノ證明シタル現在戶籍調書ヲ添ヘ之ヲ地方長官ニ差出スヘシ

第二條 前條ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添フヘシ但第三條第四條第五條第六條ニ當ルモノハ此限ニアラス

第一 軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者戰死シタル時又ハ死歿ノ原因トナリタル傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル時ノ戶籍調書

本項ノ戶籍調書ハ當時在籍地ノ市町村長ノ證明ヲ受クルヲ要ス但當時ノ戶籍簿現存セスシテ市町村長ニ於テ證明スルコト能ハサルトキハ市町村長ヨリ其理由書ヲ受ケ之ヲ請求書ニ添フヘシ

第二 軍人ノ履歷書及兵籍簿寫軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ノ履歷書

本項ノ書類ハ扶助料ヲ請求セントスル者ノ出願ニ依リ軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ノ戰死シタル時又ハ死歿ノ原因トナリタル傷痕ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタル時ノ所管廳若クハ其事務引繼ヲ受ケタル官廳ヨリ之ヲ下付ス但其履歷書ナキ場合ニ於テハ軍人軍屬トシテ從軍若クハ戰地ニ派遣シタル事實又ハ臨時軍隊ニ編入セラレタル事實並ニ其職務等級ヲ證スヘキ書類ヲ以テ履歷書ニ代ヘ之ヲ下付ス

第三、軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ノ死歿ノ原因ヲ證スヘキ書類

本項ノ書類ハ戰地又ハ陸海軍病院ニ於テ死歿シタル者ニ在テハ之ヲ證スル當時ノ公文ノ寫又ハ其死歿ヲ知リタル始末書ヲ以テ之ニ充ツヘシ

戰地ニ於テ受ケタル傷痕若クハ疾病ニ原因シテ死歿シタル者ニ在テハ當時ノ醫師ノ證明書若クハ傷痕疾病ノ經過ヲ現認シタル者ノ口供書ヲ以テ之ニ充ツヘシ但證據トナルヘキ公文ノ寫アルトキハ之ヲ差出スヘシ

第四、扶助料ヲ請求スル者ノ戸籍内ニ於テ現ニ國庫ヨリ扶助料ヲ受クル者ノ有無ノ申立書

第三條軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ノ寡婦孤兒又ハ其事實ノ申立書第二條第四ノ書ヲ受ケ終身若クハ一時扶助料ヲ受ケタルコトアルトキハ其事實ノ申立書第二條第四ノ書類及軍人ニ在テハ兵籍簿寫ヲ請求書ニ添フヘシ

第四條、軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ニシテ嘗テ恩給ヲ受ケタルコトアルトキハ其事實ノ申立書第二條第一第三第四ノ書類及軍人ニ在テハ兵籍簿寫ヲ請求書ニ添フヘシ

第五條、扶助料ヲ受クル者死歿若クハ權利消滅其轉給ヲ受クヘキ者ハ前者ノ扶助料證書及第二條第四ノ申立書ヲ請求書ニ添フヘシ

第六條、扶助料ヲ受クル者公權停止ニ依リ其轉給ヲ受クヘキ者ハ確定裁判以宣言書寫及第二條第四ノ申立書ヲ請求書ニ添フヘシ

第七條、地方長官扶助料請求書ヲ受ケタルトキハ事實取調ノ上陸軍大臣若クハ海軍大臣ニ差出

スヘシ但臨時軍隊ニ編入セラレ當時陸海軍ニ屬セザル者ノ父母祖父母及明治十年鹿兒島ノ役ニ從軍シタル警視局員ノ父母祖父母ノ扶助料請求ニ係ルモノハ内務大臣ニ差出スヘシ

第八條、陸海軍大臣又ハ内務大臣前條ノ請求書ヲ受ケタルトキハ審査ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ扶助料年額ノ計算書ヲ作リ軍人軍屬及臨時軍隊ニ編入セラレタル者ノ死歿ノ原因ヲ認ムヘキ書類及其他ノ證據書類ヲ添ヘ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

陸海軍大臣又ハ内務大臣ニ於テ前項請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ内閣總理大臣ニ差出スヘシ

第九條、内閣ニ於テ扶助料ノ請求ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作り陸軍省若クハ海軍省若クハ内務省ヲ經テ本人居住地ノ地方廳ヲシテ之ヲ下付セシム但一時ノ支給ニ係ルモノハ辭令書ヲ用ニ

扶助料證書若クハ辭令書ヲ下付シタルトキハ内閣ハ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十條、同一戸籍内ニ於テ他ノ法律規則ニ依リ現ニ國庫ヨリ扶助料ヲ受クル者アルモ明治二十四年法律第四號第一條第一項又ハ第二項ニ當ル者ハ扶助料ヲ請求スルコトヲ得

内閣ニ於テ前項扶助料ノ請求ヲ許可シ扶助料證書ヲ下付スルモ同一戸籍内ニ於テ現ニ扶助料ヲ受クル者アルトキハ其者ノ權利消滅シタル後又ハ公權停止中ニアレハ之ヲ支給セス

本條第二項ノ場合ニ於テ内閣恩給局ハ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十一條、陸軍軍屬ノ父母祖父母ニ給スヘキ扶助料年額ハ明治八年達陸軍武官傷痕扶助及死亡

ノ者祭染立ニ其家族扶助概則第十七條及明治十一年遠戰役死傷者扶助料概則第五條ニ掲クル等級ノ比準ニ依リ之ヲ定ム

第十二條 臨時軍隊ニ編入セラレタル者又ハ海軍軍屬ノ父母祖父母扶助料年額ハ當時命令ヲ以テ指定セラレタル等級ノ比準ニ依リ之ヲ定ム

第十三條 扶助料ヲ受クル者其戸籍内ニ於テ他ノ法律規則ニ依リ國庫ヨリ扶助料ヲ受クル者ヲ生シタルトキハ其旨ヲ居住地ノ地方廳ニ届出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ明治二十四年法律第四號ニ依ル扶助料ノ支給ヲ停止シ其旨ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第十四條 扶助料ノ支給ヲ停止セラレタル者其停止ノ原因解除シタルトキハ居住地ノ市町村長

ノ與印ヲ受ケ地方廳ニ届出ヘシ
地方廳ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ之ヲ大藏省ニ通知シ且其者ノ扶助料支給停止中扶助料ノ轉給ヲ受ケタル者アルトキハ其支給ヲ廢シ扶助料證書ヲ下付シタルモノハ之ヲ收メテ

内閣恩給局ニ送付スヘシ
第十五條 大藏省ニ於テ第十三條第十四條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ内閣恩給局ニ通知スヘシ

第十六條 明治二十三年閣令第五號軍人恩給法施行規則第七條及第十一條同年閣令第三號官吏恩給法施行規則第七條第八條第九條第十條ノ第一第三第十三條第十六條第十七條第十八條ハ

本令ニ準用ス
二〇 公立學校職員退職料

○公立學校職員退職料(明治二十九年三月)

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル公立學校職員退職料等ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 明治二十三年法律第九十號及第十五條ヲ除キ公立實業補習學校ノ教員ニ適用シ同年法律第九十一號ハ第一條及第二十條ヲ除キ公立ノ高等女學校專門學校實業學校(實業補習學校)及其ノ他ノ公立學校ノ學校長教員舍監及書記ニ適用ス(三十二年法律第九十一號ヲ以テ改正)

第二條 明治二十三年法律第九十號第二條及同年法律第九十一號第三條ハ非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シ及校務ノ伸縮ニ依リ退職ヲ命シタル場合ニモ適用ス

第三條 明治二十三年法律第九十號及此法律ニ依リ退職料等ヲ受クヘキ學校長(正教員舍監及書記)ノ在職年月數ハ各公立學校ノ間ニ於テハ之ヲ通算ス(三十二年法律第九十一號ヲ以テ改正)

第四條 府縣立師範學校長(タリシ者)他ノ文官ト爲リ若ハ他ノ文官タリシ者府縣立師範學校長ト爲リタルトキハ其ノ在官年月數ハ明治二十三年法律第九十一號及官吏恩給法ニ於テハ各其ノ規定スル所ニ依リ其ノ在官年數若ハ在職年數中ニ通算スヘキモノトス

第四條ノ三ノ學校長正教員舍監又ハ書記タリシ者教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官ト爲リタルト

キ若ハ教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官タリシ者學校長正教員會監又ハ書記ト爲リタルトキハ各其ノ在官在職年數ヲ通算シ明治二十三年法律第九十號及同年法律第九十一號ノ退隱料扶助料扶助金ヲ受クルコトヲ得(三十二年法律第九十一號ヲ以テ追加)

通算スルコトヲ得ヘキ官職ノ種類及通算ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條ノ三 同一人ニシテ國庫ヨリ公立學校職員退隱料及官吏恩給又ハ軍人恩給(賑恤金、給助金)若ハ同一ノ事由ノ爲メニ公立學校職員遺族扶助料及官吏遺族扶助法又ハ軍人恩給法ニ依レル扶助料ヲ併セ受クヘキ者アルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其ノ一ヲ給ス(上)

附則

第五條 此法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○正教員准教員ノ區別(明治三十二年五月勅令第二百一號)

朕明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 明治二十九年法律第十三號ニ於ケル正教員准教員ノ別左ノ如シ

一 公立實業補習學校ニ於テハ訓導及訓導ノ資格アル學校長ヲ以テ正教員トシ准訓導ヲ以テ准教員トス

二 公立ノ高等女學校專門學校實業學校(實業補習學校ヲ除ク)其ノ他ノ公立學校ニ於テハ教諭助教諭

第二條 明治二十九年法律第十三號ニ於テ通算スルコトヲ得ヘキ文官ノ種類左ノ如シ

一 官立ノ學校及圖書館職員

二 文部省官吏

三 教育事務ニ従事スル北海道府縣郡區島廳並臺灣總督府縣廳事務者官吏(三十二年勅令第四百三十一號ヲ以テ本項中追加)

第三條 前條ニ掲クル文官ノ在官年數ヲ公立學校職員ノ在職年數ト通算スル場合ニ於テ算入又ハ除算ヘキ年月數ハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第四條 明治二十四年勅令第二百四十八號明治二十五年勅令第五號同年勅令第十八號同年勅令第三十二號及明治三十二年勅令第九十六號ハ明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關シ特ニ規定スルモノヲ除クノ外之ヲ準用ス

附則

第五條 明治二十九年勅令第九號ハ廢止ス

○公立學校職員退隱料ニ關スル學校職員ノ資格(明治二十九年三月勅令第九號)

朕公立學校職員退隱料等ニ關スル法律ニ於ケル學校職員ノ資格及同法律ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 明治二十九年法律第十三號ニ於ケル正教員准教員ノ別ハ左ノ如シ

- 一 市町村立ノ徒弟學校及實業補習學校ニ於テハ訓導及訓導ノ資格アル學校長ヲ以テ正教員トシ其ノ他ノ教員ヲ以テ准教員トス
- 二 公立ノ高等女學校專門學校「技藝學校」及其ノ他ノ公立學校ニ於テハ教諭助教諭訓導ヲ以

ラ正教員トシ其ノ他ノ教員ヲ以テ准教員トス

第二條 明治二十四年勅令第二百四十八號明治二十五年勅令第五號同年勅令第十七號同年勅令第十八號及同年勅令第三十二號ハ明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關シ特ニ規定スルモノヲ除クノ外之ヲ適用ス

附則

第三條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

○府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法明治二十三年十月法律第九十一號

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法明治二十三年十月法律第九十一號

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條 府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員合監及書記ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス(三十二年法律第九十一號ヲ以テ條中追加)

第三條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

- 一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ
- 二 傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二十五年文部省令第一號ヲ以テ本法支給規則ヲ定ム

三 廢校ニヨリ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第四條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

一 職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條 官吏恩給法第五條第一項第四項第五項第六條第十一條及第十二條第一項ハ退隱料ニ適用ス(三十二年法律第九十一號ヲ以テ改正)

第六條 退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(三十二年法律第九十一號ヲ以テ追加)

第七條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其間退隱料ノ支給ヲ停止ス(三十二年法律第九十一號ヲ以テ改正)

一 公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

第八條 年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第二十七類 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第九條 府縣立師範學校及公立中學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷病ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退職料ヲ終身給與ス

第十條 在職滿一年以上ニシテ退職シタル府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニハ退職現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金員ヲ一時給與ス但非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シタル者ハ本職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給與ス(三十二年法律第九十號ヲ以テ各項トモ改正)
第三條第四條又ハ第九條ニ依リ退職料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ前項ノ限ニ在ラス

本條ノ退職給與金ヲ受ケタル者他日府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニ再任シ爾後退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ其再任ノ月ヨリ起算ス

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ退職者ノ退職ノ際勤務セシ學校所屬府縣郡市町村ノ負擔トス

第十一條 退職料ノ支給ハ府縣知事ノ證明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退職料ニ適用ス

第十二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス(三十二年法律第九十號ヲ以テ條中追加)

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三 退職料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癩疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス(三十二年法律第九十號ヲ以テ條中追加)

前項ノ扶助金ニ就キテハ官吏遺族扶助法第十七條第二項ヲ適用ス

第十五條 扶助料及扶助金ノ支給並第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員舍監及書記ノ俸給百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ

兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス(三十二年法律第九十號ヲ以テ條中追加)

第十七條 退職料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與並其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條 (三十二年法律第九十號ヲ以テ削除ス)

第十九條 (上全)

第二十條 此法律第一條ハ明治二十五年ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則 明治二十五年一月勅令第五號

朕府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則

第一條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十六條第一項ニ依リ府縣立師範學校長ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ明治二十三年勅令第二百二十五號官吏遺族扶助料法納金收入規則ニ依リ收納スヘシ

公立中學校長並府縣立師範學校公立中學校ノ正教員舍監書記ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ俸給仕拂ノトキ會計事務ヲ管理スル府縣官吏郡役所會計吏又ハ市町村收入役ニ於テ之ヲ差引

スヘシ (三十二年勅令第九十九號ヲ以テ本項中改正)

第二條 前條第二項ニ依リ差引シタル金員ハ會計事務ヲ管理スル府縣官吏郡役所會計吏又ハ市町村收入役ヨリ毎翌月十日マテニ仕譯書ヲ添ヘ之ヲ收入官吏ニ納付スヘシ

第三條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十六條第二項ニ依リ府縣市町村ヨリ國庫ニ納ムヘキ金員ハ毎年四月十日及十月十日マテニ其前六箇月分ヲ金庫ニ拂込ムヘシ

○府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助法ニ於ケル學校職員ノ資格及在職年數算定方 明治三十二年五月勅令第九十六號

朕明治二十五年勅令第十七號改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員トアルハ教諭助教諭訓導トシ准教員トアルハ其ノ他ノ教員トス

第二條 府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

明治十四年六月以前ヨリ在職ノ者ハ同年同月ヨリ起算ス

府縣立師範學校長非職又ハ休職中ノ年數及月數並府縣立師範學校長補在職中ノ年數及月數ハ在職年數ニ算入スヘシ公立中學校長並府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員舍監書記休職中

第二十七條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助法ニ於ケル學校職員ノ資格及在職年數算定方

ノ年數及月數亦同シ

第三條 左ニ掲クル年數及月數ニ在職年數ヨリ除算スヘシ

一 自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者再就職シタル者キハ其ノ前在職ノ年數及月數

二 恩給若ハ退職料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員ニ充テられタル者ハ其ノ前在職ノ年數及月數

三 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退職料及遺族扶助料法第十九條ニ依ル退職料ヲ受ケル者ハ其ノ退職料ヲ受クヘキ事由ヨリ生ジタル前ノ在職年數及月數

○府縣郡市町村制ヲ施行セサル地方ノ府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退職料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法施行方明治二十四年十二月勅令第二百四十八號

及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退職料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市長町村長ノ

職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ島司郡區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

第二條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退職料及遺族扶助料法及市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法ニ規定スル府縣ノ負擔ハ府縣制又ハ地方稅ノ制ヲ施行セサル地方ニ於テハ地方經費ニ屬スル費用ノ負擔トシ市町村ノ負擔ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區町村公費ノ負擔トス

第三條 府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退職料及遺族扶助料法第十六條第二項ノ納金ハ國庫ノ支辨ニ屬スル地方費ヲ以テ維持スル公立學校ノ學校長正教員ノ俸給ニ對シテハ之ヲ納ムルコトヲ要セス

第四條 市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法ニ規定スル府縣ノ負擔ハ府縣内ニ在ル島嶼ト本地ト經濟ヲ異ニスルトキハ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ經内務大臣文部大臣ノ認可ヲ得テ其島嶼ノ分擔額ヲ定ムヘシ

前項ノ規定ニ依リ難キ特別ノ事情アルトキハ府縣知事ニ於テ府縣會ノ議決ヲ經内務大臣文部大臣ノ認可ヲ得テ該島嶼ノ爲ニ別ニ小學校教員恩給基金ヲ備ヘ總テ其負擔ヲ本地ト分別スルコトヲ得

○府縣立師範學校公立中學校校長正教員及市町村立小學校正教員ノ退職料遺族扶助料ニ關スル

權利障害出訴方明治二十五年四月勅令第三十二號

朕府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員並市町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ關シ權利ヲ障害セラレタリトスル者ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員並市町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ關シ行政上ノ處分ニ依リ權利ヲ障害セラレタリトスル者ハ一箇年以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但左ノ事件ニ關シテハ文部大臣若クハ府縣知事ノ裁定ハ終審確定ノモノトス(三十二年勅令第百九十八號ヲ以テ會審書第肥ノ四字ヲ加フ)

- 一 傷疾疾病ノ原因及其輕重
- 二 職務ニ堪ユルト否ナルト

○市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法明治二十三年十月法律第九十號

朕市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法

- 第一條 市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス
- 第二條 在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス
 - 一 年齡六十歳ヲ超ヘ退職ヲ命シタルトキ
 - 二 傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲メ退職ヲ命シタルトキ
 - 三 廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

二十五年文部省令第二號ヲ以テ本法支給規則ヲ定ム

第三條 左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ増加退隱料ヲ給ス

- 一 職務ニ依リ傷疾ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲メ退職ヲ命シタルトキ
- 二 職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ願ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲メ退職ヲ命シタルトキ

第四條 官吏恩給法第五條第一項第四項第五項第六條第十一條及第十二條第一項ハ退隱料ニ適用ス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ改正)

退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其間退隱料ノ支給ヲ停止ス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ改正別除)

- 一 公務ニ就キ退職現時ノ給料額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキ
- 二 五箇年以上受領ヲ怠リタルトキ
- 三 公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條 年齡未タ六十歳ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條 市町村立小學校ノ准教員ハ職務ノ爲傷疾ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第八條 在職滿一年以上ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ニハ退職現時ノ給料半箇月分ヲ以テ在職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金員ヲ一時給與ス但休職滿期ニ依リ退職シタル者ハ其本職最終ノ給料額ニ依リ之ヲ給與ス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ次項トモ改正)

第二條第三條又ハ第七條ニ依リ退職料ヲ受クル者自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ前項ノ限ニ在ラス

本條ノ退職給與金ヲ受ケタル者他日市町村立小學校正教員ニ再任シ爾後退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ其再任ノ月ヨリ起算ス

第九條 退職料ノ支給及第八條ノ給與ハ市町村長ノ證明ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退職料ニ適用ス

第十條 市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受ケルノ權利ヲ有ス

一 在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二 在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三 退職料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條 官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ條中創除)

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受ケヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ

死去シタル者ノ戸籍内ニ在ル二十歳未滿又ハ癡疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條 在職十五年未滿ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ在職三年未滿ノ者ニ在テハ本職最終ノ給料一箇月分ニ當ル金員ヲ給シ二年以後滿一年毎ニ給料年額百分ノ二ニ當ル金員ヲ加フ(三十二年法律第八十九號ヲ以テ本項改正)

第十三條 扶助料及扶助金ノ支給并第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ第八條及ノ三字ヲ創除)

第十四條 府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス

市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ改正)

本條第二項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ(三十二年法律第八十九號ヲ以テ改正)

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退職料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額二分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス(三十二年法律第八十九號ヲ以テ改正)

退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス
恩給基金ノ管理并退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理并退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條 此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年年度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條 府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セザル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數算定方明治二十五年二月勅令第十八號

朕市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數算定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

第二條 左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ニ算入スヘシ

一 市町村立小學校正教員休職中ノ年數及月數

二 明治十四年六月以後市町村立小學校訓導ノ職ニ在リタル年數及月數

第三條 左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ヨリ除算スヘシ(三十二年勅令第九十七號ヲ以テ第一號及第三號ヲ削除シ第二號ヲ改正)

二 自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者再就職シタルトキハ其ノ前在職ノ年數及月數

四 恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ市町村立小學校正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

○巡查看守給助例明治十五年七月第四十一號達

沿革畧記 明治六年十一月第三百九十二號達ヲ以テ巡査守人喪實規程及死傷扶持追賃給規ヲ定ム●八年二月第三號達ヲ以テ前令ヲ改正ス●十五年七月第四十一號達ヲ以テ巡査看守給助例ヲ定メ實施ノ府縣ハ八年第三號達ヲ廢止ス

巡查看守給助例別紙ノ通相定候條各地方ニ於テ給助金額ヲ定メ「内務卿」ノ認可ヲ經テ施行可致此旨相達候事

但實施ノ府縣ハ八年第一第三號達並九年第八十號達別表中免職歸國旅費ハ相廢候儀ト相心得ヘシ

(別紙)
巡查看守給助例

二十年内務省
訓令第二十
三號ヲ以テ年
金支給方ヲ定
ム

三 失跡シタル者
四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者

○巡查看守給助例實施府縣職員ニテ免職者へ一時慰勞金支給方明治十五年十二月第六十六號達
本年七月第四十一號ヲ以テ巡查看守給助例相違候處右實施ノ府縣ニ於テ人員減少等ニ因リ免職スルコトアルトキ奉職五年未滿ノ者ハ免職當日迄ノ勤績年數ニ應シ滿年賜金ノ例ニ依リ一時慰勞金トシテ支給スヘシ此旨相違候事

○陸軍監獄看守海軍監獄看守給助令明治二十七年六月勅令第八十一號

陸軍監獄看守海軍監獄看守給助ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
陸軍監獄看守海軍監獄看守ノ給助ハ明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ニ依ル
但會計卒ニシテ看守ノ職ヲ奉シタル者引續キ看守トナリ仍引續キ看守トナリタル者若クハ看守卒ヨリ看守トナリタル者ハ前在職中ノ年數ヲ看守在職年數ニ通算ス

○海軍警査給助例明治三十二年五月勅令第二百十六號

朕海軍警査給助ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
海軍警査ノ給助ハ明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ニ依ル

二十七年陸軍省令第十八號施行細則ヲ定ム

○貴族院並衆議院守衛ノ給助明治二十七年五月勅令第五十二號

朕貴族院並衆議院守衛給助ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
貴族院並衆議院守衛ノ給助ハ明治十五年太政官達第四十一號巡查看守給助例ニ依ル

○宮内省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例明治二十三年八月宮内省達第十六號

明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例明治二十二年達第二十四號宮内省准官吏恩給例ヲ廢シ宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例左ノ通相定ム

宮内省官吏恩給例

- 第一條 宮内省官吏判任以上ノ者退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス
- 第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス
 - 一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
 - 二 傷病疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合及其給額
 - 三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方
 - 四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別
 - 五 恩給ノ停止及剝奪

二十三年法律第四十三號官吏恩給法ハ本例ニ依リ施行細則ヲ定ム

第二十七類 貴族院並衆議院守衛ノ給助 宮内省官吏准官吏恩給例及遺族扶助例

六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條 宮内大臣ノ在職年數ハ國務大臣ノ例ニ依ル

第四條 政府ノ文官ヨリ宮内官ニ轉任シタル者又ハ恩給ヲ受ケスシテ政府ヲ退キタル後宮内官ニ任シタル者ハ政府ノ判任官以上ニ在リシ月數モ在官年數中ニ通算ス

第五條 准官更宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シヨリ官更トナリタル者ハ准官更在官年數五分ノ一ヲ減シテ官更在官年數ニ通算ス

第六條 准官更ヨリ官更トナリタル當月ハ官更在官年數中ニ算入ス

第七條 俸給ヲ受ケサル官更並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ宮内省官制外ニ屬スル者ニハ恩給ヲ給スルコトナシ但高等官試補及判任官見習ノ傷痍疾病ニ對スルモノハ此限ニアラス

第八條 恩給ノ支給ハ其所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ證明ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ宮内大臣之ヲ裁定ス

第九條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ宮内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第十條 前條再審査ノ請求アルトキ宮内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命ジ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第十一條 恩給ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トナスコトヲ得ス違フ者ハ恩給ヲ停止ス

第十二條 恩給ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル後三箇年ヲ過クレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第十三條 明治二十年達第二號宮内省官吏恩給例ニ依リ恩給ヲ受ケタル者ハ其恩給例ニ依ルヘシ但停止及剝奪ハ本例ニ依ル

第十四條 判任官以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス(二十六年宮内省達第ニ號ヲ以テ一一年以上ノ下十五年未滿ノ五字ヲ削ル)

宮内省准官更恩給例

第一條 宮内省准官更宮内省官制ニ於テ特ニ指定シタル准判任以上ヲ云フ以下皆同シノ退官シタルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ恩給ヲ給ス

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十三號官吏恩給法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

- 一 在官滿十五年以上ノ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合
- 二 傷痍疾病ニ罹リシ者ニ對シ恩給ヲ給スル場合
- 三 在官年數ノ計算並明治四年七月以前ノ在官者ニ對スル支給方
- 四 恩給ヲ受クル者再ヒ官ニ就キ退官シタルトキ支給ノ區別
- 五 恩給ノ停止及剝奪
- 六 恩給ヲ受クル資格ノ存否

第三條 准官更恩給ノ年額ハ退官現時ノ俸給ト在官ノ年數トニヨリ之ヲ定ム即チ在官滿十五年以上十六年未滿ニシテ退官シタル者ノ恩給年額ハ俸給年額百分ノ八十トシ滿十五年以上一年毎ニ四

百分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム但在官四十年以上ノ者ニ給スヘキ恩給ハ四十年ノ額又十五年未滿ノ者ニ給スヘキ恩給ハ十五年ノ額トス

非職滿期ニ由テ退官シタル者ノ恩給ハ其在職最終ノ俸額ニ依テ之ヲ算定ス兼官ニ依テ受クル加俸ハ恩給年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算ス

恩給年額圓位未滿ノ數ハ圓位ニ滿タシム

第四條 官吏ヨリ准官吏トナリタル者通算シテ十五年ニ滿ツルトキハ官吏在官年數ニ五分ノ一ヲ加ヘテ准官吏在官年數ニ通算シ其加算ノ年數並爾後勤績ノ年數ニハ第三條ノ算則ヲ以テ滿一年毎ニ四百分ノ一ヲ加ヘ加算ノ年數ヲ併セ滿四十年ニ至テ止ム

第五條 官吏滿十五年以上在官ノ後准官吏トナリタル者ハ其准官吏退官ノトキニ於テ准官吏在官年數ノ五分ノ一ヲ減シテ官吏在官年數ニ併算シ官吏恩給支給ノ例ニ依ル

第六條 官吏ヨリ准官吏トナリタル常月ハ官吏在官ノ年數中ニ算入ス

第七條 官内省官吏恩給例第四條第八條第九條第十條第十一條第十二條ハ本令ニモ適用ス

第八條 准官吏在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ明治二十三年勅令第九十八號ヲ適用シ一時賜金ヲ給ス(二十六年官内省通令第二號ヲ以テ一
年以上ノ下十五年未滿ノ五字ヲ削ル)

官内省官吏准官吏遺族扶助例

第一條 官内省官吏准官吏判任以上ノ者左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ本例ノ規定スル所ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス但第三條ノ納金ヲ爲スヲ要セサル者ノ遺族ハ此限ニアラス

一 在官十五年以上ノ者在官中死去シタルトキ

二 在官十五年未滿ノ者公務ノ爲メ死去シタルトキ

三 恩給ヲ受クル者死去シタルトキ

第二條 左ノ事項ハ明治二十三年法律第四十四號官吏遺族扶助法ニ規定ノ條項ヲ適用ス

一 寡婦扶助料ノ年額

二 扶助料ヲ支給スヘキ者及支給轉給ノ制限

三 扶助料ノ廢止停止

四 扶助料ヲ受クヘキ資格ノ消滅

五 在官十五年未滿ニシテ在官中公務ノ故ニアラスシテ死去シタル者ノ遺族ニ給スル一時扶助金

第三條 官吏准官吏判任以上ノ者ハ其俸給百分ノ一ヲ内藏寮ニ納ムヘシ

俸給ヲ受ケタル官吏並高等官試補判任官見習補助員顧問員評議員又ハ御用掛勤務殿掌殿部其他何等ノ名稱ヲ附スルモ官内省官制外ニ屬スル者ハ納金ヲ要セス又兼官ニ依テ受クル加俸ニ對シテハ納金ヲ要セス

第四條 扶助料ノ支給ハ本人元所管長所管長ナキ者ハ内事課長ノ申牒ニ依リ調査課ノ審査ヲ經テ官内大臣之ヲ裁定ス

第五條 前條ノ裁定ニ服セサル者ハ六箇月以内ニ官内大臣ニ具狀シ再審査ヲ請求スルコトヲ得

第六條 前條再審査ノ請求アルトキ官内大臣ハ特ニ審査委員ヲ命ジ審査ノ上裁決ス此裁決ヲ以テ終結トシ他ニ告訴スルコトヲ得ス

第七條 扶助料ハ賣却讓與質入書入スルコトヲ得ス又負債ノ抵償トナスコトヲ得ス違フ者ハ扶助料ヲ停止ス

第八條 扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル日ヨリ三年ヲ過クレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

○宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例ニ官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則中適用方明治二十九年四月宮内省達甲第一號

省達甲第一號

宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例ニ明治二十九年三月法律第三十六號官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則第一條第二條第三條第四條第五條ノ規定ヲ適用シ本年四月一日ヨリ施行ス

本令ニ依リ恩給扶助料又ハ一時扶助金ヲ受クヘキモノハ明治二十三年八月九日以後ニ於テ退官シタル者又ハ在官中若ハ退官後死去シタル者ノ遺族ニ限り其ノ恩給及扶助料ハ本令施行ノ日ヨリ起算シテ之ヲ給ス但シ本令施行ノ日ヨリ一箇年ヲ過クレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

○受恩給者就職ノトキ恩給停止方明治二十六年三月宮内省達甲第一號

宮内省ヨリ恩給ヲ受クル者宮内省ヨリ一定ノ俸給ヲ受クル職務ニ就キタルトキハ其間恩給ヲ停止ス

○恩給及扶助料ニ關スル件明治二十五年一月宮内省達甲第二號

第一條 政府ヨリ恩給ヲ受クル者宮内官ニ任シ退官シタルトキハ宮内省官吏恩給例及同准官吏

恩給例第二條第四ノ規定ニ依リ前後恩給ヲ比較シ後官恩給ノ超過額又ハ在官年數ニ對スル増加額ニ限リ終身恩給トシテ之ヲ給ス

第二條 軍人現役十一年以上ニシテ政府ヨリ恩給ヲ受ケタル者宮内官ニ任シ退官シタルトキハ明治二十三年法律第四十五號軍人恩給法第七條ヲ適用シ終身恩給ヲ給ス

第三條 宮内省ヨリ恩給ヲ受クル者政府判任以上ノ官ニ任シ俸給ヲ受クルトキハ其間恩給ヲ停止ス但商業ヲ營ムコトヲ得ヘキ官職ニ在ルトキハ此限ニアラス

第四條 第一條第二條ニ依リ恩給ヲ受クル者又ハ恩給ヲ受クヘキ者死去シタルトキハ宮内省官吏准官吏遺族扶助例ニ依リ其遺族ニ扶助料ヲ給ス

○恩給及扶助料ニ關スル件明治三十年十月宮内省達甲第十一號

第一條 宮内省ヨリ恩給ヲ受クル者政府判任以上ノ文官ニ任シ退官ノ後政府ヨリ恩給ヲ受クルトキハ恩給ノ支給ヲ改メ更ニ左ノ區別ニ依リ算定シタル金額ヲ終身恩給トシテ給ス

一 宮内官及文官退官現時ノ俸給相同シカラサルトキハ前官年數ヲ後官年數ニ通算シ後官ノ俸給ヲ以テ算出シタル恩給額ヲ前官恩給額ニ比較シ同額以上ナルトキハ其ノ算出シタル恩給額ヨリ後官恩給額ヲ控除シタル殘額又其ノ算出シタル恩給額前官恩給額ヨリ寡少ナルトキハ前官恩給額ヨリ後官恩給額ヲ控除シタル殘額

一 宮内官及文官退官現時ノ俸給相同シキトキハ前官年數ヲ後官年數ニ通算シ後官ノ俸給ヲ

三十年宮内省
達甲第一號
以テ本令ニ依
リ恩給及扶助
料ヲ請求スル
トキハ前官年
數ヲ後官年數
ニ通算シ後官
ノ俸給ヲ以テ算
出シタル恩給
額ヨリ後官恩給
額ヲ控除シタル
殘額又其ノ算出
シタル恩給額前
官恩給額ヨリ寡
少ナルトキハ前
官恩給額ヨリ後
官恩給額ヲ控除
シタル殘額

以テ算出シタル恩給額ヨリ後官恩給額ヲ控除シタル殘額

第二條 明治二十五年宮内省達甲第二號第二條ニ依リ恩給ヲ受クル者再ヒ現役ニ就キ更ニ現役ヲ離レタル後政府ヨリ恩給ヲ受クルトキハ恩給ノ支給ヲ止ム但シ宮内省ヨリ受ケタル恩給額政府ノ恩給額ニ比較シ多キトキハ其ノ超過シタル金額ヲ終身恩給トシテ給ス

第三條 第一條第二條ニ依リ恩給ヲ受クル者又ハ恩給ヲ受クヘキ者死去シタルトキハ宮内省官吏准官吏遺族扶助例ニ依リ其ノ遺族ニ扶助料ヲ給ス

○皇宮警手給助例 明治二十六年六月
宮内省達乙第二號
皇宮警手給助例左ノ通相定ム

皇宮警手給助例

第一條 皇宮警手又ハ其遺族ニハ本例ノ規定スル所ニ依リ給助ヲ與フルモノトス

第二條 給助ハ左ノ五種トス

- 一 退職給助
- 二 傷疾給助
- 三 死亡給助
- 四 療治料
- 五 祭祀料

第三條 退職給助ハ奉職滿五年以上ニシテ退職スル者ニ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス

但他人ノ官職ニ轉任スル者モ亦本條ニ準シ打切支給スルモノトス

- 一 奉職滿五年ノ者ハ一時金二十五圓ヲ給シ五年以上十年未滿ハ滿一年毎ニ金五圓ヲ増給ス
- 二 奉職滿十年ノ者ハ終身年金三十圓ヲ給シ十年以上ハ滿一年毎ニ金一圓ヲ増給ス
- 三 前項ノ年金ヲ受クル者再ヒ就職シ滿五年以上ニシテ退職シタルトキハ奉職年數ニ應シ年金ヲ増給ス

第四條 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ル者ハ退職給助ヲ受クルコトヲ得ス

- 一 懲罰ニ依リ免職セラレタル者
- 二 懲罰ニ依リ免職スヘキ者特典ヲ以テ諭旨解職シタル者
- 三 刑事裁判ニ依リ免職セラレタル者

第五條 傷疾給助ハ職務ノ爲メ終身不具トナリタル者ニ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス

- 一 自用ヲ辨スル能ハサル者ハ一等傷トシ終身年金四拾圓ヲ給ス
- 二 自用ヲ辨シ得ル者ハ二等傷トシ終身年金參拾圓ヲ給ス

第六條 退職給助ト傷疾給助トハ併セ給スルモノトス

第七條 死亡給助ハ職務ノ爲メ負傷シ若クハ其負傷ニ原因シテ死去シタル者又ハ職務上傳染病ニ罹リ死去シタル者ノ遺族ニ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス

- 一 寡婦ハ終身年金參拾圓ヲ給ス

- 二 寡婦ナキトキ又ハ年金ヲ受クル寡婦死去シ又ハ婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リタルトキハ其年金ヲ相續ノ孤兒ニ給ス
 - 三 年金ヲ受クヘキ寡婦孤兒ナク死去シタル者ノ父母祖父母若クハ其戸籍内ニアル二十歳未滿又ハ癱疾又ハ不具ノ兄弟姉妹ニシテ從來死者ニ依リテ生計ヲ爲セシ者アルトキハ血縁ノ近キ者一人ニ一時金百圓ヲ給ス
 - 四 年金ヲ受クル孤兒二十歳ニ滿ツルモ癱疾又ハ不具ナルトキハ年金廢止ノ際一時金百圓ヲ給ス
- 前各項ニ於テ寡婦トハ其夫退職前ニ結婚シタル者孤兒トハ年齢二十歳未滿ニシテ未タ結婚セサルモノヲ云フ
- 第八條 年金ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ年金ヲ廢止ス
- 左ニ掲クル事項ノ一ニ當ルトキハ其間年金ヲ停止ス
- 一 俸給ヲ受クル官職凡ソ官衙ノ俸給ヲ受クル者ヲ云フニ就キタルトキ
 - 二 公權ヲ停止セラレタルトキ
 - 三 失踪シタルトキ
 - 四 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セザルトキ
- 第九條 年金支給ノ期ハ左ノ如シ

- 一 退職又ハ傷病ノ年金ニアリテハ退職又ハ傷等策定ノ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス
 - 二 死亡年金ニアリテハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル月ノ翌月ヨリ始マリ寡婦ハ死去シ又ハ婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リタル月孤兒ハ死去シ又ハ婚嫁シ又ハ戸籍ヲ去リ又ハ年齢二十歳ニ滿テタル月ヲ以テ終ルモノトス
- 第十條 奉職年數ハ月ヲ以テ計算ス
- 第十一條 年金ハ賣却讓與質入書入トナスコトヲ得ス又負債ノ抵償トナスコトヲ得ス違フ者ハ年金ヲ停止ス
- 第十二條 療治料ハ職務ノ爲メ負傷シ又ハ傳染病ニ罹リタル者ニ之ヲ給ス其金額ハ一日壹圓以下トシ傷病又ハ疾病ノ重症ニ依リ不足ヲ生スルトキハ實費ヲ給ス
- 但官費治療ニ係ルトキハ此限ニアラス
- 第十三條 祭祀料ハ奉職中死去シタルトキ左ノ區別ニ依リ之ヲ給ス
- 一 奉職一年未滿ハ一時金拾五圓ヲ給シ滿一年以上二年未滿ハ金五圓ヲ増給シ以上一年毎ニ此例ニ依リ同額ノ金員ヲ増給ス
 - 二 職務ノ爲メ死去シタル者ハ前項ノ外一時金百圓ヲ給ス
- 雜 則
- 第十四條 第三條第二第三及第五條ニ依リ退職及ハ傷病給助ヲ受クヘキ者ハ願書宮内大臣宛ニ履

歴書ヲ添へ皇宮警察長ニ差出スヘシ但傷痕給助ヲ受クヘキ者ハ履歴書ノ外皇宮警察長ノ下付シタル傷等策定書寫及現認證書ヲ添付スヘシ

第十五條 第七條ニ依リ死亡給助ヲ受クヘキ遺族ハ願書ニ自署シ後見人アレハ其後見人連署スヘシ親族二名親族トキハ他ノ戸主連署シ市町村長市制町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ區戸長以下皆同シノ與印ヲ受ケ左ノ書類ヲ添へ皇宮警察長ニ差出スヘシ

但シ第七條第二ニ該當スル者ハ前者ノ年金證書同條第四ニ該當スル者ハ醫師ノ診斷書ノミヲ添付スヘシ

一 死亡者ノ履歴書

二 醫師ノ診斷書

三 市町村長ノ證明シタル戶籍調書

第十六條 年金ハ其年額ヲ二分シ六月十二月ニ於テ前六箇月分ヲ内藏寮ヨリ交付ス但資格消滅ノトキハ期月ニ拘ハラヌ之ヲ交付ス

年金ノ交付ヲ受ケタル者ハ受領證ニ市町村長ノ證明シタル生存證書ヲ添へ内藏寮ニ差出スヘシ

第十七條 年金支給ノ終始ハ左ノ如シ

一 重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二 俸給ヲ受クル官職ニ就キタルトキハ俸給ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ支給ヲ終リ其退職シタルトキハ俸給ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

三 公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終リ刑期滿限ノ翌日ヨリ支給ヲ始ム

四 失踪シタル者ハ失踪ノ當日ヲ以テ支給ヲ終リ復歸ノ當日ヨリ支給ヲ始ム

五 許可ヲ得スシテ外國ニ出テ一年以上歸朝セサル者ハ外國ニ出タル當日ヲ以テ支給ヲ終リ歸朝ノ當日ヨリ支給ヲ始ム

第十八條 年金ヲ受クル者轉居又ハ改印又ハ改氏名ヲ爲シタルトキハ市町村長ノ與印ヲ受ケタル屆書ヲ調査課ニ差出スヘシ

前項改氏名ノ屆書ニハ年金證書ヲ添付スヘシ此場合ニ於テハ調査課ハ證書裏面ニ其旨ヲ記載シ課印捺捺ノ上本人ニ下付スヘシ

第十九條 年金ヲ受クル者左ノ場合ニ於テハ本人又ハ親族ヨリ調査課ニ届出ヘシ

一 公權ヲ剝奪セラレタルトキ

但年金證書及確定裁判宣告書寫ヲ添付スヘシ

二 公權ヲ停止セラレタルトキ

但確定裁判宣告書寫ヲ添付スヘシ

三 俸給ヲ受クル官職ニ就キタルトキ及退職シタルトキ

- 四 退職又ハ傷病年金受領者死去シタルトキ
但年金證書ヲ添付スヘシ
 - 五 寡婦孤兒婚嫁シ又ハ戶籍ヲ去リ又ハ死去シタルトキ
但他ニ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキハ年金證書ヲ添付スヘシ
 - 六 孤兒二十歳ニ滿チタルトキ
但年金證書ヲ添付スヘシ
 - 七 失踪シタルトキ及復歸シタルトキ
 - 八 許可ヲ得スシテ外國ニ出タルトキ及歸朝シタルトキ
- 第二十条 水火災盜難等ニ因リ年金證書ヲ亡失シタルトキハ市町村長ノ與印ヲ受ケタル届書ヲ
調査課ニ差出スヘシ調査課ハ年金證書ノ謄本ヲ作り本人ニ下付スヘシ
前項ノ謄本ハ本證書ト同一ノ効力アルモノトス

○第二十八類 臺灣ニ關スル法規

●公文、法例

法例ハ第一類ニ類ス

○法例ヲ臺灣ニ施行ス明治三十一年七月勅令第六十一號

朕明治三十一年法律第十號法例ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
明治三十一年法律第十號法例ヲ臺灣ニ施行ス

○臺灣ニ施行スヘキ法令明治二十九年三月法律第六十三號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル臺灣ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督ハ其ノ管轄區域内ニ法律ノ效力ヲ有スル命令ヲ發スルコトヲ得

第二條 前條ノ命令ハ臺灣總督府評議會ノ議決ヲ取リ「拓殖務大臣」ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ

臺灣總督府評議會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テハ臺灣總督ハ前條第一項ノ手續ヲ經スシテ直ニ第一條ノ命令ヲ發スルコトヲ得

第四條 前條ニ依リ發シタル命令ハ發布後直ニ勅裁ヲ請ヒ且之ヲ臺灣總督府評議會ニ報告スヘシ
勅裁ヲ得サルトキハ總督ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ナキコトヲ公布スヘシ

第二十八類 法例ヲ臺灣ニ施行ス 臺灣ニ施行スヘキ法令

第五條 現行ノ法律又ハ將來發布スル法律ニシテ其ノ全部又ハ一部ヲ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 此ノ法律ハ明治三十五年三月三十一日マテ其ノ效力ヲ有ス(三十二年法律第七號ヲ以テ改正)

○法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限明治二十九年八月勅令第二百九十二號

朕法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限ハ其ノ各縣島廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シテ七日トス但シ公文式第十三條ニ該當スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

○律令ノ規定ニ依リ臺灣ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキノ效力明治三十二年七月律令第二百一號

臺灣總督評議會ノ議決ヲ經タル律令ノ規定ニ依リ本島ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

律令ノ規定ニ依リ本島ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキハ各其改正法律ニ依ル但別段ノ規定アル場合ハ此限ニアラス

本令ハ本令施行前ニ於ケル法律ノ改正ニモ亦之ヲ適用ス

前二項ニ掲クル改正法律ノ本島ニ於ケル施行期日ハ各其改正法律施行期日ニ依ル但改正法律ノ施行

期日本令施行前ニ係ルモノハ本令施行ノ日ヨリ施行ス
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●出版

○著作權法ヲ臺灣ニ施行明治三十二年六月勅令第三百一號

朕著作權法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

著作權法ハ明治三十二年七月十五日ヨリ臺灣ニ施行ス

○臺灣新聞紙條例明治三十三年一月律令第三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣新聞紙條例勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣新聞紙條例

第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ左ノ事項ヲ記載シ管轄地方官廳ヲ經由シ臺灣總督府ニ願出テ許可ヲ受クヘシ

一 題號記載ノ種類及發行ノ時期

二 發行所並發行人ノ住所氏名年齢

許可ヲ得タル前項記載ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキ又ハ之ヲ變更セントスルトキハ更ニ前項ニ

依リ願出ヲ許可ヲ受クヘシ但發行所並發行人ノ住所氏名ノ變更ニ係ルトキハ其許可ヲ得ルマテハ假發行所又ハ假發行人ノ名義ヲ以テ發行スルコトヲ得

公權剝奪又ハ公權停止中ノ者未成年者及本島ニ住所ヲ有セサル者ハ發行人トナルコトヲ得ス

第二條 發行ノ時期ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルトキハ臺灣總督ハ發行ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第三條 發行人ハ保證トシテ金千圓ヲ管轄地方官廳ニ納付スヘシ

保證金ニ關スル規程ハ臺灣總督之ヲ定ム

第四條 新聞紙ハ每號ニ發行人ノ氏名及發行所ヲ記載スヘシ

何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス新聞紙又ハ記載ノ條項ニ署名スル者ハ總テ發行人ト共ニ其責ニ當ラシム

第五條 新聞紙ハ其發行毎ニ先ツ臺灣總督府ニ二部管轄地方官廳及管轄地方法院檢察局ニ各一部ヲ納ムヘシ

第六條 左ノ事項ハ新聞紙ニ記載スルコトヲ得ス

- 一 公判ニ附セサル前重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項並傍聽ヲ禁シタル訴訟ニ關スル事項
- 二 刑事被告人又ハ犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤シ若ハ犯罪ヲ曲庇スル事項
- 三 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書又ハ官廳ノ議事ニシテ許可ヲ得サル事項
- 四 傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事
- 五 外務大臣陸軍大臣又ハ海軍大臣ニ於テ特ニ記載ヲ禁シタル外交又ハ軍事ニ關スル事項

第七條 臺灣總督ハ特ニ命令ヲ發シテ外交又ハ軍出其他秘密ヲ要スル事項ニ關スル記載ヲ禁スルコトヲ得

第八條 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付本人又ハ關係者ヨリ取消又ハ正誤ヲ求メ又ハ取消書正誤書ノ掲載ヲ求メタルトキハ其次回又ハ第三回發行ノ紙上ニ於テ其求ニ應スヘシ但取消書正誤書ノ字數原文ノ二倍ニ超過スルトキハ其超過ノ字數ニ付其新聞社ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ代價ヲ要求スルコトヲ得

官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ抄録シタル事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ取消若ハ正誤ヲ掲載シタルトキハ速ニ取消又ハ正誤スヘシ

取消正誤ハ原文ト同號ノ活字ヲ用非同一欄内ノ首部ニ掲載スヘシ

第九條 左ノ各號ニ該當シタリト認ムル新聞紙ハ臺灣總督ニ於テ其發賣頒布ヲ禁止シ仍發行ノ停止ヲ命シ又ハ其許可ヲ取消スコトヲ得

一 皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆シ政體ヲ變壞シ又ハ朝憲ヲ紊亂セントスル事項

二 第六條第七條ノ禁令ヲ犯シタルモノ

第十條 新聞紙ニ記載シタル事項治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ臺灣總督ニ於テ其發賣頒布ヲ禁止シ文書若ハ口達ヲ以テ發行人ニ戒告ヲ爲スヘシ戒告ヲ爲スモ發行人ニ於テ尙改メサルトキハ其發行ノ停止ヲ命シ又ハ其許可ヲ取消スコトヲ得

保證金ノ關額ヲ完納セスシテ發行シタルトキ亦同シ

第十一條 一人又ハ一社ニシテ數箇ノ新聞紙ヲ發行スル者一箇ノ新聞紙ヲ停止セラレタルトキハ其停止中他ノ新聞紙ヲ發行スルコトヲ得ス

第十二條 臺灣以外ノ帝國領土内又ハ外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ第六條第七條第九條第一號第十條第一項ニ該當スルモノト認ムルトキハ臺灣總督ハ其發賣頒布ヲ禁シ之ヲ差押フルコトヲ得

第十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付誹毀ノ告訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除ク外法院ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ノ爲ニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキ亦同シ

第十四條 裁判確定ノ日ヨリ一週日以内ニ訴訟費用及罰金ヲ完納セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ

前項ノ場合ニ於テハ發行人ハ其通知ヲ受ケタル日ヨリ一週日以内ニ其闕額ヲ完納スヘシ

第十五條 第一條第四條第一項第五條第八條ニ違背シタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條 第十條ニ依リ戒告ヲ爲スモ尙改メヌシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂セントスル事項ヲ記載シタル者又ハ第六條第七條ノ禁令ヲ犯シタル者又ハ第十二條ノ禁止ヲ犯シタル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆シ政體ヲ變壞シ又ハ朝憲ヲ紊亂セントスルノ事項ヲ記載シタル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十八條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪併發ノ例ヲ用非ス

第十九條 此條例ニ關スル公訴ノ時效ハ六箇月トス

第二十條 定期ニ發行スル雜誌通信ノ類ハ其學術技藝統計官令又ハ物價報告等ニ關スルモノヲ除ク外此條例ニ依ル

附則

第二十一條 此條例ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第二十二條 從來發行スル新聞紙及第二十條ニ掲クル雜誌通信ノ發行人ハ此條例施行ノ日ヨリ一箇月以内ニ此條例ニ定ムル手續ヲ爲スヘシ

第二十三條 學術技藝統計官令又ハ物價報告等ニ關スル通信雜誌ノ類其他新聞紙ニアラサル文書圖書又ハ定期ニ發行セサル文書圖書ノ出版ハ當分ノ内臺灣總督定ムル所ノ規定ニ依ル

●學事、軍事、衛生

○臺灣公學校令 明治三十一年七月 勅令第百七十八號

朕臺灣公學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣公學校令

第一條 公學校ハ街庄社又ハ數街庄社ニ於テ其ノ設置維持ノ經費ヲ負擔シ得ルモノト認ムル場合ニ限リ知事廳長之ヲ設立ヲ認可スルモノトス

- 第二條 公學校ノ種別、編制、教則等ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル
- 第三條 公學校ニ就學スル生徒ノ父兄又ハ後見人ハ授業料ヲ納ムヘシ其ノ金額並ニ收入ノ方法ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ
- 第四條 第一條ニ掲クル經費負擔ノ概目ハ左ノ如シ
 - 一 校舍校具及體操場ノ設備並ニ其ノ維持ニ要スル諸費
 - 一 職員ニ關スル諸費俸給並ニ旅費ヲ除ク
 - 一 學務委員ニ關スル諸費
 - 一 前各項外ノ校費
- 第五條 寄附金其ノ他ノ收入金ヲ以テ前條ニ掲クル一切ノ校費ヲ支辨シ得ル場合ニ於テハ授業料ヲ徵收セサルコトヲ得
- 第六條 公學校資産ノ管理ニ關スル規程ハ知事廳長之ヲ定ム
- 第七條 公學校ノ教科用圖書ハ臺灣總督ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ
- 第八條 公學校教員ハ臺灣總督ノ檢定ヲ經タル公學校教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ
- 第九條 辦務署長又ハ支署長ハ知事廳長ノ命ヲ承ケ公學校ヲ管理スヘシ
- 第十條 公學校設置區域内ニハ二名以上ノ學務委員ヲ置クヘシ其ノ職務ニ關スル規程ハ知事廳長之ヲ定ム

附則

- 第十一條 本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス
 - 第十二條 國語學校附屬學校並ニ國語傳習所ノ設備ハ其ノ全部ヲ公學校ニ讓與スルコトヲ得
-
- 臺灣ニ戒嚴令ヲ施行ス明治三十年四月勅令第三百一號
- 朕臺灣ニ戒嚴令施行ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
- 明治十五年第三十六號布告戒嚴令ハ之ヲ臺灣ニ施行ス
-
- 臺灣傳染病豫防規則明治二十九年十月律令第八號
- 臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣傳染病豫防規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
- 臺灣傳染病豫防規則
- 第一條 此規則ニ稱スル傳染病トハ虎列刺、「ペスト」、赤痢、痘瘡、發疹靈扶私、腸靈扶私、鼠布埤利亞（格魯布）及猩紅熱ノ八病ヲ云フ
- 八病外ノ傳染病發生シ此規則ニ依リ豫防法ノ施行ヲ必要ト認ムルトキハ地方長官ハ總督ニ具申シ之ヲ施行スルコトヲ得

第二條 醫師傳染病ヲ診斷シ若ハ其死體ヲ檢案シタルトキハ直ニ患者若ハ死體所在地ノ所轄警察官署又ハ憲兵官署ニ届出ヘシ其治癒死亡ノ場合亦同シ

警察官署又ハ憲兵官署ニ於テ前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ速ニ豫防消毒法ヲ施行スヘシ
第三條 傳染病者アリタルトキハ患者死者ノ處置及消毒ニ關スル事項ハ總テ掛リ官吏ノ指揮ニ從フヘシ

第四條 傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ地方長官ハ左ノ區別ニ依リ交通遮斷ヲ施行スヘシ但第一第二ノ遮斷ハ掛リ官吏直ニ之ヲ施行スルコトヲ得

- 一 傳染病者アリタル家
- 二 傳染病者アリタル家ノ近隣
- 三 傳染病流行地ノ局部又ハ全部

第五條 傳染病流行シ若ハ流行ノ兆アルトキハ地方長官ハ檢疫委員ヲ設置シ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ擔任セシメ又ハ船舶汽車ノ檢疫ヲ行フコトヲ得

第六條 「虎列刺」「ペスト」發疹瘰癧私及痘瘡患者ノ死體ハ十分ノ消毒ヲ行ヒ官ニ於テ指示シタル場所ニ埋葬スヘシ但火葬ハ此限ニアラス

第七條 傳染病毒ニ汚染シタル衣類物品ハ河流池沼溝渠又ハ井戸端ニ於テ洗滌スルコトヲ得ス
傳染病者ノ排泄物ハ投棄スルコトヲ得ス

第八條 第三條第一項ニ違犯シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

三十年府令第六號ヲ以テ本令施行規則ヲ定ム

第九條 第六條第七條ニ違犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス
第十條 第三條掛リ官吏ノ指揮ニ從ハサル者及第四條ノ交通遮斷ヲ犯シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス
但刑法ニ正アルモノハ此限ニアラス
第十一條 此規則ヲ施行スル爲ニ必要ナル細則ハ地方長官之ヲ設クヘシ

○臺灣阿片令 明治三十年一月 律令第二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣阿片令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣阿片令

第一條 本令ニ阿片ト稱スルハ生阿片、阿片煙膏及粉末阿片ヲ云フ

第二條 阿片煙膏及粉末阿片ハ官ヨリ之ヲ賣下クルモノトス
阿片又ハ阿片煙膏ト同一ノ效力ヲ生セシメンカ爲阿片ノ成分ヲ含有セシメタル製劑ハ之ヲ輸入シ製造シ又ハ特許ヲ得スシテ之ヲ賣買授受シ若ハ所有スルコトヲ得ス

第三條 阿片煙膏ハ阿片癮ニ陥リタリト認ムル者ニ限り其購買及吸食ヲ特許シ鑑札ヲ付與ス

第四條 左ノ營業ハ之ヲ特許シ鑑札ヲ付與ス
一 阿片煙膏ノ賣買

二 阿片煙吸食器具ノ製造販賣
 三 阿片煙吸食器具ノ請賣
 四 阿片煙吸食所ノ開設
 五 粉末阿片ノ卸賣但藥劑師又ハ藥種商ニ限ル
 第五條 醫師、藥劑師、藥種商、製藥者ニ限リ官許ヲ得スト雖粉末阿片ヲ所有シ又ハ賣買授受スルコトヲ得
 第六條 第三條第四條ノ特許ヲ得タル者ハ特許料ヲ納ムヘシ其金額ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム
 第七條 阿片煙膏購買吸食又ハ阿片煙吸食所開設ノ特許ヲ得タル者ハ阿片煙吸食器具ヲ購買及所有スルコトヲ得
 第八條 阿片煙膏ヲ輸入シ又ハ製造シタル者ハ五年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ五千圓以下ノ罰金ニ處ス(三十二年律令第二十號ヲ以テ本條以下改正)
 第四條第一號ノ特許ヲ得ス若ハ賣下ノ指定ヲ得スシテ阿片煙膏ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者及第四條第一號ノ特許ヲ得タル者ニシテ阿片煙膏購買吸食特許鑑札ヲ所持セサル者ニ阿片煙膏ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者又ハ官ノ指定ニ依リ阿片煙膏ヲ賣下クル者ニシテ阿片煙膏請賣特許鑑札ヲ所持セサル者ニ阿片煙膏ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者ハ四年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ四千圓以下ノ罰金ニ處ス
 第九條 生阿片粉末阿片又ハ阿片煙膏ト同效力ノ製劑ヲ輸入シ又ハ製造シタル者ハ四年以下ノ重禁

錮ニ處シ又ハ四千圓以下ノ罰金ニ處ス
 生阿片又ハ阿片煙膏ト同效力ノ製劑ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者及醫師藥劑師藥種商製藥者ヲ除ク外第四條第五號ノ特許ヲ得スシテ粉末阿片ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者ハ三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十條 阿片ヲ製造スル目的ヲ以テ罌粟ヲ培養シ又ハ罌粟殼ヲ所有シタル者ハ二年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十一條 阿片煙吸食器具ヲ輸入シ又ハ第四條第二號ノ特許ヲ得スシテ阿片煙吸食器具ヲ製造シタル者ハ三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス
 第四條第二號若ハ第三號ノ特許ヲ得スシテ阿片煙吸食器具ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者及其特許ヲ得タル者ニシテ阿片煙膏購買吸食特許鑑札又ハ阿片煙吸食所開設特許鑑札ヲ所持セサル者ニ阿片煙吸食器具ヲ販賣讓渡交換若ハ貸與シタル者ハ二年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス
 第十二條 税關官吏自ラ第八條第九條第十一條ニ記載シタル輸入ヲ爲シ又ハ其輸入ヲ許シタル者ハ刑各一等ヲ加フ
 第十三條 第四條第四號ノ特許ヲ得スシテ阿片煙ヲ吸食スル爲吸食ノ場所又ハ器具ヲ供給シタル者ハ四年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ四千圓以下ノ罰金ニ處ス

第四條第四號ノ特許ヲ得タル者ニシテ阿片煙膏購買吸食特許鑑札ヲ所持セサル者ニ吸食ノ場所又ハ器具ヲ供給シタル者ハ刑前項ニ同シ

前二項ノ場合ニ於テ營利ノ目的ニ出テサルトキハ刑一等ヲ減ス

第十四條 第三條ノ特許ヲ得スシテ阿片煙ヲ吸食シタル者ハ三年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條ノ特許ヲ得サル者ヲ誘引シテ阿片煙ヲ吸食セシメタル者ハ前項ノ刑ニ一等ヲ加フ

第十五條 官ノ指定ニ依リ阿片煙膏ヲ賣下クル者ヲ除ク外第三條又ハ第四條第一號ノ特許ヲ得スシテ阿片煙膏ヲ所有シ若ハ所持シタル者及第三條又ハ第四條第二號第三號若ハ第四號ノ特許ヲ得スシテ阿片煙吸食器具ヲ所有シ若ハ所持シタル者ハ一年以下ノ重禁錮ニ處シ又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

生阿片又ハ阿片煙膏ト同效力ノ製劑ヲ所有シ若ハ所持シタル者又ハ醫師藥劑師藥種商製藥者ヲ除

ク外第四條第五號ノ特許ヲ得スシテ粉末阿片ヲ所有シ若ハ所持シタル者ハ刑前項ニ同シ

第十六條 第八條乃至第十五條ノ場合ニ於テハ其物品ヲ沒收ス若既ニ其物品ヲ消費シタルトキハ相當價格ヲ徵收ス

第十七條 本令ニ依リ重禁錮ニ處セラレタル者ハ一日ヲ二圓ニ折算シ其金額ヲ以テ禁錮ニ換フルコ

トヲ得但其幾分ヲ納メタルトキハ其割合ニ從ヒ金額ニ相當スル日數ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テハ更ニ裁判ヲ用非ス檢察官ノ意見ヲ聽キ判官之ヲ命ス

第十八條 罰金ヲ完納セサル者ハ五年以下ノ期間獄舎ニ留置シテ罰金ニ換フ但服役セシムルコトヲ得

獄舎ニ留置スヘキ者ハ更ニ裁判ヲ用非ス檢察官ノ申立ニ依リ判官留置ノ期間ヲ定メ之ヲ言渡スヘシ

罰金ノ言渡ヲ受ケタル者其幾分ヲ納メタルトキハ言渡サレタル罰金ノ額ト留置日數トノ割合ニ從ヒ其罰金ニ相當スル日數ヲ控除シテ留置ス

留置期間内罰金ヲ納ムルトキハ前項ノ割合ヲ以テ殘日數ニ充ツ

第十九條 第四條ニ依リ特許鑑札ヲ付與セラレタル者及官ノ指定ニ依リ阿片煙膏ヲ賣下クル者ノ家族雇人ニシテ營業上本令ヲ犯シタルトキハ其營業者又ハ賣下人ヲ處罰ス

第二十條 刑法第二編第五章第一節ハ之ヲ適用セス

附則

本令ハ明治三十一年九月十日ヨリ施行ス

○

○臺灣海港檢疫規則 明治三十二年七月 勅令第二十三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣海港檢疫規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣海港檢疫規則

第一條 臺灣外ノ諸港ヨリ來ル船舶ニ對スル檢疫ハ明治三十二年法律第十九號海港檢疫法ニ依ル

第二條 常時若ハ臨時ニ檢疫ヲ施行スヘキ海港及傳染病ノ種類ハ臺灣總督之ヲ指定ス

附則

第三條 本令ハ明治三十二年八月四日ヨリ施行ス

○臺灣獸疫豫防規則 明治三十二年三月 律令第四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣獸疫豫防規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣獸疫豫防規則

第一條 此規則ニ於テ獸類ト稱スルハ牛、馬、羊、豕、犬ヲ謂ヒ獸疫ト稱スルハ左ノ十病ヲ謂フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽

三 氣腫疽

四 鼻疽及皮疽

五 傳染性胸膜肺炎

六 流行性齧口瘡

七 羊痘

八 豕虎列刺

九 豕羅斯疫

十 狂犬病

第二條 獸類獸疫ニ罹リタルコト若ハ其疑アルコトヲ發見シタル所有者占有者管理人又ハ獸醫ハ直ニ其旨ヲ所轄辨務署又ハ其指定シタル官署若ハ公署ニ届出ヘシ

第三條 獸類獸疫ニ罹リタルトキ若ハ其疑アルトキハ所有者占有者又ハ管理人ニ於テ警察官警察獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ鎖鑕シ若ハ健獸ト隔離シ其監督ヲ承クヘシ

第四條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ病性鑑定ノ爲割檢ヲ要スル獸類ヲ撲殺シ又ハ獸疫感染ノ疑アルモノ若ハ之ニ罹リタル獸類ノ撲殺ヲ命スルコトヲ得

第五條 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類ヲ除ク外此規則ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類殺スルコトヲ得

第五條 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類ヲ除ク外此規則ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類

ノ屍體ハ警察官警察獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ燒棄若ハ埋却スヘシ
前項ノ屍體ハ各部ヲ截取シ又ハ剖檢ヲ爲スコトヲ得ス但病性鑑定又ハ學術研究ノ爲特ニ地方長官
ノ許可ヲ得タルトキハ此限ニアラス

第六條 所有者占有者又ハ管理人ハ警察官警察獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ病毒ニ汚染シ又ハ其
疑アル物品ヲ燒棄埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者占有者管理人車長船長ハ警察官警察獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫ニ罹リ若ハ其疑
ル獸類ヲ緊留シタル場所汽車船舶等ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者占有者管理人車長船長前二項ノ指揮ニ從ハサルトキハ警察官警察獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ
燒棄埋却若ハ消毒ヲ行フコトヲ得

第七條 此規則ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體及病毒ニ汚染シタル物品ノ埋却
地ハ發掘若ハ使用スルコトヲ得ス但地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此限ニアラス

第八條 地方長官ハ獸疫流行中必要ト認ムルトキハ地域ヲ定メ獸類ノ種類ヲ限リ其出入往來並病毒
傳播ノ疑アル物品ノ運搬ヲ停止スルコトヲ得

第九條 地方長官ハ獸疫流行中必要ト認ムルトキハ屠獸及獸類化製ノ營業ヲ停止シ又ハ獸類ノ種類
ヲ限リ其市場ノ開設ヲ停止スルコトヲ得

第十條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ地域ヲ限リ健獸ノ検査ヲ行フコトヲ得

第十一條 臺灣總督ハ外國ヨリ獸疫侵入ノ虞アリト認ムルトキハ有病地ヨリ又ハ有病地ヲ經テ輸入

スル獸類及物品ノ検査ヲ行ヒ若ハ其輸入ヲ停止スルコトヲ得

第十二條 此規則ニ依リ獸類ヲ撲殺シタルトキハ臺灣總督ノ定メタル標準額ノ範圍内ニ於テ手當金
ヲ下付スルコトヲ得但第四條第二項ノ場合ハ此限ニアラス

第十三條 獸疫豫防ニ關スル費用ハ國庫地方稅及一個人ノ負擔トス其負擔區分ハ臺灣總督之ヲ定ム
第十四條 第四條第一項ノ命令ニ違背シタル者及第十一條ノ検査ヲ受ケヌ又ハ輸入停止ニ違背シタ
ル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條 第二條ニ違背シタル所有者占有者管理人又ハ獸醫第五條第六條第七條ニ違背シタル者及
第九條ノ命令ニ違背シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條 第三條ニ違背シタル者及第八條ノ命令ニ違背シタル者ハ刑法第二百四十九條ノ例ニ依リ
處罰ス

第十七條 第一條ニ掲ケタル獸類獸疫ノ外獸疫傳染豫防上必要ト認ムルトキハ此規則ヲ適用スルコ
トヲ得

第十八條 此規則ノ施行細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第十九條 此規則施行ノ地域及時期ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣下水規則(明治三十二年四月
律令第六號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣下水規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣下水規則

- 第一條 下水トハ汚水疏通ノ用ニ供スル溝渠暗渠其他ノ排水路ヲ謂フ
- 第二條 下水ヲ分チテ公共下水私設下水トス
公共下水トハ下水系統中幹線若ハ主要ナル支線タルヘキ位置ヲ有シ地方官廳ニ於テ公共下水線ト認定シタル下水ヲ謂ヒ私設下水トハ公共下水ニアラサル下水ヲ謂フ
- 第三條 公共下水ハ地方官廳ニ於テ管理スヘシ
私設下水ハ地方官廳ノ指定ニ從ヒ其監督ヲ承ケ建物ノ所有者若ハ土地ノ業主ニ於テ管理スヘシ此規則ニ於テ管理ト稱スルハ下水ヲ改築修繕シ必要ナル下水ヲ新設シ有害又ハ不必要ナル下水ヲ廢止シ及下水ノ掃除清潔ニ關スル事項ヲ包含ス
- 第四條 私設下水ハ公共下水又ハ衛生上無害ノ場所ニ排出スルコトヲ要ス
私設下水ヨリ相當ノ距離ニ之ヲ排出スヘキ公共下水又ハ衛生上無害ノ場所ナキトキハ下水溜ヲ設クルコトヲ得
- 第五條 地方官廳ノ指定シタル下水ヲ施設スルニアラサレハ建物ヲ新築改築修繕シ及之ヲ使用スルコトヲ得ス
- 第六條 公共下水ノ兩側三尺以内ノ地ニハ建物ヲ築造スヘカラス但地方官廳ノ認可ヲ受ケタルモノ

ハ此限ニアラス

- 第七條 地方官廳ニ於テ公共下水工事ノ爲土地建物ヲ收用又ハ使用シ若ハ之ヲ變更スルコトヲ必要トスルトキハ其土地ノ業主又ハ建物ノ所有者ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス但之カ爲特ニ生シタル損失ハ補償スルコトアルヘシ
- 第八條 地方官廳ハ公共下水管理ノ全部又ハ一部ヲ其關係アル土地ノ業主建物ノ所有者又ハ公共團體ニ負擔セシムルコトヲ得
- 第九條 地方官廳ハ下水ノ狀況ヲ視察シ必要ノ處分ヲ施行スルカ爲吏員ヲシテ隨時土地建物ニ立入ラシムルコトヲ得
- 第十條 公共下水ニ關スル費用ハ國庫ヨリ之ヲ補助スルコトアルヘシ
- 第十一條 第七條ノ處分ニ不服アル者ハ三十日以内ニ臺灣總督ノ裁定ヲ請フコトヲ得
- 第十二條 下水管理ノ義務アル者其義務ヲ履行セス若ハ指定ノ期限内ニ終了スルノ見込ナキトキ又ハ其方法宜ヲ得サルトキハ地方官廳ハ其事項ヲ執行シ之ニ關スル費用ヲ義務者ヨリ徵收スルコトヲ得
- 第十三條 前項ノ費用ヲ官廳指定ノ期限内ニ納付セサルトキハ臺灣租稅滯納處分規則ノ規定ニ依リ之ヲ徵收ス
- 第十四條 故意過失又ハ懈怠ニ依リ下水ヲ破壞シ又ハ其疏通ヲ妨クル等下水ニ障礙ヲ加フル者アルトキハ地方官廳ハ期限ヲ定メテ原狀回復又ハ障礙排除ヲ命スルコトヲ得
- 第十五條 前項ノ命令ヲ履行セス若ハ指定ノ期限内ニ終了スルノ見込ナキトキ又ハ其方法宜ヲ得サルトキハ

前條ノ例ニ依リ處分ス

附則

第十四條 此規則ハ明治三十二年五月一日ヨリ臺灣總督ノ認可ヲ得テ地方官廳ノ指定シタル地域ニ施行ス

第十五條 道路ニ隨從シ專ラ其用ニ供スル溝渠ハ此規則ニ依ルノ限ニアラス

●貨幣、公債

○政府極印附一圓銀貨幣公納使用方明治三十年十月勅令第三百七十四號

朕臺灣ニ於テ政府極印附一圓銀貨幣公納使用ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣ニ於テハ當分ノ内政府ノ極印ヲ施セル一圓銀貨幣ヲ時價ヲ以テ公納及政府ノ支拂ニ用ウルコトヲ得但シ政府ノ支拂ハ合意ニ依ルヘキモノトス

第二條 前條ノ極印ハ左ノ形式ニ依リ政府引換濟一圓銀貨幣ノ表面ニ施スモノトス

○徑一分五厘

第三條 外國貨幣及私ニ極印ヲ施シタル貨幣ハ爾後公納ニ用ウルコトヲ得ス但シ特ニ外國貨幣ヲ以テ公納ニ用ウルコトヲ規定シアルモノハ此ノ限ニアラス

○

○一圓銀貨無制限通用明治三十一年七月勅令第十九號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經テ一圓銀貨無制限通用ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣ニ於テ一圓銀貨幣及政府ノ極印ヲ施セル一圓銀貨幣ハ時價ヲ以テ其額ニ制限ナク通用スルコトヲ得但時價ハ臺灣總督ノ告示スル所ニ依ルヘシ(三十二年律令第二十九號ヲ以テ本項中追加)

本令ハ明治三十一年八月一日ヨリ施行ス

○

○臺灣ニ於ケル貨幣及銀行ニ關スル事務主管明治三十年一月勅令第九號

朕臺灣ニ於ケル貨幣及銀行ニ關スル事務主管ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣ニ於ケル貨幣及銀行ニ關スル事務ハ大藏大臣ノ管理ニ屬セシム

前項ノ職務ニ就テハ臺灣總督ハ大藏大臣ノ監督ヲ承クルモノトス

●土地、土木、登記

○

○臺灣地籍規則明治三十一年七月勅令第十三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經テ臺灣地籍規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣地籍規則

第一條 土地ノ名稱ヲ分テ左ノ種目トス

- 一 田、畑、建物敷地、鹽田、鑛泉地、養魚池
- 二 山林、原野、池沼、牧場
- 三 祠廟敷地、宗祠敷地、墳墓地、鐵道用地、公園地、練兵場、射的場、砲臺用地、燈臺用地、用惡水路
- 四 道路、溝渠
- 五 河川、堤防
- 六 雜種地

第二條 地方廳ニ土地臺帳及地圖ヲ備ヘ土地ニ關スル事項ヲ登錄ス

登錄ヲ要スル事項ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三條 土地臺帳ノ謄本又ハ一覽ヲ要スル者ハ其所管地方廳ニ請求スルコトヲ得

附則

第四條 此規則施行ノ區域及時期其他施行ニ關スル必要ナル規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

○外國人ノ土地取得ニ關スル件明治三十三年一月
律令第一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル外國人ノ土地取得ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
外國人ハ土地ヲ取得スルコトヲ得ス但外國人カ現ニ所有スル土地ハ此限ニアラス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○土 貸借ノ期間明治三十三年一月
律令第二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル土地貸借ノ期間ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
土地貸借ノ期間ハ貸借ハ二十年其他ノモノハ百年ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス
前項ノ期間ヨリ長キ期間ヲ定メタルトキハ之ヲ前項ノ期間ニ短縮ス

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣土地調查規則明治三十一年七月
律令第十四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣土地調查規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣土地調查規則

第一條 土地臺帳及地圖ヲ調製スル爲業主ヲシテ各自其土地ヲ申告セシメ其地盤ヲ丈量ス

第二條 地盤ノ丈量ニ用ル尺度ハ明治二十四年法律第三號度量衡法ノ規定ヲ準用シ其尺度一丈三尺ヲ以テ一丈トス

第三條 地積ノ名稱、命位ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 絲 甲ノ萬分ノ一
 - 毫 甲ノ千分ノ一
 - 厘 甲ノ百分ノ一
 - 分 甲ノ十分ノ一
 - 甲 二十五戈平方
- 第四條 地盤ヲ丈量スルニ當リ必要ト認ムル場合ニ於テハ業主若ハ其代理人ヲシテ實地ニ立會ハシムルコトヲ得

第五條 土地ノ業主及境界、種目ハ地方土地調査委員會ニ於テ之ヲ査定ス

前項地方土地調査委員會ノ査定ニ對シ不服アル者ハ高等土地調査委員會ニ申立テ其裁決ヲ受クヘシ但査定後六十日ヲ經過シタルトキハ不服ノ申立ヲ爲スコトヲ得ス(三十二年律令第九條)

高等土地調査委員會ノ組織權限ハ別ニ之ヲ定ム

地方土地調査委員會ノ組織ハ臺灣總督之ヲ定ム

第六條 第四條ノ立會ヲ爲ササル者ハ地方土地調査委員會ノ査定ニ對シテ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七條 申告ヲ爲ササル土地ノ業主權ハ國庫ニ屬ス(三十二年律令第九條)

第八條 虛偽ノ申告ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第九條 第四條ノ立會ヲ爲ササル者ハ二十圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

第十條 此規則施行ノ區域及時期其他施行ニ關スル必要ナル規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

○市賦計畫上公用又ハ官用ノ目的ニ供スルタメ豫定告示シタル地域内ニ於ケル土地建物ニ關スル件(明治三十二年十一月律令第三十號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル市賦計畫上公用又ハ官用ノ目的ニ供スル爲豫定告示シタル地域内ニ於ケル土地建物ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

市區ノ計畫上公園、道路、下水其他ノ公用又ハ官用ノ目的ニ供スル爲地方廳ニ於テ豫定告示シタル地域内ニ於テハ地方長官ノ許可ヲ受クルニアラサレハ家屋其他ノ建築物ヲ築造若ハ改築シ又ハ土地ノ形質ヲ變更スルヲ得ス

前項ノ規定ニ違反シ家屋其他ノ建築物ヲ築造若ハ改築シ又ハ土地ノ形質ヲ變更シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處シ尙地方長官ニ於テ相當ノ期間ヲ定メ其除却又ハ原狀回復ヲ命スルコトヲ得若義務者ニ於テ其義務ヲ履行セス若ハ履行スルモ期間内ニ終了スルノ見込ナキトキハ地方長官ハ直ニ之ヲ執行シ又ハ第三者ヲシテ執行セシメ其費用ハ臺灣租稅滯納處分規則ニ依リ徵收スルコトヲ得

○海面ノ埋立及海浦浮洲ノ埋立開墾方(明治三十二年八月律令第二十五號)

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル海面ノ埋立及海浦浮洲ノ埋立開墾ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之

ヲ發布ス

海面ノ埋立及海埔浮洲ノ埋立開墾ハ總テ臺灣總督ノ許可ヲ受クヘシ本令ニ違反シタル者ハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金又ハ三月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス
本令ハ河川其他公用ニ供スル水面並其敷地ニ準用ス
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣鹽田規則明治三十二年六月
律令第十四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣鹽田規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣鹽田規則

- 第一條 鹽田ヲ開設セントスル者ハ政府ニ願出テ豫メ其許可ヲ受クヘシ
- 第二條 帝國臣民ニアラサレハ鹽田ヲ開設スルコトヲ得ス
- 第三條 鹽田ヲ開設セントスル官地ハ競争ニ付セス無償ニテ之ヲ貸付シ全部成功ノ後無償ニテ其業主權ヲ付與ス
- 第四條 前條貸付地面積ノ制限及貸付ノ期間ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第五條 鹽田ヲ開設セントスル土地ハ事業成功ノ程度ニ從ヒ隨時其成否ヲ點檢シ豫定ノ如ク成功セサルトキハ未成功地若ハ全部ニ對シ許可ヲ取消シ若其土地カ第三條ニ依リ貸付シタルモノナルトキハ未成功地若ハ貸付地ノ全部ヲ返還セシムルコトアルヘシ

第三十二年府
第七十二號
以テ本規則ヲ定ム
行細則ヲ定ム

第三十二年府
第五十二號
以テ本規則ヲ令
施行ス
八月二十一日ヨリ

- 前項ニ依リ貸付地ヲ返還セシムルモ其成功地ニ對シテ費シタル費用ハ之ヲ辨償セサルモノトス
- 第六條 第一條ノ許可ヲ受ケ六箇月以内ニ事業ニ著手セサルトキハ天災其他避クヘカラサル事故ニ因ルモノノ外其許可ヲ取消シ官地ニ係ルモノハ仍其土地ヲ返還セシム
- 第七條 第五條第六條ニ依リ貸付地ヲ返還セシメ若ハ自己ノ便宜ニ依リ貸付地ヲ返還シタル場合ニ於テ其土地ニ存在スル建築物其他ノ物件アルトキハ所有者ハ政府ノ指定シタル期限内ニ之ヲ除去スヘシ若其期日ヲ過キテ除去セサルトキハ其物件ハ國ノ所有ニ歸ス
- 第八條 第三條ニ依リ貸付ヲ受ケタル者ハ其土地ノ全部ヲ成功スルニアラサレハ他ノ土地ノ貸付ヲ受クルヲ得ス但相當ノ資力アリテ成功スルヲ得ルモノト認ムルトキハ此限ニアラス
- 第九條 官地ニ開設シタル從來ノ鹽田ノ業主權ハ其開設者若ハ其承繼人ニ付與ス
- 第十條 鹽田ハ地租及地方稅ヲ免除ス
- 第十一條 第一條ノ許可ヲ得スシテ官地ニ鹽田ヲ開設シタルトキハ百圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處シ民地ニ開設シタルトキハ其業主權ヲ沒收ス

附則

- 第十二條 此規則施行以前ニ貸付シタル土地ニ對シテモ仍此規則ヲ適用ス但第六條ノ期間ハ此規則施行ノ日ヨリ起算ス
- 第十三條 此規則施行上必要ナル規程及施行ノ期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣不動産登記規則明治三十三年六月
律令第十二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣不動産登記規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣不動産登記規則

第一條 不動産ニ關スル權利ノ登記ニ付テハ不動産登記法ニ依リ地方法院又ハ其出張所ヲシテ其事
務ヲ取扱ハシム

第二條 不動産登記法中司法大臣ニ付與シタル職權ハ臺灣總督之ヲ行フ

第三條 不動産登記法中地方裁判所ノ職務ニ屬セシメタルモノハ覆審法院ヲシテ之ヲ行ハシ
ム

附則

第四條 此規則ノ施行期日ハ臺灣總督之ヲ定ム

第五條 此規則ハ營分ノ内土地ニ關スル權利ニ適用セス

第六條 明治三十一年律令第九號民事商事及刑事ニ關スル律令施行規則中建物ノ登記ニ關スル規定
ハ此規則施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

○外國領事廳ノ登記簿ノ謄本ノ效力等ニ關スル件明治三十三年二月
律令第四號

三十三年府令
第八十二號
以テ三十二年
十一月一日ヨリ
施行ス

三十三年府令
第三號ヲ以テ
施行細則ヲ定
ム

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル外國領事廳ノ登記簿ノ謄本ノ效力等ニ關スル件勅裁ヲ得テ茲ニ之
ヲ發布ス

第一條 外國人又ハ外國法人カ明治三十二年勅令第二百五十一號ヲ以テ定メタル期日前ニ取得シタ
ル不動産ノ權利ニ關スル外國領事廳ノ登記簿ノ謄本ハ臺灣總督府法院ノ登記簿ト同一ノ效力ヲ有
ス

第二條 不動産登記法第六十三條ノ規定ハ外國領事廳ニ於テ登記シタル不動産ニ付本令施行ノ後
登記ノ申請アリタル場合ニ之ヲ準用ス

第三條 本令施行ニ關スル細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○耕地ニ關スル律令明治三十三年二月
律令第七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル耕地ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

耕人ニアラサル者ハ何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス耕地ヲ占有シ使用シ其他權利ノ目的ト爲スコト
ヲ得ス但別段ノ規定アルモノ又ハ臺灣總督ノ許可ヲ得タルモノハ此限ニアラス
前項ノ規程ニ違背シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ又ハ十一日以上六月以上ノ重禁錮ニ處

●會計、官有財産

○會計法ヲ臺灣ニ施行明治二十九年五月勅令第六十七號

朕會計法ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ公布セシム

明治二十二年法律第四號會計法ヲ臺灣ニ施行ス

○臺灣總督府特別會計法明治三十年二月法律第二號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル臺灣總督府特別會計法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府特別會計法

第一條 臺灣總督府ノ會計ハ特別トシ其ノ歳入及一般會計ノ補充金ヲ以テ其ノ歳出ニ充ツ

第二條 前條ノ收入支出ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第三條 本法ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

○臺灣總督府特別會計規則明治三十年三月勅令第二十七號

朕臺灣總督府特別會計規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

臺灣總督府特別會計規則

第一條 歳入歳出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ大藏大臣ニ送付ス

ヘシ(二十年勅令第三百十七號ヲ以テ左ノ如ク改メ以下同シ)

第二條 所管大臣ハ臺灣總督ヲ以テ仕拂命令官トシ臺灣總督府特別會計ニ屬スル仕拂命令ヲ發セシム

臺灣總督ハ部下ノ官吏ニ分任シテ臺灣總督府特別會計ニ屬スル仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第三條 臺灣總督ハ仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂計算書ヲ調製シ金庫ニ送附スヘシ仕拂計算書ヲ更定シタルトキ亦同シ

第四條 臺灣總督ハ年度内一時收入金額ニ不足ヲ生スルトキハ其ノ不足金額ヲ豫定シ所管大臣ヲ經由シテ大藏大臣ニ仕拂元金ノ繰替ヲ請求スヘシ

第五條 臺灣總督ハ一般會計規則第十八條ノ勅令ニ基キ第一豫備金ノ支出ヲ爲シタルトキハ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ所管大臣ヲ經由シテ大藏大臣ニ通知スヘシ

第六條 大藏大臣第一豫備金支出ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第七條 臺灣總督ハ土地ノ情況ニ依リ一般會計規則第六十九條第七十三條及第七十九條ノ期限ヲ短縮シ又ハ第六十九條ノ保證金ヲ免除スルコトヲ得

第八條 歳入歳出ノ決定計算書ハ豫定計算書ト同一ノ區分ニ據リ所管大臣之ヲ調製シ翌年度十二月三十一日マテニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條 此ノ規則ニ規定セサルモノハ總テ一般會計規則ノ各條項ヲ適用ス

○臺灣ニ於ケル出納官吏身元保證金分納方明治二十九年五月勅令第百六十八號

朕臺灣ニ於ケル出納官吏身元保證金ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣ニ在勤スル出納官吏ノ納付スヘキ身元保證ノ現金ハ明治三十年三月三十一日以前ニ就職シタル出納官吏ニ限リ本人ノ情願ニ依リ向フ三ケ年ニ平分シ毎年四期若クハ毎月ニ分納セシムルコトヲ得

○臺灣總督府三等郵便電信局長身元擔保方明治三十二年三月勅令第百四十七號

朕臺灣總督府三等郵便電信局長身元擔保ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條 臺灣總督府三等郵便及電信局長ハ出納官吏トシテ納ムヘキ身元保證金ノ外尙金二百圓以上

ノ擔保金ヲ納ムヘシ納付金額ハ臺灣總督之ヲ定ム

第二條 三等郵便及電信局長ハ就職ノ時擔保金ヲ全納スヘシ但シ本令施行後滿二箇年以内ニ就職スル三等郵便及電信局長ニ限リ本人ノ情願ニ依リ就職ノ日ヨリ起算シ十箇月間ニ擔保金ヲ分納セシムルコトヲ得

本令施行ノ際現ニ三等郵便及電信局長ノ官職ニ在ル者ノ擔保金納期ニ關スル規定ハ臺灣總督之ヲ定ム

第三條 臺灣總督ノ規定スル三等郵便及電信局長服務規約ニ依リ臺灣總督ヨリ損害ノ賠償又ハ謝金ノ納付ヲ命シタルトキ其ノ指定シタル期限内ニ納付セサルトキハ擔保金ヲ以テ之ニ充用スルコトヲ得

第四條 三等郵便及電信局長解職シタルトキハ事務引繼了ノ日ヨリ起算シテ六箇月以内ニ擔保金ヲ還付ス

第五條 前各條ニ規定セサル事項ハ出納官吏身元保證金ニ關スル規程ヲ適用ス但シ會計規則第二百一條第二項ハ之ヲ適用セス又會計規則第四百條及第四百五條ニ依リ各省大臣ノ爲スヘキ職務ハ臺灣總督之ヲ行フ

○臺灣總督府ニ於テ工事又ハ物件ノ買入借入ヲ爲ストキハ隨意契約ニ依ルヲ得明治二十九年九月勅令第百十號

朕臺灣總督府ニ於テ隨意契約ヲ以テ工事又ハ物件ノ買入借入ヲ爲スノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
臺灣總督府ニ於テ千五百圓ヲ超ヘサル工事又ハ物件ノ買入借入ヲ爲ストキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

○臺灣總督府ニ於テ施行スル工事ノ隨意契約方明治三十一年六月勅令第三百二十九號

朕臺灣總督府ニ於テ施行スル工事ノ隨意契約ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府管内ニ於テ施行スル工事ハ競争ニ付セス當分ノ間隨意契約ニ依ルコトヲ得(三十二年勅令第三百九十八號ヲ以テ管內ノ二字ヲ加フ)

○臺灣總督府ニ於テ施行スル鐵道敷設燈臺建築及築港其他直營事業ニ關スル隨意契約方明治三十一年六月勅令第三百三號

朕臺灣總督府ニ於テ施行スル鐵道敷設燈臺建築及築港其ノ他直營事業ニ關スル隨意契約ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣總督府ニ於テ施行スル鐵道敷設燈臺建築及築港其ノ他直營ノ事業ニ要スル物件ノ賣買貸借及勞力供給ノ請負ハ同府管内ニ限り隨意契約ニ依ルコトヲ得

○臺灣總督府ニ於テ鐵道事業ニ要スル鐵道用品ノ賣買貸借ニ關スル隨意契約方明治三十二年七月勅令第三百二十三號

朕臺灣總督府ニ於テ鐵道事業ニ要スル鐵道用品ノ賣買貸借ニ關スル隨意契約ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公布セシム

臺灣總督府ニ於テ鐵道事業ニ要スル車輛器具機械其ノ他鐵道用品ヲ官廳若ハ私設鐵道會社ヨリ買入借入又ハ官廳若ハ私設鐵道會社ニ賣渡貸渡ストキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

○官設鐵道郵便電信郵便爲替及郵便貯金ニ屬スル現金出納ニ關スル件ヲ臺灣ニ施行明治三十三年六月勅令第二百六十號

朕明治三十三年法律第五十號ヲ臺灣ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第五十號ヲ臺灣ニ施行ス

○臺灣官有森林原野及產物特別處分令明治二十九年九月勅令第三百一十一號
朕臺灣官有森林原野及產物特別處分令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

臺灣官有森林原野及產物特別處分令

第一條 臺灣總督ハ左ノ場合ニ限り官有森林原野及其ノ產物ヲ競争ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡シ又ハ賣渡スコトヲ得(三十二年勅令第二百九十一號ヲ以テ第十七號ヲ追加ス)

- 一 官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡シ及其ノ建築材料ヲ賣渡ストキ
 - 二 開墾若クハ牧畜ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡ストキ
- 但森林原野ヲ賣渡スニハ其ノ買受豫約人ニ於テ豫定ノ事業ヲ成功シタル後ニ限ル

第二十九年府令
第四十四號
以テ臺灣官有
森林原野及產
物特別處分令
ヲ公布セシム
同府令第四
十五號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
十七號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
十八號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
十九號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十一號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十二號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十三號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十四號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十五號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十六號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十七號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十八號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
二十九號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十一號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十二號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十三號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十四號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十五號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十六號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十七號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十八號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第三十九號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四
第四十號ヲ以テ
臺灣官有森林
原野及產物特
別處分令第四

- 三 鑛業ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ建築材料又ハ薪炭材ヲ賣渡ストキ
- 四 植樹ノ爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ
- 五 非常ノ災害ニ罹リタル地方人民ノ爲メ建築材料ヲ賣渡ストキ
- 六 部分木ヲ仕付人ニ賣拂フトキ
- 七 從來ノ慣行ニヨリ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若クハ土石ヲ賣渡ストキ
- 八 地籍調査ニ依リ發見シタル開墾地ヲ其ノ開墾人ニ賣渡ストキ
- 九 建築其ノ他ノ用ニ供スヘキ土石ヲ發見シタル場合ニ於テ之ヲ其ノ發見人ニ賣渡ストキ
- 十 季節アル生産物ヲ賣拂フトキ
- 十一 開墾牧畜若クハ植樹ノ爲メ貸渡シタル森林原野ノ區域内ニアル産物ヲ其ノ借受人ニ賣拂フトキ
- 十二 林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ産物ヲ賣渡ストキ
- 十三 部分方法ニ依リ林産物製造ノ爲メ其ノ原料ヲ附シ八ニ賣渡ストキ
- 十四 見積借地料一箇年金二百圓ニ超エサル森林原野ヲ貸渡ストキ
- 十五 見積代價二百圓ニ超エサル主副産物ヲ賣拂フトキ
- 十六 河海沼湖濠池ノ埋立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ
- 十七 樟腦製造ノ爲メ樟樹若クハ其他ノ木竹ヲ賣拂フトキ
- 第二條 臺灣總督ハ競争ニ付シタル物件ノ豫定價格ニ達セズ該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ爾後三十日以内ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下若クハ貸下ヲ望ムモノアルトキハ隨意之ヲ賣渡若クハ貸渡スコトヲ得

第三條 臺灣總督ハ森林保護ノ爲メ必要ヲ認ムルトキハ制限ヲ附シ地元人民ニ森林ノ副産物ヲ無料

ニテ採取セシムルコトヲ得
 第四條 臺灣總督ハ森林手入ノ爲メ採取シタル産物ノ全部又ハ一部ヲ手入料トシテ下付スルコトヲ得

第五條 本令施行ニ關スル細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

○臺灣官有森林原野及産物特別處分令ニ依リ賣渡シタル土地ノ地租賦課方明治三十年三月
律令第三號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣官有森林原野及産物特別處分令ニ依リ賣渡シタル土地ノ地租ニ關スル件勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

明治二十九年勅令第三百十一號臺灣官有森林原野及産物特別處分令第一條第二號ニ便リ賣渡シタル土地ハ其翌年ヨリ二十箇年ノ後ニアラサレハ地租ヲ課セス

○臺灣供託規則明治三十二年六月
律令第十一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣供託規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣供託規則

第一條 民法商法其他法令ノ規定ニ依ル供託ニ付テハ供託法ニ依ル

第二條 供託法中司法大臣ニ付與シタル職權ハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

第三條 此規則ハ明治三十二年六月十日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 臺灣總督ハ當分ノ内其指定シタル供託所ヲ以テ供託法ニ定メタル倉庫營業者ニ代フルコトヲ得

●租税 附專賣

○臺灣ニ關稅定率法ヲ施行ス 明治三十一年九月勅令第二百十號

朕臺灣ニ關稅定率法ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十年法律第十四號關稅定率法ヲ明治三十二年一月一日ヨリ臺灣ニ施行ス

○臺灣關稅規則 明治三十二年七月

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣關稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣關稅規則

第一條 船舶ノ出入及貨物ノ輸出入ニ關シテハ明治三十二年法律第六十一號關稅法ニ依ル但第三十五條ノ關稅道路及第九十九條ニ依リ開港トナスヘキ場所及其開港ニ於テ輸出又ハ輸入スヘキ貨物

ノ種類ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

第二條 關稅法中大藏大臣ノ職務ニ屬スルモノハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

第三條 此規則ハ明治三十二年八月四日ヨリ施行ス

明治三十年律令第一號ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

○臺灣輸出稅及出港稅規則 明治三十二年七月

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣輸出稅及出港稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣輸出稅及出港稅規則

第一條 本島ヨリ輸出スル物品ニシテ附屬稅表ニ掲クルモノハ同表ノ稅率ニ依リ輸出稅ヲ課ス

第二條 附屬稅表中第五號第六號第八號第九號第十三號第十八號第十九號第二十號第二十一號第二十二號第二十三號第二十四號第二十六號及第三十三號乙ノ本島產物品ヲ内地ニ輸送スルトキハ出港稅ヲ課ス其稅率ハ第十九號ニアリテハ一圓第二十號ニアリテハ六十錢其他ノ物品ハ輸出稅ニ同シ

前項ノ物品ハ開港ニ由ルニアラサレハ内地ニ輸送スルコトヲ得ス

第三條 此規則ニ規定セサル事項ハ關稅法ノ規ヲ準用ス

三十二年府令第九十四號ヲ以テ本規則ノ施行細則ヲ定ム

附則

第四條 此規則ハ明治三十二年七月十七日ヨリ施行ス
(輸出稅率表略)

○臺灣噸稅規則明治三十二年七月
律令第三十二號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣噸稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣噸稅規則

第一條 外國貿易ノ爲外國ニ往來スル西洋形船舶開港ニ入港シタルトキハ其入港毎ニ登簿噸數一噸
ニ付五錢ノ噸稅ヲ課ス

第二條 外國貿易ノ爲外國ニ往來スル日本形及支那形船舶開港ニ入港シタルトキハ其入港毎ニ千石
以上ノモノニ在テハ五圓千石未滿ノモノニ在テハ三圓ノ噸稅ヲ課ス

第三條 此規則ニ規定セザル事項ハ明治三十二年法律第八十八號噸稅法ヲ適用ス

附則

第四條 此規則施行ノ期日ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

三十二年府令
第九十號ヲ以
テ本規則施行
細則ヲ定ム

三十二年府令
第七十九號ヲ
以テ三十二年
八月四日ヨリ
施行ス

○臺灣ニ登錄稅法ヲ施行ス明治三十二年七月
勅令第三百二十二號

朕臺灣ニ登錄稅法ヲ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

登錄稅法中土地ノ登記ニ關スルモノ及第四條第五條第八條第九條第十四條ヲ除クノ外之ヲ臺灣ニ施
行ス

○臺灣地租規則明治二十九年八月
律令第五號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣地租規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

臺灣地租規則

第一條 地租ハ舊慣ニ依リ明治二十九年ヨリ之ヲ徵收ス

第二條 地租ヲ逋脱シタル者ハ其納額五倍ニ相當スル罰金ニ處ス

第三條 本規則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

○賦課漏ノ地租ニ關スル律令明治三十三年七月
律令第十一號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル賦課漏ノ地租ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス
地租賦課漏ニ係ル土地ニ對シテハ當分ノ内發見ノ年ヨリ其地租ヲ賦課徵收スルモノトス

二十九年府令
第二十八號ヲ
以テ施行細則
ヲ定ム

第二十八類 賦課漏ノ地租ニ關スル律令

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

○契稅規則明治三十年三月
律令第四號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル契稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

契稅規則

第一條 土地建物ノ買受人質入人ハ土地建物所在地ヲ管轄スル地方廳ニ届出テ左ノ稅率ニ從テ納稅シ契尾ヲ受クヘシ

一 賣買ハ其代價百分ノ三

一 質ハ其債務金額百分ノ二

第二條 土地建物ヲ買受質入シテ三十日以内ニ届出ヲ爲サス又ハ買受代價及質債務金額ヲ偽リ脫稅シタル者ハ脫稅金額三倍ニ相當スル罰金ニ處ス(三十二年律令第三號ヲ以テ改正)

第三條 此規則ニ違犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第四條 此規則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 此規則ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

附則

第六條 臺灣受渡以前ニ於テ土地建物ヲ買受質入シテ清國政府ノ契尾ヲ受ケサル者及臺灣受渡以後

三十年府令第九號ヲ以テ本規則ノ施行細則ヲ定ム

此規則施行以前土地建物ヲ買受質入シタル者ニモ此規則ヲ適用ス但第二條ノ届出期限ハ明治三十一年十二月三十一日限トス(三十二年律令第三號ヲ以テ本條追加)

○製茶稅規則

明治二十九年十月
律令第九號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル製茶稅規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

製茶稅規則

第一條 凡ソ製茶ヲ業トスル者ハ此稅規則ニ從ヒ製茶稅ヲ納ムヘシ

第二條 製茶稅率ハ製茶百斤ニ付金二圓四十錢トス

第三條 製茶業者ハ製茶ヲ販賣若ハ運搬スル以前ニ於テ租稅檢査所ニ到リ現品ノ檢査ヲ受ケ前條ノ製茶稅ヲ納付シ其納濟證書ヲ申受クヘシ

製茶ヲ貸渡シ又ハ質入書入若ハ讓與スルトキ亦同シ

第四條 製茶ヲ運搬スルトキハ納濟證書ヲ現品ニ添付シ租稅檢査所ノ檢査ヲ受ケ其納濟證書ハ最後ノ檢査所ニ納付スヘシ

第五條 製茶業者若ハ製茶ノ仲買運送等ヲ營業トスル者ノ家屋倉庫其他ノ場所及營業ニ關スル簿書物品ハ當該官吏之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第六條 第三條ヲ犯シタルトキハ當事者雙方ヲ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處シ尙現在ノ製茶ヲ沒

二十九年府令第五十五號ヲ以テ本規則ノ施行細則ヲ定ム

收ス但賣渡シタル場合ニ於テハ其代金ヲ追徴ス

第七條 第四條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條 本稅則ノ施行細則ハ府令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第九條 製茶業者ニ於テ此稅則施行以前ヨリ持越シタル製茶ニ對シテモ仍此稅則ヲ適用ス

第十條 本稅則ハ明治三十年一月一日ヨリ施行ス

○ 保稅倉庫ニ關スル律令明治三十一年十二月律令第二十六號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル保稅倉庫ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

保稅倉庫ニ關スル律令

第一條 輸入手數未済ノ貨物ヲ藏置スル倉庫ニ關シテハ明治三十年法律第十五號保稅倉庫法ニ依ル

第二條 保稅倉庫法中主務大臣ノ職務ニ屬スルモノハ臺灣總督之ヲ行フ

附則

第三條 本令ハ明治三十二年一月一日ヨリ施行ス

第三十二年府令
第四號ヲ以テ
本令施行細則
ヲ定ム

○ 臺灣私設鐵道用地地租免除規則明治三十年七月律令第七號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣私設鐵道用地地租免除規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

鐵道用地地租免除規則

第一條 旅客及荷物運輸營業ノ目的ヲ以テ敷設スル鐵道用地ハ其地租ヲ免除ス

第二條 左ニ掲クルモノヲ以テ鐵道用地トス

第一 線路ニ當ル敷地但其幅員ハ築堤切取架橋等工事ノ必要ニ應シテ定ムルモノトス

第二 停車場及之ニ附屬スル車庫貨物庫等ノ建築用ニ供スル土地

第三 前項ノ構内ニ常住ヲ要スル驛長車長及機關方等ノ家室番人小屋等ノ建築用ニ供スル土地

第四 鐵道布設又ハ運輸ニ要スル車輛器具ヲ製作修繕スル器械場及同上ノ資材器具ヲ貯藏スル倉庫ノ建築用ニ供スル線路ニ沿ヒタル土地

○ 臺灣鐵道會社鐵道敷設用材料輸入稅免除規則明治三十年七月律令第八號

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル臺灣鐵道會社鐵道敷設用材料輸入稅免除規則勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ

發布ス

臺灣鐵道會社鐵道敷設用材料輸入稅免除規則

第一條 臺灣鐵道會社ニ於テ鐵道敷設ノ爲ニ要スル材料ニシテ左ニ掲クルモノハ輸入稅ヲ免除ス

第二十八類 臺灣鐵道會社鐵道敷設用材料輸入稅免除規則